

Asa ake

2024

# 朝明 12 総合文芸誌

通刊 57号



栃木県文芸家協会



朝明

第一二号

栃木県文芸家協会

# 目次

## 特別寄稿 野澤俊雄元会長及び小林守城前会長への追悼文

1

思い出ぼろぼろ／戸井みちお<sup>2</sup>

小林守城先生の思い出／岩本久美子<sup>4</sup>

## 創作〔小説〕

甲六の働き(一)(策謀の彼方に)／嶋

均<sup>3</sup> 5

末裔地主<sup>3</sup>／紙屋 里子<sup>8</sup>

驟雨／福富 陽子<sup>11</sup>

生きる／小林千枝子<sup>14</sup>

あれから五年／石塚 蓉子<sup>17</sup>

神輿の憂鬱／高杉 治憲<sup>20</sup>

発達障害／珠井 七海<sup>23</sup>

青の車窓／島田トミ子<sup>26</sup>

敦煌の砂／安西 悠子<sup>29</sup>

篝火／寺崎 暁生<sup>32</sup>

金鼓／徳永 楽遥<sup>35</sup>

はつ恋／鈴木あぐり<sup>38</sup>

日没／相馬 龍久<sup>41</sup>

## 〔童話〕

ふわふわ運動会／吉田

稔<sup>44</sup>

評論

逸見の北海道への旅／森 羅一 47  
スピノザの「エチカ」を読んで／名村 忠 50  
漱石、もう一つの原風景・隅田川―『草枕』をめぐる―／柴田 裕巳 53

随筆

さらば、グランド湯／松林 厚子 57  
葱と窓／小林 博 59  
青梅の季節に／古谷 耀子 61  
ちゆくしようめ／柴崎 幸子 63  
竹の命を預かりて―勝城蒼鳳先生を偲ぶ―／藤田 香月 65  
父とルビーの指輪／関根喜久枝 69  
上等な笑顔のままに／館野ひろ子 67  
新聞受け／国母 仁 71

詩

紫陽花の水揚げ／岩本久美子 74  
夢／螺良 君枝 76  
コロナ禍ウイルスの贖い／貝塚津音魚 78  
万華鏡／こやま きお 80  
美しい形に結べない／松本ミチ子 82  
撞着の創刊号／高田 太郎 84  
稲田で／村上 周司 86  
龜山荘／森 秀夫 88  
街道／神山 暁美 90  
運命／戸井みちお 92

短歌

風に残して／大島 孝子 94  
ちいさな砂／唐澤るみ子 95

俳句

離りゆくもの／神野 規子 96

昭和・平成・令和を生きる／高橋 淑乃 98

一日はじまる／福澤 悦子 100

植物は知性をもつてゐるのか／山崎緋紗江 102

抱擁／佐藤 孝子 97

アイノカタチ／田村世津子 99

療にはたつみ／増田 律子 101

人参／石井 光 103

青田風／渡邊 公之 105

曼殊沙華／人見 靖子 104

川柳

下り坂／善林 真琴 106

いつの間に／松本とまと 108

老活／水上 義明 110

神の通り道／石寄 敬子 107

明日へ／柳岡 睦子 109

うまく生き延びても／三上 博史 111

特集 「再スタート」

何とかなるさ／松林 厚子 114

黄金の七十代へ／小林千枝子 116

教え子たちの再スタートそして私の再スタート／こやま きお 117

トランジット待機中／福富 陽子 115

すべてを水に流す?とは／高橋 淑乃 118

喜寿を過ぎて初めて知ったこと／高杉 治憲 120

小説家になりたい／石寄 敬子 122

物を書く／福澤 悦子 124

超人と言われているらしい／館野ひろ子 126

新しい世界へ／紙屋 里子 128

働くことを止めて／名村 忠 130

街道／神山 暁美 132

雄叫び／国母 仁 134

嫌な再スタート／三上 博史 136

鳥になる／珠井 七海 119

流れ／人見 靖子 121

やっと会えた／関根喜久枝 123

図書館からの新たなスタート／藤田 香月 125

引っ越し先で根を張って／島田トミ子 127

再スタートとは、あり得ないこと／安西 悠子 129

『Dolphin』が始まりだった／寺崎 暁生 131

再々スタート／佐藤孝子 133

俳句と書の二刀流／渡邊 公之 135

令和4年度事業報告 事務局長 三上 博史 138

栃木県文芸家協会規約 140

栃木県文芸家協会会員名簿・役員名簿・『朝明』編集委員 142

編集後記 146

■表紙写真 人形「旅する仲間」 さきやみつえ



特別寄稿

野澤俊雄元会長及び小林守城前会長への追悼文

## 野澤俊雄元会長への追悼文

### 思い出ぼろぼろ

全てにおいて穏和温厚な人だった。如何なる場合でも声をあげることにはなかった。おだやかに語り、静かに人の心をなごませる人だった。

いずれ行く道とはわかっていても、過去形でしか語れなくなってしまうた侘しき、切なき、悔しき。同年代なのにもう逝ってしまったとは…。

野澤俊雄（やはり「さん」をつけないといけないか）さんが亡くなったとの報せをきいたのは八月五日（令和四年）午後だった。何時入院したのか、何で入院したのか全然知らなかった。コロナ禍の為集まりがなく長い間会ってなく様子は全然知らなかった。コロナ禍は人の絆を断ってしまった。報せをくれた貝塚さんにきいても何もわからぬ。八月二十八日三十五分逝去十日葬儀と言うことだけである。

十日葬儀に参ずる。未だ三、四人しかいなく、私はことわりなく置かれてる棺にすたすたと向かった。そこにはいつもの変わらぬ野澤さんが眠っていた。頬つぺたをたたいた。「何んでだよう。どうしてだよう。」私はだんだん腹が立ってきた。しゃべらないことに腹が立った。黙っている顔に涙が出た。席にもどったまま葬儀がどう進んだか頭は重く膜が張

り思考は止まったまま時間が経っていた。思い出そうにも何も思い出せなかった。最後のお別れと言う言葉にあわてて立ち上り棺に向かった。花をちぎって顔から胸から腹から、あなたには白よりも紅い花、紫の花が似合う。置いていった花で、棺はおおわれた。全身から力がぬけていった。

野澤さんと初めて会ったのはいつ頃だったのか、記憶のないのはおつむの悪さ、記録のないのは怠惰のあかしで、私が栃木へ来たのは昭和三十六年六月だったのはおぼえているからそれ以後であるのは間違いないと思いつつ、戸井みちお詩集に長文の解説を書いてもらったのを思い出し、調べてみると八月十三日と書いてある。平成五年のことである。それから三十年である。野澤さんは昭和四年、私は二年生れだから二年近くの差はあるが言わば同年代、同じ時代を生きてきた人間である。全てのこと何となしのちかしみを感じ、底の底まで知り合っていた感じがしていた。実際二人だけでよく飲んだ。二次会はいつも二人だけで馴染とおぼしき老夫婦の居酒屋の隅のテーブルでなんとなしのおしゃべりで時間をすごした。時にもらした本音は戸井さんは他所から来た人だし安心して物が言えるからと。それなりの苦勞があったよう

戸井みちお

ある。別れる時私はいつも野澤さんの後姿に一抹のさびしさを感じていた。おだやかな静かな人だった。私はいつもう。同時代の人間はなんとなしの後悔と生きることへの罪を背負っているようなおそれに、世の為人の為にと野澤さんも動き回って生きてきたのではないかと。野澤さんはもういない。でも星にもならず風にもならず私の胸の底の椅子に今も坐っていてくれている。あの眼鏡と帽子とシャイな顔と。

静かな人だった。清涼な人だった。と、過去形でしか言えなくなってしまうた淋しき、切なき、悲しき、どうしようもない苦しき。

## 小林守城前会長への追悼文

### 小林守城先生の思い出

岩本久美子

新年早々、病に倒れ療養されていた小林守城先生の訃報が入ってきた。常々「人生二毛作」と語られていた先生。まだまだ文学の道で活躍される方なのに、残念の一言。一つの歴史の幕が降りたという思いがする。

私は、小林夫人の志津子さんと高校時代の同級生だった事もあり、先生の国会議員時代から応援していた。その後、鹿沼市の教育長に。退任後は鹿沼市文化協会の副会長に就かれ、そして「二行の詩があれば生きられる」の言葉を掲げて、人生を言葉によって拓かれた。正に人生二毛作の言葉通り。

私も鹿沼市茶華道協会の会長から文化協会の副会長となり先生とは、会議、会議の日々を重ねていた。先生の文化に対する向き合い方はお見事であり、鹿沼市の文化発展に情熱を注がれていた。当時、会長副会長五人体制で私は紅一点。先生は熱血漢でもあり、議論が伯仲して、「待って、待って」と割って入った事も今となつては、懐かしい思い出となつて残っている。

私自身若い頃より何時かは文学の勉強をしたいという思いがあり、詩の世界が感覚的に自分に合っている感じがしていたので、小林先生の主宰されていた鹿沼詩友会に詩を書き、持つて行った。当時の詩友会は、まさしく文学サロンの雰囲気があり今振り返っても貴重な存在感を持つていた。皆楽し

い時代でもあり、先生も地域の文学への啓蒙に情熱を傾け充実されていたと思う。

ある時、高齢の会員がいつものように身の不幸不平を延々と語り出した。皆、毎度の事なので辟易していると、先生は「聴いてあげようよ」の一言。人権主義を貫いた先生の一面を垣間見た気がした。

先生は常々、「謙虚さと変革への志を持ち続け、寒い時代の先に光を見つけ出せるかどうか、そんな言葉のたたかいはして行こう」と言われていた。又、これからの世界の心配事は、核戦争だとも。今、ウクライナへの侵略戦争を目にして先生の思いは如何か。まだまだ生きていて良かったかった。皆の道しるべが消えてしまったという思いは、多くの人々が抱いた事であろう。

唯、先生の最後は、志津子夫人の献身的な介護のもとに旅立たれ、見事な志津子夫人の姿には誰もが敬服した。そして先生の会葬時のご子息からの挨拶の言葉を耳にした時、「先生、ご立派な一行の詩、この世に残されましたよ」と、深く深く思い至った。

「小林守城先生、ご苦勞様でした。そしてありがとうございます」  
「安らかにお休みください」

# 甲六かろくの働き (一) (策謀の彼方に)

嶋 均三

むかし「柴元甲六」という文武に優れた武将がいた。各地を流浪して、ようやくこの地の有力な豪族「五科遠之助」に仕えていたが、どういいうわけか日の目を見ない。五科城内に同僚は次々と抜擢されどんどん上役についてゆく。

甲六はそれなりに器量があり勤めに落ち度はなかった。

甲六は胸の内で感じていた。

「この城は己のような流浪の身で、途中から雇われた者には要職は与えぬ。立身の夢など持てない城なのだ」

いっそ他国で良き殿に仕え、己を試してみようという思いが胸の内に広がる。いつもの癖だ。こうして「甲六」という武士は各地を転々として既に壮年の域に達していた。

かくして、甲六はここでも又暇を願ひ出た。だが苦勞知らずの城主・遠之助からはその許しがなかった。

柴元甲六はそれから十日後、思慮の末に荷物をまとめ、深夜に出奔した。そして遠国の「清満城」に入り「清満藤道」という若い殿さまに雇われた。甲六は喜悅して平伏した。

雇用は叶ったが、実はこの城が拙かった。実は先々代の頃、五科家と土豪との縁組みに際し、ここ清満家が横車を押し、邪魔をしたという理由で双方が争った過去があったのだ。

こんな事情もあって、甲六が清満城に入ったことを知った五科遠之助は激怒して柴元甲六を引き渡せと使者を立てた。

これが敵わぬなら一戦を交える、との脅しをかけた。しかし「清満藤道」、この引き渡し要求に屈せず直ちに蹴った。

「一旦雇い入れた男は、我が城内の将である。これに難癖をつけるは不条理なり。これを理由に攻め込むというなら望むところである。いざ参られよ！」

そもそも家来が何らかの失態にて出奔した時点で地方に「雇い止め」の策を講じるべきであろう。何の手だてもせず

に・・当方は全く知らぬことである。強い口調で返答した。

さあ、話がこじれて二十日ほど経過した。双方一步も譲らずいくさ仕度を整える事態に発展してしまった。もはや因縁の一戦。だが、五科と清満、装備も兵の数も雲泥の差がある。これを知った柴元甲六は悩んだ。己一人のために、このように争いの事態となり、清満どのに申し訳ないと。

かくして甲六は、殿の前に平たく身を沈め、この城から身を引きたいと丁寧に申し出た。しかし、城主・清満藤道、「それは筋が通らぬ！」

と、これも許されず甲六は一人悶々とした日をすごす。こうしたなかで、ある中間豪族が和議の仲介者として名乗り出た。

「意地と意地の張り合い、愚かなこととござる。兵の命は尊い。地方安寧のためここは双方銚を収めては如何でござらう」

だが、和平案は完全に潰された。不思議なことであった。もはや双方に折衝の余地はない。この地方にとつてかつてない惜しまれる状況が出現してしまったのだ。その裏には恐るべき隠された事実があった。何と！遠国の大々名が暗躍しており、双方を裏から煽り続けていたのだ。かくして藤道は語る。

「もはや引くことは敵わぬ。五科軍の兵力は多大であろう。だが戦略となれば別である。」

こうして、いくさの原因となった柴元甲六を守るべく「清満城」は軍議を開いた。何と、この壮年の甲六は既にこの城に馴染んで末席にあった。これまた不思議な事に誰一人不審の眼で見ることがない。この雰囲気はどう見るべきであろう。

さあ、軍議のすえ先ず、地理的に近い豪族である「山並衆」に近づき連携をとる戦略を立てた。山並衆とはここ清満の地から少し離れた山岳一帯に暮らしている土豪であった。彼らは鎌倉時代からこの地に勢力を持つ傭兵集団である。

豪士、地侍たちを巧みに使う異能の一族であった。数丁の鉄砲と槍兵五十人を含む士気の高い兵で武装しており、首領の命令に服従している。侮れない集団。いざとなれば五百近い動員力をもっている。

清満藤道は、ここに目をつけた。この山並衆を味方につけることができれば戦略上有利な戦いが可能となる。この古くからの集団の存在は、当然甲六も知っていた。この山並衆は自領が攻められなければ黙殺するという、独自の集団であった。他国に興味を示さない。これが、この生き方が山並という集団をずっと守ってきたのだ。

二日後、甲六は使者を命じられ清満城から山並へと向かうはめとなった。諸々相談のうえ馬上の使者となり息を切つて

急いだ。とにかく刻がない。敵も同じ策を考えるであろう。

「自領が攻められない限り拳兵しない」

甲六はそれを考え続けて手綱を捌いた。

かくして、別段怪しまれることもなく山並の砦に入った甲六は、首領と面談のすえ、今までの経緯を述べた。さらに、

「我が清満城と、ここ山並の人々は五代に亘り、ずっと今まで平穩であり互いに認め合つて暮らして参つた。今後互いに和をもって共存を願うものでござる」

そう切りだして、

「実は敵となった五科勢は刻を置かず、我が清満城を攻めて参りましょう。地続きのこの地、山並殿も早晩いくさに巻き込まれるは必定。となれば安寧のこの地方のため、双方協力し合つて遠国の敵を追い払うことに同意願いたい」

そう述べて約半刻ほど会席した。この山並の首領の名は「條太郎」。多くを語らず甲六の言葉に聞き入り、甲六の心の奥を読むかのようにじっと眼を見た。(戦わずともよい。軍を制御し敵を引き付けてほしい)だが返答をひかえている。

甲六はここで咄嗟に「米百俵」の提案をした。山並の地は文字通り山と畑の土地。米の生産量は少ない。それを讀んでの強かな交渉である。一米百俵を与える。

相手はこれに乗った。甲六はみごとに使者の役を全うしたのだ。帰城して復命する甲六は城内にて評価が変わった。

「甲六は・・なかなか使えるのう」

藤道は老臣に漏らしたという。さらに敵状に詳しい甲六をいつそう身近において、五科軍の状況を具に問うた。

こうしている間に各地に放つた問者が戻った。

「申し上げます。奥元勢が、が五科城に加勢！」

「何と！」

ここ清満城と五科城の中間地点から西側、尾根伝いに進むと傾斜した畑地の裏側に「奥元治平」という豪族が根を張りつつあった。ここ二十年ほどで勢力を広げた。

肥沃な田畑をもつ「奥元」。この「奥元」は、村々に多大な税を課し、容赦なく取り立てていた。

この奥元が治める地は昨年、不平が充満し一揆が起こるやに見えた。一揆勢が万端整え動き出す前夜・村々に密偵を放っていた城主「治平」は即座にこれを鎮圧したのだ。

こういうことを直ちに徹底して繰り返し行つたため人心は離れた。特に奥元の庶流、三者に反乱の兆しが窺えた。

これを聞いた五科はすかさずこを狙った。先ず、奥元に敵対するその地の地侍と結ぶため金銀を使い画策を命じた。

かくして、宗家・奥元と不仲の立場にある庶流に近づき巧みに交渉し味方に引き入れた。やがて、裸にされた奥元も五科の配下に入らざるを得なくなった。すべては「欲」である。

不思議な動きであった。世間は「金に転んだ奥元」と噂した。武力を背景に多くの銭が動いたと。

ともあれ他を圧倒する武力と財力をもつ「五科家」は、いっそう味方を増やし清満城包囲に成功してゆく。

さあ、こうして大豪族五科遠之助、万端整え、大軍をもつて一気に攻め込む機を狙っているのだ。それは恰も勝利が当然とばかりの悠然たる態度であった。

そして、こちらは寡兵の清満城。決戦の前に確かな策を講じ一丸となって士気を上げなければ勝ち目はない。城中にあつて必死に軍を整える甲六。頭脳は速度を上げて回転する。

翌日、ついに敵軍・五科が動くとい報が入った。この清満城を攻める前に進軍途上のあの山並勢を攻撃するという確かな情報が入る。清満藤道、直ちに六百の兵を率いて出陣した。

地理に詳しい清満軍。敵のウラをかいて間道をひた走る。

北上する途上、五科城の東南に敵の出城「東科根」がある。ここは敵にとつて守りのかなめ。いわば要衝の地。清満は甲六に兵二百ほどを与え出城の攻略を命じた。(事実は五十程)五科軍としては出城が攻撃されるなど想定外であった。

甲六は東科根の出城に精銳を率いて迫つたのだ。盛んに物見を放つて様子を窺う。出城に通じる道々の木々を切り払い、大袈裟に攪乱の動きを見せたのだ。これは当然敵將に伝わる。すると山並衆と睨み合う敵の大將五科は早馬を飛ばした。案の定、本城の留守部隊に兵百五十ほどを割いて出城の救援に向かうよう命じた。みごと、甲六の術中に嵌った。

さあ、これを知つた清満軍本隊、すかさず動いた。満を持しての素早い行動であった。清満藤道一気に駆けた。手薄となつた五科本城を西側から包囲を開始し包囲網を狭めてゆく。

既に仕込まれた間者が動き、敵の内訌、相剋を図り内側から城門を開いた。大手に本隊を集中させ搦め手から兵八十雪崩を打つて果敢に攻め込んだ。士気は高く破壊力がある。夜になると火をかけたから五科本隊が帰城する前に城は落ちた。こうして甲六の一隊を陽動作戦とした策は成功した。

信頼度の高い壮年の武將「柴元甲六」。今、陣羽織で床几にある主・藤道の姿を仰ぎ見た。痺れるほどの感動であった。世上は語る。

「清満家は寡兵だが多くの間者、使僧、連尺商人を他国に潜ませてあつた。詳細な情報が味方を無駄なく動かし」

そして最後に「柴元甲六」は、かねて若き頃より一貫して「清満藤道」の忠実な家来であつたと。怖ろしきは戦国。

# 末裔地主3

紙屋 里子

大叔父の見舞に行った次の日は、空は厚い雲に覆われ、細い雨が降っていた。健次は何処にも出かけず朝から家にいた。親たちも、雨が降ると田や畑の仕事には出かけない。雨に当たって風邪でも引いたら大変だと分かっているからだ。

夕方六時頃も、まだ雨が降っていた。電話が鳴ったので受話器を取ると、鈴を振る様な声が聞こえた。

「もしもし、金田です」

「健次さんね、円香です。検査結果が判ったので、お知らせしたいのです。これから病院にきて貰えないでしょうか」と聞く。本当はそんなことを知らせて来なくてもいいのだが、一人で不安なのだろうか。

「分かったよ。それじゃあ、今から病院に行くよ」と軽く受けた。彼女の気持ちの支えになるかも知れない。

「親父、病院にもう一回行って見て来るよ」と横になっている親父に声を掛けて、立ち上がった。

「明日でいいよ。妾が電話をかけてきたんだろ。昨日行ったんだから、続けざまに行かなくてもいい」と渋い顔をしている。どうしてそんな顔をするんだろうと不思議だった。

「だけどなんだか心配だよ。俺、今から一寸行ってくるわ」「行かなくて良いと、言ってるんだ」と親父が少し怒ったように言ったので、食事もせず飛出出した。雨のせいでは

うす暗くなっていた。

十五分程で病院の駐車場に着いたが、かなり暗く、雨脚がきつくなっていた。傘を入れておくのを忘れていたので病院の入口に向かって走った。入口に付くと内側に彼女が立っているのが見えた。

「きつと来てくれると思っていましたわ」と駆け寄ってきて嬉しそうに笑った。

白いタオルを渡してくれたのには驚いた。雨に濡れて来る事まで考えていたのだ。こんなに心配りする人はあまりいないと思った。

「叔父貴の詳しい診察結果が出たのですか」と拭きながら聞いた。

「ええ、そうなのです。心臓も悪いですが肝臓も弱っているそうです。しばらくは入院が必要だと医者がいっています」

とても暗く悲しそうな様子で言うので、抱きしめてやりたような気がした。でもそんなことは出来ない。

「大変だね。今、叔父貴はどうしているのですか」

「疲れてよく寝ています。物音を立てると、起きるので外に出ているのです。一寸会ってやってください」

「それじゃあ、病室に行くよ」

二人でエレベーターに乗った。俯いた顔は少しかげりが

あつて昨日よりも一層綺麗だと思つた。二階なので直ぐに着いた。病室に入ると、大叔父はスースーと寝息をたてて眠っていた。軽い寝息を立てている様子は、きつと良くなると思ふような健康的な感じだった。しばらく寝息を聞きながらベッドを挟んで差し向かいで椅子に座っていると、二人で親を見ていた様な気持ちになつた。

「目覚めそうにないわ」と彼女が笑いながら囁いた。

「それじゃあ、俺は失礼するよ。少しでも寝させておいた方が良いからね。寝るのが一番の薬だつていうからさ」

「そうね、そうしましょう」

病室を出ると、廊下は電気が煌々と付いているが、誰もいなくて、周りの病室からは物音一つしなかつた。肌寒いような心寂しい様な感じがした。彼女が傍に寄つてきて、小さな声で聞いた。

「お食事はもうお済みですか」

「いや、これからです」

「病院の食堂がまだ開いているので、一緒に食べましょう」

「お袋が食事を作っているから一緒に出来ないよ」

「そう…残念ね」

彼女は、無理強いはしなかつたが、なかなか旨く誘いをかけてくると思ひ驚いた。いくら何でも急に外で食事をしてきたら、折角作つてくれたお袋が可愛そうだ。

円香は、貞三の妾になつてもう十六、七年になる。彼女は高校を卒業してすぐ大叔父の店に店員として勤め、直ぐ愛人になつたようだ。

それと同時に、貞三が、自分の家族と住んでいる家を出て、彼女と暮らした。五十七、八歳だったのに、もう男とし

ては元氣盛りだとは言えないが、叔父貴は違つたのだからか。彼女の家は両親共、早くに病気で亡くなり、子供だけだった。姉は大人になり勤めていたが、姉の月給だけで暮らすのだから大変だつたのだから。彼女は高校だけはと頑張つて卒業したようだ、姉が一生懸命に面倒を見たらしい。

妹や弟が合わせて四人いた。まだ小学生や中学生だったので大叔父は四人姉弟が高校へ行く学費をみんな出してやつたという。弟の一人は勉強がよくできたので大学にいったが、その学費まで負担している。まるで親代わりになつて面倒をみた。自分の本當の家族を捨ててまで妾の家族を見てやつたのだが、偉いのか馬鹿なのか、よく判らない。四十歳も年がちがうのに、貞三から離れられないのは、そんな事情もあるのだから。

見舞いに續けて二日いつてから、三日に一度は、病院にいる妾から電話がかかつてくる。感が良いのか、いつも電話の傍に健次がいるときにかかつてくるのが不思議だ。どうやって、察知するのか判らない。

「もしもし、健次さん。今日はね、大変だつたのよ。食事が氣にいらなひと言つて怒り出したの。コーヒーが好きだから、作つたら機嫌が直つたのよ」

家族でもないのに、なんだか、取り留めもない話をする。「そうかい。大変だつたね。コーヒーは、飲んでも大丈夫なのか」と応じた。

「大丈夫と思ふわ、好きだから。あの人仕方ないのよ。ねえ、また来て下さらない」と旨く誘つてくる。

そんな調子で話してきて、見舞に来る様に誘いかけるが、行かなかつた。病院の食堂とはいへ食事まで一緒にしようとし

誘ってくるのはいくら何でも近づきすぎだ。

顔色も悪く直ぐ疲れて眠る年取った大叔父の事が気にはなるが、妾に心を奪われてしまいうる自分も恐かった。彼女は旨く誘いを掛けているとは思っていないかも知れないが、そう取れる。健次にはプラトニックラブは出来ない。すぐに手をだしてしまふ。今までは、それでもなんとか切り抜けてきたが今度はちがう。もしも妾に手を出したりしたら、病氣だとしても、大叔父は絶対に許さない。どんなことが起こるか知れたものではない。

そんな思いもあり二カ月ほど、電話だけを受けていた。

朝から、カラリと晴れた日だった。

「貞三の見舞に儂も行くよ。病院へ乗せていってくれ」と親父が言いだした。もうそろそろ退院するかと思っているが一向にその気配がないので心配になったようだ。

「それじゃ明日の朝、行こうか」

「そうだな。それで良いよ」と相談が決まった。

次の日も、爽やかな良い天気になった。

「見舞に行くぞ」と親父を車に乗せ、病院へ走った。

病院の駐車場に車を止め歩いてみると、赤い椿の花が、地面を赤く染めていた。花が一つ、目の前で落ちた。何故か、二人とも落ちた花が気になり、じつと見た。

病室に入ると、二カ月前より少し顔色の良くなった大叔父がベッドの上に座っていた。

「貞三さん、座れるのか、元氣そうじゃないか」

親父が嬉しそうに笑顔でいう。あまり笑わない親父だが大叔父の元氣そうな様子を見てホツとしたのだろう。

「やあ、権十郎、すまないねえ。わざわざ来てもらって」

大叔父のしゃべり方も、この前とはずいぶん変わり、聞きやすい。良くなってきているように見えたので、嬉しかった。

「顔色はいいじゃないか。そろそろ退院かい」

「いいや、もう少しばかりそうだ」

「そうかい。すっかり治さないと後が怖いからな」

親父と大叔父は、暫くぶりに逢ったので色々喋りたいようだと思ひ、廊下に出た。すると円香が後ろからついて来て、横に来る。

「健次さん、お忙しいのですか」と絡み付くように囁く。

「そんなこともないけど」と言葉に窮しながら答えた。

「時々、顔を見せてやって下さいな」

大叔父のためのような言い方だが、ことば柔らかに目は食い入るように誘い迫ってくる。

「両親が年取っているから、なかなか出られないけど、また来るよ」

彼女がにっこりして頷いたが、一寸困るなあと思った。話しているとき、親父が病室から出て来た。

「帰ろうか、病人を疲れさせちゃいけないからな」

「叔父貴、疲れたのか」

「ああ、横になった」

親父と話していると、彼女は傍で黙って聞いていた。病室のドアを開け、大叔父に「帰るよ。早く元氣になってよ」と挨拶をするとしんどそうだが少し笑顔になった。

「ありがどうよ」と言うが、消え入りそうな小さな声になっていた。まだ退院するのは、日数がかかりそうだと感じた。

妾も親父にお礼を言っただけだった。

駐車場の入口では、赤い椿がこれ見よがしに揺れていた。

## 驟雨

福富 陽子

人からどう言われても、家を売ることはできなかった。

三年前、突然、高層ビルの建設計画が持ち上がった。周囲の家々は老夫婦だけが住む元商店、閉じたままの簡易旅館や理容店など、町内の土地が次々と買収されはじめた。

「高値で言ってくるうちが花だよ」と元商店街の会長は交渉側に抱き込まれたのか頻りに電話をかけてくる。

「往く先、土地や家まであの世に持っていけないんだよ」「お金だつて持つていけませんよ。売りません、絶対に」

そんなやりとりが繰り返されるにつけ煩わしい。

昨年から建設予定地内で部分工事が始まった。四角形とはいかない。立ち退かない者に対して圧力を示すように複雑な形のまま防音板で回りを囲っていく。

朝早くから夕方まで重機の振動が響く。家を壊す音、廃材を運び出していくダンプカーの音。砂埃がひどい。水を撒いて工事は続くが、締めきった私の家にもその埃が舞い込む。

——あの日、両親は何年か振りで伊勢参りを兼ね三泊四日の旅行に出かけた。結婚二十年という節目に「旅行でもしてきたら」と姉と私が勧めたのだった。我が家は小さいながらも味噌や麺などを売る商店を営んできた。留守番で配達はできなくても量り売りはお手の物である。

しかし、旅行の間、父は甥である高史に店を任せると言い

出し、レジの打ち方や得意先、配達の手順も教えた。

高史のことは私も子どものころから知っている。高史が高校を卒業する前に父親を病気で亡くしていた。高史はひとりっ子で母親はずっと以前に病死していたから、なにかにつけ私の父も気を配っていたが、周囲の心配を他所に高史は高校を出ると農業を継ぎ、荒れかけた田を整備しよく働いた。

父の甥といっても私より十ほど年上でとても大人に見えた。しばらくして高史は見合いで結婚した。相手は目鼻立ちのはっきりした女性で、こんなに綺麗な人が世の中にいるものなのかと当時、子どもだった私も姉も母までも驚いた。

「高史は幸運な男だ。亡くなった兄さんも安心するだろう。米作りも安泰だ」と甥の結婚を父は心から喜んだものだ。そんなある日、高史に事件が起きた。美しい妻が家屋敷の権利書を持ち出し勝手に売却したあげく逃げてしまった。

村全体が騒然となる出来事だった。妻は密かにすべてを自分の名義に書き換えていたという。売った相手はリゾートルンドを名乗る観光会社だった。

高史から相談を受け、私の両親も弁護士や土地売買に詳しい人に尋ね歩いたが、売却の取り消しはできなかった。

父は高史を心配した。全財産を失い自我没却で自死でもしたら大変だと高史を呼び寄せ、近くのアパートに住まわせた。

高史はしばらく潜むように暮らした。母が一日も欠かさず三度の食事を運んだが、部屋の中で寝てばかりいる父の甥は疎ましくさえ思うようになった。一年近くも高史の状況は変わらなかつたからだ。甥への親心ともいえる父の愛情は月日を増すごとに金銭的、精神的負担に変異していく。それでも父は高史の身を案じた。父にしてみれば高史は初めての甥、いくつになつてもかわいひ甥だつた。

父たちが旅行に出かけた土曜の昼過ぎ、高史が店にやつてきて、「お馴染みさんの名前、配達先、叔父さんから詳しく聞いたから大丈夫。俺に任せとけて」と笑つていた。

あの日、姉も私も夏休みに入ったばかりで気が緩んでいた。私は友だちの家で夕方まで宿題をする約束があつたから出かけてしまつた。

日中は晴天で暑かつたのに、空模様が急変し夕方になると雨が降り出した。私は友人宅から急いで自転車帰宅した。

背中は雨にしたたか打たれ、そのまま浴室に行こうとしたその時、「ユミちゃん、……ユミちゃん」と奥の和室から姉の絞るような声が聞こえた。様子がおかしい。走り寄つて襖を開けたとたん、——私は事の重大さをひと目で理解した。

「お姉ちゃん！　なんで！　こんな……」  
着ていた服は部屋の隅に放り投げられ、姉の身体はガクガクと震えていた。

高史だ！　父たちの恩義も無視してこんなことを！

「あいつ、まだ部屋にいる」姉はそう言つて二階を指さした。足音を忍ばせ階段を上がると正面の扉が開け放たれたままだ。酒瓶が転がっている傍らで高史が下着姿で横になつてゐる。その肢体はまさに鬼畜の姿だつた。思わず、「うっ」と

出た私の声に反応し、ふっと高史は上半身を起こした。

「なんだよ。おまえも同じ目にあわせてやろうか」そう言いながら立ち上がり、ふらついた身体で飛びかかるようにこっちに向かつてきた。階段を背に恐怖で立ち尽くしながらも私はとつさに身をかわした。——それは、一瞬の出来事だつた。

高史は頭から階下に落ちていった。肉体を打つ鈍い大きな音がしたが雨音で掻き消された。立ちすくんだまま見下ろしていたが、墮ちた物体が動き出すことはなかつた。

長い時間が経つた。雨音は雷鳴を伴ひ強さを増していく。

茶の間でテレビをつけ、出かける前に母が大きな鍋に作つていったカレーを食べた。姉のスプーンを持つ手は震え皿を不規則に鳴らした。私も舌を噛みそうになりながら、母の味にしがみつくように食べた。

恐る恐る階段の下を見ると、頭が下向きになつたままの鬼畜の姿があつた。うっ血しているのか顔面が黒ずんでいる。「やっぱり警察に……」

「なぜすぐに電話しなかつたのか、他にもいろいろ聞かれる。パトカーが来れば近所の人だつて集まつてくる」

「じゃあ、どうしたらいいの！」姉は泣きながらヒステリックに叫んだ。それからさらにしばらくの間、姉も私も黙つてテレビの画面をただ見つめていた。

「どんなでもないことになつてしまつたね」

「私たちは悪くない。悪いことをしたのはあいつだよ」

姉がひるんでも、私には正義しかなかつた。高史の死は自業自得だ。強風に晒された風鈴の叫びが耳に届く。稲光に続いて雷鳴が轟く。言葉は交わさずとも心は決まつた。目を合わせると姉も迷いを振り払うように頷いた。

店と母屋の間の『樽蔵』と呼ぶ土間に灯かりを点けた。

「ここなら——、樽をどかせば土だから」

ブルーシートを広げた上に私たちは重たい味噌樽をいくつか移動させた。でこぼこした土間はとても固い。

「埋めたものが腐ると土が一気にズドンと下がるらしいよ」  
姉は震えているのか声が裏返った。

「そうなったときに考えればいい」私に迷いはなかった。

ひたすら穴を掘る作業は明け方まで続いた。朝、店を開けないと近所から不審がられる。私たちは汗まみれになりながら一心不乱に穴を掘った。鬼畜の身体から出血していなかったのが幸いだった。満身の力を振り絞り、冷たくなった物体を裸にして深い穴に墮とした。戻した土の上で何度も飛び跳ね表面を固め、あたりに飛び散った土を丁寧に掻き集めた。

樽を元の位置にそれぞれ納め直し、高史の靴や服は新聞紙で包みさらにビニール袋に入れた。後はゴミとして捨てるだけだ。でも、まだやっておかねばならないことがある。それは高史からの手紙だ。封筒にアパートの鍵を入れ、父宛てに手紙を出す。——昔の友人を訪ね、職を探し生活をやり直すこと。気持ちが変わらないうちに大阪へ行くこと決めたから、アパートもそのままの状態で行ってしまうが許してほしい、といった内容をいかにも投げやりな字で綴り封をした。

自転車でわざわざ駅前ポストまで行って投函した。

火曜日の夕方、両親が旅行から帰ってきた。あえてそのままにしておいた郵便受から父が手紙を取り出し封を切った。

「高史のやつ、俺たちが留守の間に行ってしまうとは」

「会わずに行きたかったのかもしれないね」父も母も高史の失踪を微塵たりとも疑うことはなかった。

夫婦水入らずの旅は思った以上に楽しかったようだ。私と姉はいつも以上に陽気な娘たちを演じ、土産話を聞いていた。

それから——。私たちの暮らしは穏やかに続く。何ごともなく。姉は大学の同級生と結婚し、今では孫も生まれ他県に住んでいる。私は高校を卒業後、本格的に麴や味噌について勉強した。やがて黒味噌や白味噌を仕込み、麴漬けの野菜や根菜の商品を店で売るようになった。遠方から客が来てくれるほど、ますますの評判の店となった。

——さらに三十年。両親はそれぞれ老衰で他界していった。あの夏の出来事は妄想だったのかと思うときもある。年月とともに記憶は揺るぎ、色褪せていく。

高層ビルに囲まれ一切の日当たりを奪われようとも、私は自分の日常を淡々と明日へと繋いでいくだけだ。

かたくなに立ち退きを拒否していた郁夫が先ほど店に顔を出した。私と同じ、ひとり者の郁夫はかくれんぼや鬼ごっこをしてよく遊んだ幼なじみである。

「もらえる金、けっこう良くてさ。やっぱ俺も移るって決めた。言えた義理じゃねえけど、ユミちゃんは引越すわけにいかねえんだから、とにかく頑張れよ。じゃねえと……」

「じゃねえと……」の先を郁夫は言わなかった。  
四十年前のあの日、郁夫は私と姉のやったことをどこからか見てしまったのだと知った。

# 生きる

## 小林千枝子

風が心地良い五月のことだった。道子は夫と二人で散歩に出た。夫の幸雄は半身不随の身。坂道を降りて遊歩道に出るまでは、幸雄の胴を専用のバンドで車いすに止めて、道子はぎゅっと車いすの手押し部分を握ってゆっくり歩いた。遊歩道は木々が青々としていて、花もあちこちに咲いていた。道子は車いすのバンドを外した。

「道子、疲れただろう」

「うん、疲れた。いい運動になるよ。幸さんは楽ちんだね」

「うん、楽ちんだ。そこにベンチがある。少し休もう。躑躅ツツジがきれいだ。文字通り足を止めて見たくなる躑躅だね」

ひと息つくくと、道子はしゃがみ込んで、幸雄の麻痺した方の脚を揉んだり動かしたりしはじめた。

「道子ももう七十歳だろ。十年前、中学校の還暦クラス会をやって、友だち二人が家に来たじゃないか。芳枝さんだったかな、いっしょに暮らす義両親の介護で大変だって言っていたよね。もう一人は何て名前だったかな。逆にえらく元気だった。あの二人、今ごろどうしているかなあ」

「そうだね。あれから十年たったね。あのとき私はまだ現役の高校教員だった。もう一人の友だちは啓子さん。二年前だったかなあ、お母さんが亡くなったんだ」

この十年のできごとが走馬灯のように道子の脳裏をよぎっ

た。同じく高校教員をしていた幸雄に続いて道子も定年退職した。娘二人も母親になった。夫婦ではじめての海外旅行にも出かけた。いっしょに映画を見に行つて、若いころのデートが再現したような気分になった。でも、道子がちようど六十五歳のとき一変した。幸雄が脳梗塞で倒れ、緊急手術により一命はとりとめたものの、極度の後遺症が残った。左半身不随になり、リハビリをしても、嚥下機能も排泄機能も元に戻らず、ほぼ全身の介護が必要になった。胃ろう造設をして、栄養剤を注入することが幸雄の食事となった。幸いにも言葉や知能の面は正常だった。家を車いす仕様に改装して、広々としたリビングルームの一角に介護用ベッドを据えた。幸雄が退院してくると、道子はつきつきりで幸雄の介護に務めた。道子は食事も読書もそこで行い、夜は幸雄の隣に布団を敷いた。しかし幸雄は、もう自分の人生は終わったようなことを言い、道子に当たり散らした。栄養剤注入の際に管を抜こうとしたことも、夜中に右手を踏ん張ってベッドから落ちようとしたこともあった。おむつ交換の際に右脚をバタバタさせて布団のあちこちが便で汚れたこともあった。

今では、自宅でリハビリを受け、道子が幸雄を介護しながら落ち着いた夫婦生活を送れるようになっていて。嚥下リハビリの効果も出てきて、アイスクリームやプリンを少しずつ

食べられるようにもなった。

いつの間にか幸雄の左脚を揉む道子の手が止まっていた。幸雄が言った。

「俺もずいぶん荒れていた。道子も辛かったろう。もう大丈夫だよ。リハビリでどこまで回復するかわからないけど、道子を追い詰めるようなことはしないよ」

秋彼岸を過ぎたころ、中学校の古希クラス会が開催された。参加したのは十数名。全員が近況を語った。

終了後、十年前と同じように、芳枝と啓子が道子の家に寄った。道子はクラス会に参加するにあたって、近くに住む長女に夫の介護を頼んでいた。長女は幸雄が倒れてから何かと道子を支えてきており、栄養剤注入もお互つ交換もできるようになっていた。芳枝と啓子が来ると、すぐにケーキと紅茶を出して、二人に挨拶して帰った。幸雄がにこやかに二人に挨拶して言った。

「どうぞゆっくりしてってください。」

そうして、読んでいた本を閉じて、ベッドの上半身部分をいく分下げて眠る格好をした。

芳枝と啓子は一瞬驚いた。目の前にいるのが、十年前の見るからに活発そうだった幸雄と同じ人とは思えなかった。道子は二人の思いをすぐさま察して言った。

「まずは紅茶を飲んで落ち着いて。芳枝さんは十年前、いっしょに暮らしてきた義両親の介護で大変だと言っていたよね。あのころの私は介護なんてちっともわかっていなかった。芳枝さん、あれからどうしていたの」

芳枝は我に返ったように、道子の顔をまじまじと見つめて言った。

「義父は家で転んで大腿骨折をしてから車いす生活になっちゃってね。家を改装して、ヘルパーさんの助けを借りるようになった。デイサービスに通って、そこでお風呂に入れてもらうようにして、何とかお世話し続けたよ。義母もいっしょにデイサービスに行くようになってね。でも、義父は肺炎で入院するようになって、とうとう逝っちゃった。義母もまるで後を追うように、入院することもなく弱って行って、同じ年に亡くなったんだ。でもね、子どもたちや孫たち、ひ孫たちがしょっちゅう来てくれてね。その点では義父も義母も幸せだったと思う。二人とも穏やかな顔で旅立ったよ。今度は自分の老後を考えないとね。私は介護離職したけど、自分の子どもたちにはそういうふうにさせたくないなあ」

今度は啓子が芳枝に聞いた。  
「今、パートで働いているんですよ。どんなことやっているの。楽しそうだけど」

「総菜屋さんで、調理してパックに詰める仕事。ピアスなんかつけた若い兄ちゃんをビシビシ指導しながらやっているよ」

芳枝が啓子に聞く。

「啓子さんはどうしているの。十年前は放送大学を無事に卒業して、自分で英語塾を開くつもりだと言っていたよね。どうなったの」

啓子は静かに話した。

「研修に行ったりして、いろいろ準備していたんだ。でも……」

急に黙り込んで下を向いた啓子に、道子が話しかけた。

「一昨年、お母さんが亡くなったんだよね。妹さんがいっしょ

に暮らしていても、啓子さんも何かと大変だったでしょ」

啓子は下を向いて目頭を押さえた。芳枝が驚いた顔ですぐさま言った。

「啓子さん、泣きたいときは泣くんだよ」

まるでその言葉を待っていたかのように啓子は泣き出した。はじめはしくしくと。続いて声に出して。そしてぼつぼつ語り出した。

「私は研修に一生懸命だった。母の話し相手に来てほしいと妹が言ってきたときも、弱ってきたときも、私は研修があるからと行かなかつた。母に会ったのは、寝たきりになって妹がつつききりで世話していたときだった。だから、罰が当たったんだ。夫が……」

夫がアルツハイマー型認知症になって、訳のわからないことを言ったり徘徊したりで、夫を一人しておくとい何をするかも、だれに何を言うかもわからないので気が気でない、今日は長女に来てもらって出てきたのだと、啓子が言う。まるで針の筵にいるようだとも。

「あつたかい紅茶を淹れてくるね」

道子が立ち上がった。芳枝がぼそつと言う。

「道子さんも大変だったろうな。私は仕方なく介護離職したけど、できれば定年まで働きたかつた。主婦として暮らしてきた啓子さんが働きたいと思う気持ちはよくわかるよ。でも、その前にご主人が認知症になってしまったってことだよ。私の父も認知症になって、ものどられ妄想もあって大変だった。私も、両親といっしょに暮らしていた弟夫婦の力になろうとしたけど、外へ出た者にできることは限られている。啓子さんのお母さんはわかつていたよ。罰が当たるなんてことないよ。」

道子が紅茶をもってきたとき、なぜか季節はずれの鶯が鳴いた。「ホーホケキョ」と。そのとき道子と幸雄の目が一瞬合った。道子はどことなく深刻そうな雰囲気を取り払うかのように言った。

「せっかくだから、ケーキ食べて」

道子が静かに話しはじめた。

「七十まで生きてくれば、いろいろあるよね。私も夫の下の世話をすることになるなんて考えもしなかつた。でも、四十年以上連れ添ってきたからね。お互い、面倒みあっていくしかないよ。私は芳枝さんと違って、自分の親のことは兄夫婦に、夫の親のことも義兄夫婦にまかせて介護とは無縁だった。でも、今は介護のシステムも勉強したし、夫の面倒をみているようで、実は私が面倒みてもらっていると思うときがあるよ。訪問看護師さんやヘルパーさんと話すのも、けっこう楽しいし、世界が広がるよ。夫が病気になるなかつたらわからないままのことがたくさんあるんだ。自分が人間として大きくなっていくよ。この年になつてもね」

芳枝、続いて啓子が言った。

「私は夫の親を介護したからこそ、これからどうしたらいいかを積極的に考えられるんだ。啓子さんもあまり思いつめないで。必ず良かったと思えるときが来るよ。人生はまだまだ続くんだから」

「ケーキ、美味しかった。そうだね。私はもうすぐ金婚式を迎えるんだ。夫は働きづめで私に好きなことさせてくれたんだもの、大切にしなくちゃね。報われる日も来るよね」

二人が帰った後、道子がかがんで夫の右手の上に麻痺した左手を乗せて、自分の両手で包んだ。心なしか、夫の左手が動いたように感じた。

# あれから五年

石塚 蓉子

野村恭子の家は宅配業をしている。大手の運送会社の傘下で地域に一括して下ろされた手荷物を個人宅へ届ける仕事だ。二年前母が亡くなるまでは二人で元気に営業していたが、一人になってから父が途端に体調を崩してしまった。元々神経痛を患っていたが、脚を庇いながら荷物の上げ下ろしに苦労している父を目にするうち、恭子は父を手伝う決心をする。二四歳、地元の銀行員としての仕事の面白さがわかってきたところだったが、会社で辞職願を出す。

最初は父が運転する軽トラックの助手席にいて降りては荷物を相手方に手渡すだけだったが、程なく荷物整理の要領も分かってきた。冬になって寒さが増して父の持病は酷くなるばかりで、この頃は恭子一人で外廻りをしている。休日は無くなったが毎日人と会う今の仕事が嫌いではなかった。

今日は大晦日。今日の配達が済めば、正月二日間は完全に配達なしでゆっくり休める。最後の一個は楓マンション二階の金井さんだ。

五時を過ぎると外はかなり暗い。呼び鈴を強めに押したが返事はない。ほのかに明かりが見えるがもう一度押してみる。この頃は不在時持ち帰りを望まない客が多く、金井さん宅でも置き場が用意されている。その旨を伝票にメモしてドアポストに投げ入れた時、急にドアが開き男性の素手で恭子は引

き込まれる。「何なさるんですか、放してください」

「今日はオヤジさんじゃなくて、ベッピンさんか。いいじゃないか、遊んでいきなよ」酒臭い息を吹きかけ絡んでくる。

「止めてください、仕事中です」

部屋の中を必死に逃げまわる恭子をニヤニヤしながら追いかけてまわす金井。遂に肩を捉えられて、恭子は満身の力を込めて金井を突き飛ばす。パシッという鈍い音、後も見ずに夢中で逃げ出す。車に戻って人目に付かぬよう悔し涙を堪える。

翌日は元旦、母がいない二度目の正月だ。いつも何か足りないような気持でいるが、正月は殊更寂しい。母の仏壇周りだけは正月らしく飾って、後は何も変わらないいつも通りだ。漫然とテレビの正月風景を見ながら父と過ごす。ニュースの終わりにいきなり見慣れた楓マンションが出てくる。

「今朝早くマンション二階で五十代かとみられる男性が死体で発見されました。この部屋の住人の金井さんと連絡が取れず、事件事故の両面から捜査中です」

金井さん？死体？そんなはずはない、私は昨日日本人と合っている。画像はすぐに変わってのどかな正月風景が流れる。チャンネルを次々かえて別のニュースにたどりつく。今度は玄関ドアまで映されていて「金井さんとみられる男性は後頭部を強く打って亡くなったという事です」

頭を打って、もしかしたらあの時？私は夢中で突き飛ばしたけれど、まさかあれで亡くなるなんて。恭子はパニック状態になる。傍にいた父に「恭子、どうした？具合でも悪いのか」と言われても、耳に入らず震えが止まらない。

日中ぼんやりと過ごして、夕方最寄りの警察署の前まで行ってみる。正面入り口に松飾があつて窓は閉められたまま、人の出入りもまばらだ。中に入って事件の詳細を訊ねる勇氣はなかつた。翌日にはもうあの事件の報道は無くなり、外出を億劫がる父と家でじつと過ごすだけで短い正月は終つた。

仕事始めの三日、配達の準備をしていると、中年男性と若い女性の二人連れが来て警察証を見せる。脅える恭子に男性が優しく問いかける。「怖がらなくていいですよ。皆さんに聞いて廻っています。大晦日に楓マンションの金井さん宅に荷物を届けていますね。その時変わったこと、何か気づいたことありませんか」突き飛ばしました、とはもはや言えず眼を見開き声の出ないままの恭子に男性は続ける。「あなたが荷物を届けたとき金井さんは留守のようでしたか」

傍にただで無言の女性警察官の眼の方がずっと厳しい。恭子はやつと声をだす。「はい、お留守でした」

「わかりました。朝からご協力有り難うございました」  
小声で何か言いながら二人は去っていく。思いの外簡単に済んで恭子はほっとする。

それでも気持ちがあすつきり晴れたわけではなかつた。毎日楓マンション事件解決の記事を探しながら、日毎に警察に大嘘をついたという罪悪感に苛まれる。あの時本当のことを言うべきだった。そしたら署まで連れていかれるのだろうか。そうなら仕事は、父の世話はどうなるのか。やはり今家

を空けるわけにはいかない。父には心配をかけたくない、仕事に穴をあけないよう今は仕事だけに集中するのだ。

あれから何ごともなくまた一年が過ぎて、歳末で賑わう商店街を孤独を噛みしめながら歩いていると、「野村さんじゃないか、久しぶり」と声をかけられる。元の職場の上司だった向井さんだ。「元氣だった？どんな具合かと思つてたよ。今時間ある？」懐かしい人からの声掛けに思わず涙が滲む。

通りの喫茶店で向井と向き合う。昔からよく話を聞いてくれて頼れる上司だった。銀行を辞める際にも彼にはありのままを話すことができた。何気ない話から始まったのいつの間にかずつと頭から離れなかつたあの事件との関わりを打ち明けてしまう。向井は声をひそめるように言う。「大変だったね。でもこれでよかつたんだよ。警察が来たのは一回だけなのだろ。キミには関係ないんだよ。そのくらいの嘘ついたらいいと思うよ。何かを守るためだったら人は一生のうち三回は嘘ついていいんだって」

今の恭子にとつて一番の重荷は嘘の証言をしてしまったことだった。向井の言葉にすつと肩の荷が軽くなつた。

「いつも何時頃なら身体が空くの？また誘つていいかな？」  
こうして恭子にとつて唯一の相談相手ができた。

向井と会つてから、恭子はすつと抱えていた孤独感から解放される。向井と会える日を楽しみに、懸命に仕事をこなし、懸命に父の世話をした。一年半経ち恭子は向井から突然のプロポーズを受ける。夕方の公園の桜の木の下だった。

向井は一〇歳上の三九歳、奥様がいると恭子は思い込んでいたが、今は少し先の公園で一人暮らしをしている。学校を終えてすぐの学生時代の同級生との結婚生活だったが、数年

も経たないうちに彼女に愛想を尽かされ出て行かれたまま今は全く消息知らずだという。恭子が入行したのはその後で、最初から気になる存在だったと告白してくれた。

「嬉しいけれど今は家を出られない」

「勿論だよ。すぐじゃなくていい。それとも別居のままの結婚でもいいんだ。恭子のお父さんに許してもらえるなら、これからはお父さんのことも僕に手伝わせて欲しい。なんでも一緒にやろう」

恭子にしても向井と離れることは考えられなかった。父に打ち明けると「よかった、嬉しいよ、安心したよ」と、彼は一度しか会っていないのに無条件に喜んでくれた。

恭子と向井の幸せな日々は始まった。一緒にいると辛いことは何も無くなつた。婚姻届はもう少し後にして、フォトスタジオで並んで写真に納まったのが二人だけの結婚記念だ。恭子に休日が無いのは相変わらずだが、別居のまま、向井が家に来て一緒に父の面倒をみてくれた。

そんななかでも父の脚はやはり回復せず、痛み止めの治療を繰り返すうち心不全でとうとう母の処へ行つてしまった。父名義の宅配業は廃業となり、その届出を始めとする諸々の手続きを向井に扶けてもらつてどうにかこなして、年末にやつと七七回忌を済ませることができた。

年が明けたら早々に婚姻届を出して、恭子が向井の住まいに移ることになっていた。明日は大晦日だ。もうすぐ一緒に暮らせる。向井は一人で部屋を片付けていた。呼び鈴が鳴つてドアを開けると元妻の真弓がいる。十年前の離婚以来だ。

「キミは……今頃何しに？」

「驚いた？ ちょっといいかしら」ずかずかと中に踏み込む。

「この後出かけるんだ。用件を言つてくれないか。彼氏とはどうしてるんだ」

「あの後直ぐ別れたわ。私、あの時どうかしてたのよ。本当に好きなのはあなただつて分つた。ねえ今でも独りなの？」

「いや、キミが出て行つてから十年だ。僕だつて好きな人はいる。近いうち結婚するんだ」「そう。おめでどう」と言いながら真弓は落胆を隠せない。

その時奥に置いたケータイが鳴り「ごめん、じゃあ」と向井は背を向ける。真弓は帰ろうとせず勝手知つたる部屋を見渡す。机の上に掛けてある若い女性と並ぶ写真に眼を移してハツとなる。見たことのある女性だ。そうだ、新米刑事として初めて聞き取りについて行つた時の女性だ。優し気に聞こえる元夫の声に耳を澄ます。「そう、明日で五年か。よく頑張つたよ。恭子は関係ないんだ。もう忘れよう」

明日で五年、何かが閃き、真弓は気力が湧きあがるのを覚える。電話を終えた元夫に「彼女からね。私、これで失礼するわ」と、意味ありげな笑顔を向ける。「何も用はないんだろ。もう此処には来ないでくれ」今は全くの他人にしか思えない真弓を送り出して向井はドアを閉める。

真弓はその足で署に戻り、あの時の指導上司に願い出る。「五年前の大晦日の変死事件、もう一度調べさせて下さい」

明日から新しい生活が始まる。恭子は仏壇に手を合わせる。「父さん母さん、今日からあの人の家に行きます。絶対幸せになります、安心して下さい」。表に誰か来たようだ。まだ向井が来る時間ではない。今頃誰だろう。出てみると、忘れはしない、あの事件の聞き取りを受けたとき一緒に居た女性だ。何故か親しげな笑顔を見せながら彼女は近づいてくる。

# みこし 神興の憂鬱

高杉 治憲

(一)ここは、全国有数の猛禽類の生息地でコミミズクやハイイロチュウヒ、ハヤブサなどを通年で観察できるほか、冬になると留鳥となつて林帯に生息しているオオタカが鴨を狙う姿を見ることが出来るといわれている。渡良瀬遊水地は、栃木、群馬、茨城、埼玉の四県に跨る三三〇haを有する日本最大の遊水地として二〇一二年(平成十四年)にラムサール条約に登録された。これに伴い国指定の鳥獣保護区となり、治水の大きな役割と共に絶滅危惧種を含む貴重な鳥獣や植物、昆虫の宝庫となっているのだ。

明治時代前半の頃、渡良瀬川に思川と巴波川が合流するこの地点は自然に遊水する大湿地帯であつたことから洪水防止を目的としていた。しかし、当時、近代化を急ぐ国策によつて足尾の古河銅山から大量に流出した鉱毒が、渡良瀬川沿岸地域に深刻な被害を齎して日本初の公害事件として大きな社会問題となつた。栃木県選出の国会議員だつた田中正造が地元住民の苦境を解決する為に先頭に立ち命がけの反対運動を展開し続けていた。更に明治天皇への直訴に及んで暗い国情に一石を投じ、その後、亡くなるまで一身を捧げたことは歴史によつて証明されている。しかし、それから一三〇年経過した今日においても尚、現地の地下に銅などの重金属を封じ込めたまま蓋をしてきたことは忘れてはならない事実であ

る。この広大な遊水地と指呼の間にあつて同じ時代に建設され、その歴史を静かに見おろしてきた一基の建造物が立っている。

明治二十一年、三井物産の三井武之助を中心として赤煉瓦製造のための『下野煉瓦製造会社』が現在の栃木県野木町に設立された。初めは登り窯一基だったが、その後、海外の技術を取り入れ現存しているホフマン式東輪窯に続いて西窯が完成し、株式会社に移行して発展してきた。以来、明治、大正、昭和期に亘り幾多の工場や鉄道、建造物等に赤煉瓦を供給し貢献してきた。昭和四十六年に同社三代目社長の斎藤栄が社名を株式会社シモレンに改め残存するホフマン式東輪窯の改修が計画されたが、需要の衰退によりその役割を終え輪窯だけが残つた。当時、斎藤は意欲的に同社を一介の建材商社から飛躍させるために様々な試みを展開していた。そして、パブル経済が絶頂を迎えた平成二年、この煉瓦工場跡地に日本一の最高級会員制乗馬クラブ建設に取り掛かった。そのきっかけとなつたのは、斎藤の出身校である明王大学の同窓であり広告大手『通電』の当時スポーツ担当部長だつた高山治之から紹介された同窓の竹偉常和との出会いであつた。

竹偉は、元より明王大学馬術部OBでオリンピックであり

永年同部の監督を歴任していた。そして、既に日本馬術連盟の会長であり何より明治天皇の曾孫ということで満腔の敬意と信頼を寄せた斎藤は彼を理事長にまつり掲げて全ての企画を任せた。しかし、所詮、殿様商法といえる高額預託金制會員募集の誤算と豪奢に過ぎる調度によって湯水のように注ぎ込んだ一〇〇億円もの過剰投資が災いし、開場から十二年後に本社諸とも破産してしまつたのである。

「竹偉理事長、貴方が総合監修して日本一と称したロイヤル乗馬クラブが破綻したのは理事長が華麗に奔りすぎたからという批判が取沙汰されています。クラブのトップとしての責任をどのように果たすお考えですか？」

「いいえ、私は単に斎藤社長から乗馬クラブの運営指導を頼まれそれをやり遂げただけです。経営にはノータッチですから全て社長に聞いて下さい」と、言い終えると足早に記者会見場から姿を消した。竹偉は、こうして自分に不都合な場面では神輿として担がれたにすぎないと釈明して逃げ失せるのが常だった。そして、これまでと同様に竹偉を雲隠れさせ置つたのは高山治之だったのである。

(二) 竹偉常和は一九四七年十一月、その前年に皇室離脱した元皇族竹偉宮を父に持つ一般人として生を受けた。それでも、明治天皇の内親王を曾祖母とする家系として、超エリート元皇族として生きる運命に乗って神輿のように鎮座してやまない人生を歩んできたといえる。

旧皇族竹偉宮家は特権により都内に明治政府から与えられた広大な屋敷を持つ家柄であった。敗戦後、経済的に困窮して屋敷を新興のプリンセスホテルチェーンに譲渡して急場を凌いでいた。そこには元皇族として尊崇されるべき体裁を保つ生き方から脱却できず、平成時代になつても一般人の生き

方を身に付ける術がなかったことが見えてくる。

「カズ、心配することはないよ。俺が堤田名誉会長に渡りをつけたし、形式的に元総理の了承を取付けたからそれで決まりだ。それに、歴代のJOC会長職は、無給の名誉職だったがカズの就任で初めて年俸一五〇〇万円の報酬に漕ぎ着けた。俺の構想では、いざれ東京に二度目のオリンピック誘致を成功させれば途轍もない五輪ビジネスが舞い込んでくる。まあ、見てろ」と、高山は嘯いて自信を示した。嘗て、竹偉をロイヤル乗馬クラブ理事長に担ぎ上げ、同社を食い物にさせた挙句倒産後に救い上げたのも、竹偉の最初の妻との離婚の後始末や竹偉が役員をしていた旅行代理店の業務と共に生活を支えてきたのも高山だった。その裏には元皇族の信用を自らの果てしない欲望を満たす道具として思いのままにする周到な計画が張り巡らされていたのである。

「高山さんありがとう、また助けてもらつたね」

「いや、まだあまりにすぎないよ。どんな手を使つても五輪招致に勝負を掛ける。カズは明治天皇の曾孫であり、今上天皇のハトコなんだから俺の言う通りにIOCで動いてくれさえすればいいのさ」

(三) 『TOKYO』!!二〇一三年(平成二十五年)九月七日、アルゼンチンのブエノスアイレスで開催されたIOC総会において「TOKYO二〇二〇オリンピック・パラリンピック開催決定」の発表に日本中が歓喜した。一九六四年(昭和三十九年)に開催されたアジア初の東京オリンピック以来、半世紀ぶりの快挙と期待された。平成時代に入ってバブル経済が崩壊してデフレ不況に陥り、その後、空白の三〇年と擲擻されていた日本にとつて夢をもう一度の願いでもあった。

ところが、オリンピックムードに反映され希望に包まれて

迎える筈の二〇二〇年は、明けた直後から悪夢のような暗雲が立ち込め日本列島を覆いつくしたうえに世界中を地の底に陥れようとしていた。コロナ感染拡大である。

(四) 発生から断続的に繰り返されたコロナ感染により、一年延期となった「TOKYO二〇二〇」は、直接、誘致に尽力した安倍総理が体調不良で降板し、その傀儡政権と見られていた菅内閣の下で改めてオリンピック・パラリンピック開催に向けてあらゆるコロナ対策が施された。しかし、その努力の甲斐もなく開催直前から第五波が拡大し無観客開催に追い込まれてようやく開催に漕ぎ着けた。開催決定時に誰もが描いた華やかさは影をひそめ、コロナ禍真只中で只管粛々と競技を進める形での開催へと打って変わったのである。

(五) コロナ禍での開催に加えて当初の緊縮型オリンピック構想は虚しく消え失せ膨大な経費増と収入激減の難問を残したまま終了した。組織の中核である『TOKYO二〇二〇組織委員会』はその責任問題が沸騰する前に解散し批判をかわしていた。しかし、その一方でオリンピックを舞台に暗躍した贈収賄事件の捜査は着々と進んでいた。

「カズ、フランスからの五輪誘致贈賄容疑は俺が国際弁護士を手配したので収まる筈だ。だが、国内での贈収賄事件は捜査がかなり進んでいると確かな情報が入った。カズはあくまで最高のJOC会長であり大会誘致の立役者だ。但し、今日かぎり俺との関係は全て忘れて身を隠せ」

「はい、分かりました。私は、何も悪いことはしていません、何も知らない。只、一心にTOKYO二〇二〇で国民に喜んで貰っただけです。今でもそれでよかったですと思っっている」

「そうだ、それでいい。だが、一つだけ急がねばならないことがある。俺が斡旋した五輪関連会社二十数社に辞表を送付

して関係を遮断することだ、いいな。カズ、これでお別れだ」この電話での会話から数日後、組織委員会の元理事だった高山治之は収賄容疑で逮捕され、連座して大手企業のトップらが贈賄容疑で次々に逮捕された。こうして、『TOKYO二〇二〇』は前代未聞の「汚れたオリンピック・パラリンピック」という汚名を浴びることになって行った。加えて、高山が理事として暗躍した流れで、『TOKYO二〇二〇』の関連施設入札の談合事件が摘発され、これを落札した通電を始めたとするスポーツ関連大手一社あたりの平均的収益は実に五十二億円にのぼることが報道された。

二〇二三年五月、日本政府はコロナを感染症第五類に引き下げ経済復興へと舵を切り、五輪を舞台とした贈収賄容疑者は全員起訴されて一連の事件は大きな節目を迎えた。

ゴールデンウィーク後のこの日、渡良瀬遊水地周辺には爽やかな風が吹いていた。倒産で三度経営が替わり小規模になった昼下がりの乗馬クラブ馬場で、練習している若い男女を近くのベンチで見ている一人の男がいた。やがて、男は立ち上がると、今では野木町交流センターホフマン館として産業省指定遺産となっている輪廓の前に立ち尽した。

『私はいつも誰かに支えられ、歩むべき道には常に絨毯が敷かれていた。人々の為になると信じてその道を進んできた心算だ。しかし、ここに日本一の乗馬クラブを立ち上げ十年以上関わって来たのに、直ぐ目の前にあるこのホフマン輪廓に目もくれず、その昔、曾祖母が明治天皇の名代で視察されたことすら気づこうともしなかった』男は涙を流して懺悔した。ホフマン寮は何も答えず時代の移ろいを見つめるだけだった。

# 発達障害

珠井 七海

千尋は大きいため息をついた。仕事で大きな失敗をしてしまったのだ。

「どうして山本さんはこんな誤植に気がつかないの？もっと見直しなさいと何度も言ったでしょ」腰に手をあててロングヘアの上司は怒り心頭といった様子だった。

「あなたの失敗は私の失敗なのよ。きちんと見直しさえすればこんなことは起こらなかつたの。わかっている？」

千尋は小さな出版社に勤めている。誤植も少人数でチェックしているの、一人一人の責任は重大である。

「地惑ねこ、生徒からばかされている、あなたの担当のところのミスはまだまだあるのよ。わけのわからない小説になるところじゃないの。すぐ気づけたから良かったけど。しっかりしてちょうだいよね。しばらく編集部から離れて営業にまわってもらおうから」千尋は、すみませんでしたと頭を何度も下げて謝った。しかし今朝、千尋が出社すると机の上には本が山積み置いてあった。涙目になった千尋を見て、隣の席の修が「営業も楽しいよ」と励ました効果がなかった。ようやく千尋が顔を上げて外を見ると、プラタナスの街路樹が、木漏れ日を灰色のアスファルトに落としていた。

千尋は近くの書店を何店舗もまわった。本ってこんなに重いんだなあ、と千尋はしみじみ思った。今年は猛暑になると

気象予報士が言っていたけど。外に出て少し歩くだけで額から汗が流れ落ちた。営業が好きな修なら、こんな暑さも物ともしないだろう。人と会うのも大好きだ。しかし千尋は極度の人見知りである。初対面の人と話す時には声が震える。この会社に入れたのもペーパーテストが良かったからだ。

やっと退社の時刻が来た。千尋は、その日はいつもと違う道を駆車で歩いた。角を曲がると公園があった。ブランコと滑り台がある小さな公園だ。ブランコの脇の大きな桜の木はピンクの花びらをとうに散らし、青々とした葉をつけた枝をこんもりと伸ばしていた。千尋はブランコに座り、足をぶらぶらさせた。明日会社に行きたくない。美紀やあゆみにも無視されている。入社したばかりなのに賞与を多めにもらったことをもらしてしまい、妬まれたのだった。原稿に集中すると周りが見えなくなり、つい二人に來客のお茶出しなどもまかせてしまっていたのも原因だろう。学生時代は、ちいちゃんも勉強はできるけど天然だね、と先生や同級生から人気があった。でも今は違う。その時、ブランコの揺れが大きく変わった。後ろから誰かが押している！千尋がおそるおそる振り向くと、亡くなったはずの祖父がいた。でもそんなはずはない。よく見ると若い男性で、似ているだけだった。千尋はあわててブランコから飛び降りた。

「ごめん。泣いているからつい」男性はにっこりした。千尋は「すみません。失礼します」知らない間に出ていた涙を手で払いながら、地面に置いてあったバッグを持って、立ち去ろうとした。ブランコは、まだ金属音をたてながら揺れている。

「ちよつと待って。あやしい者ではないんだ」男性は名刺を差し出した。「三紅商事株式会社 井上亮」と書いてある。

「君、光山出版社に勤めているよね。今日、本を運んでいるのを見かけたんだ。何があったの？話してみてよ」千尋は首を振った。

「大丈夫です。たいしたことではないんです」

けれども男性の目は優しくかった。やっぱり祖父に雰囲気似ている。黒い眼鏡をかけているところ、声が柔かく低いところも。

「ちよつと待ってて」

男性は黒革のビジネスバッグから何かを取り出した。千尋が好きなのハーゲンダッツのマカデミアナッツだ。

「手を出して」千尋は、男性に言われるままに手を出すと、手の平にぽんと置かれた。買ったばかりなのか、冷えて固さもちよつとよかつた。アイスクリームを食べながら、千尋はようやく話し始めた。

「私は失敗ばかりなんです。自分では一生懸命がんばっているつもりなのに・・・」うんうんとうなずきながら、男性は隣のブランコに座って揺れていた。その様子が千尋には愛らしくうつった。そしてしばらく沈黙が続いた後、男性は言った。

「君はどうしたいの？自分がかかりたいの？それとも周りに

かわってもらいたいの？」千尋はうつむいた。そして言った。「学生の頃は、私の失敗は愛嬌で笑い話になってそれに甘えていました。自分がかかりたいです」

「前向きでいいことだね。一つずつ物事に集中して取り組んでいくことかな。賢いかわいい秘蔵っ子だからいつまでも大事に思っているからね。私も若い頃は失敗続きだった。大丈夫」その声がだんだんしわがれて、年をとっていった。驚いた千尋が隣を見ると、若い男性ではなく、亡くなった祖父がいた。「じいちゃん」と思わず呼びかけると「えっ」と男性が聞き返した。そして不思議そうに「僕も若い頃は失敗続きだったよ」と続けた。千尋は何度もまばたきをして見たが、隣にいないのはやはり若い男性だった。「今度よかつたらお茶でもいかがですか」男性はまたにっこりした。

千尋は、次の日から来客があつたらすすんでお茶を出すようにした。営業もいやがらず笑顔で本屋へ行った。そんな様子を見て、修は何かいことあつたの？とからかった。しかしながら、もうその男性に会うことはなかった。名刺を見ながら千尋は電話をかけてみようかと、携帯の番号を押しかけてはやめた。お茶に行けばよかつたのに、と千尋は断つたことを後悔した。そしてどんなにがんばっても編集部に戻ることはなく、営業の仕事しかさせてもらえなかつた。そしてあいかわらず美紀やあゆみからは無視される日常が続いた。

そんなある日、一日中足を棒のようにして営業に歩き回り、千尋は疲れていた。ハイヒールがきつく感じる。ふと気がつくとその公園へ向かつていた。誰もいない。閑散とした公園でブランコを揺らしながら空を見上げると、一つ二つ星が見えた。

「東京の夜はネオンが明るくてシリウスだけのオリオン座」  
短歌を小さく口ずさんだ。東京の空は、田舎の満天の星空  
とは比べものにならない。大きなため息をついた。その時、  
背中に暖かい手を感じた。

「井上さん？」千尋が振り向くと、男性ではなく愛嬌のある  
大きな目をした、同じ年くらいの女性がいた。

「どうしたの？ 大きいため息について」女性はにっこり笑っ  
た。

「こんなにかわいいのに、悩みでもあるの？ 恋の悩みかな」  
初対面の人に背中を押されているのにいやな気持はない。全  
身の力が抜けていった。千尋は言った。

「こうやってブランコを押してくれた人がいたんです。でも  
名刺を下さったのに、電話する勇気が出ないんです」女性は  
押す手を止めた。

「その人、黒メガネで背が高いどちらかというど地味な人  
じゃない？」

「そうです。地味というか優しいような人です」千尋が驚いて  
答えた。

「あなただったのね。私の彼、この公園ばかり来ているみた  
いだったから千尋はあわててブランコから飛び降りた。バッ  
グを拾い上げ、けんかをする時の二匹の猫のように女性と向  
かい合った。千尋の胸はどきどきした。

「このブランコに今日はあなたが座っていたから、びんとき  
たの」すると公園の入口から、「待って」と声がして、慌て  
た様子のあの男性が走ってきた。そして息をきらしながら、  
千尋を守るように二人の間に手を広げた。

「もうやめてよ。彩。僕この人とまだ一回しか会ったことが

ないんだよ」彼は本気でその女性に怒っている様子だった。

「お父さんから、お兄ちゃんが毎晩公園で誰かを待っている  
みたいと聞いたの。面白そうだから今日来てみたの。そした  
らあなたがいたから、ちよつといたずらをしちゃった。悪気  
はなかったの。ごめんなさい。これに懲りず、兄をよろしく  
お願いします。井上彩です」女性はかわいく舌を出してから、  
ペコっとお辞儀をした。二人を何度も見比べていた千尋は、  
はあっと大きく息をはいた。顔のパーツがとても似ていた。  
「こわかった」と千尋がつぶやくと、男性はすまなそうに何  
度も謝った。

千尋は出版社に営業として五年勤めた後、亮、その男性と  
結婚することになった。亮は大らかで忍耐強く、思わぬ失敗  
をする千尋を受けとめてくれた。妹の彩とはなぜかあの後一  
番の親友になった。茶目つ気があるので、時々いたずらをさ  
れたが、亮が、亡くなった祖父にあの時見えたのは、どうし  
てか今でもわからない。千尋には、祖父が贈ってくれた縁の  
ような気がした。小さい頃から千尋を特別かわいがっていた  
祖父は「ちいちゃんには良いお婿さんを私が見つけてあげ  
る」というのが口癖だった。亡くなっても、もしかしたら千  
尋のそばで心配して見守ってくれていたのかもしれない。じ  
いちゃん、ありがとう。千尋は結婚式の日、心の中で祖父に  
何度もお礼を言った。

## 青の車窓

島田トミ子

中型の旅行バッグに、最低の化粧品と一日分の着替えを押し込め、内ポケットには小型の時刻表を入れた。プレゼント用の小さな箱は潰れないようにタオルで巻いて入れた。横のポケットには薄い文庫本を差し、最後に梅干しの入った小さいおにぎりをふたつ一番上にそっと置いた。

私吉井アサ子は、この四月に群馬県内の大学の教員養成学部三年生になった。

八月末の金曜日、長い夏の夕日がすでに西へ傾き始めている。高崎の自宅を夕方出て上野へ向かい、京浜東北線に乗り換え夜の八時を回ったところで東京駅に着いた。日中の陽ざしは強いが、朝夕は微かに秋の匂いの風が髪を揺らす。

二十三時の出発までに時間はまだある。それまで駅の中で過ごすことにした。八重洲中央口側の改札を出て駅中の小さな店をゆつくりと見て歩いた。浮き浮きした気分でレストランに入って空腹を満たし、再び改札口へと向かった。

元の通路へ出て今度は十二番ホームの階段を上がった。満たされた腹と午後からの慣れない動きのためか、ふくらはぎが重い。木製のベンチに腰を下ろし、持参した薄い文庫本をバッグから取り出して膝の上に開いた。眼は文字を追っているが脳の中がハイになっていて内容がちっとも理解できない。

仕方なくベンチに身体を委ねて、複数のホームの人々の動きをぼんやりと眺めながら時間を過ごした。ホームを歩く人影は子ども連れ以外の人たちの足取りは皆速い。

夜の九時を過ぎても、駅周辺のビルのネオンサインの灯りはまだまだきらびやかな光を放っていて、帰路に着く人々を引き留めようとしているかのように見える。

東京大阪間を走る東海道新幹線は数年前にすでに開通していた。白とスカイブルーのツートンカラーの車体が高架になっていた。白とスカイブルーに見える。

午後九時以降に神戸や大阪など遠くへ行く東海道線には、特急が何本もあるが、ほとんどが寝台列車である。私のような準急の利用客は、きつと時間に急を要さない人か、あるいは切符代を安く済ませたい人に違いないだろうと私は決めつけていた。が、何よりも女子学生が一人で寝台列車に乗ることへの不安もあった。

二十三時発東海道線の準急「大垣行」の列車がいつの間にか入ってきていた。私は数分間うとうとしたらしい。

車両に歩を進めると、棚に荷物を載せている姿や、座っている客の頭がいくつつか黒いシルエツトとなって見える。座席には充分ゆとりがあった。

空いている所に、重い身体を下ろし、ふうーっと深い息を

吐いた。左手首の腕時計を見ると、発車まではあと数分だ。さあいよいよ計画の実行開始だ。私は改めて自身に言い聞かせながら、帆布生地のパックを自らの横腹にびたっとくっつけて置いた。

ホームに発車の案内をする車掌の声と、にぎやかなベルが鳴り響き、「大垣行」は定刻どおりに出発した。黒くて重い鉄の塊は、何かに導かれるように、ガクンガクンと重量感を示しながら動き始めた。私も一緒に西へ移動している。

窓の外の夜の街の灯りが突然私の里心呼び起こした。今頃、家族はどうしているだろう。宵の時間だ、父も母も夕食を摂り入浴もとうに済ませてすでに寝ているに違いない。

両親には、半月ほど前に今回の旅の説明をした。『大学の同級生と三人で夜汽車に乗って伊勢志摩へ遊びに行く。帰りは日曜夜の予定。切符代など経費のいっさいは自分のバイト代から出すから心配しないで』と言って説得した。

経費のことは説明した通りで週二回の家庭教師のバイトで貯めたものを充てた。しかしそのほかのことは大嘘をついた。伊勢志摩には行かない。一緒に行く友はなく、旅は私一人。ひとりで名古屋にいる彼に会いに行く。嘘がばれないようにもつともらしく話した。良心がチクチクと疼いたが、私自身の将来に関わることを決めるためにはこの嘘が必要だった。だからこの旅は絶対外せない。私は一大決心をして夜汽車に乗り込んだ。

バッグの中から時刻表を取り出し薄い紙をバラバラとめくって葉が挟まっているページを開いた。あと一時間足らずで日付が変わり、小田原を過ぎる頃は新しい日になる。

時刻表をみて、「大垣行」の十五分前には「鳥羽湊町行」

の列車があることに気づいていた。なんてラッキーなこと、これで親たちにはバレないなと思った。

目的地的名古屋へは朝の六時五分前に着く。その名古屋の時刻のところを赤い色鉛筆で印をしておいた。「鳥羽湊町行」にもマークをしてカモフラージュをした。これから下車するまでの半日ちよつとの時間を浅い眠りでもいいから休もうと眼を閉じた。

列車から出る規則正しい三拍子のリズムの機械音が身体に心地よく届く。でも眠れない。半分覚醒しているため、脳裏にはこれまでの彼とのできごとが代わるがわるの浮かんでき

る。来年の今頃は第一次の採用試験が終わっている時期だ。私はどこに就職したらよいのか。生まれ育った群馬県か彼のいる愛知県か、どちらの県の教員採用試験を受けたらよいのだろう。それを決めなければ……、とそのことがここ数カ月間。闘ぎ合っている。彼は私の進路に対して果たしてどんな意見を持っているだろう。「愛知県を受けろよ」と言うか、それとも、もう一步進めて、私との結婚のことも考えているのだろうか。重い課題の核心はそれだ。核心に触れたい、一人旅はその意思を確かめる機会にしたかった。

彼は私よりも二つ歳上の岡川義彦。前橋の高校を卒業してから名古屋工大で学び、そのあと自動車メーカー「トキタ自動車」の関連会社に就職して名古屋市内の独身者の寮にいる。

彼にはこの土曜日に遊びに行くことは手紙で伝えてあった。これまでは月に一回の頻度で東京都内でのデートを重ねてきたが、今年の五月以降は「仕事が忙しくて時間がとれない」と言ってきたために会えていなかった。

私はこれまで義彦からの好意のオーラを感じていたが「心的な距離間はなかなか縮まらない」との感触を持ったままであった。時間だけが流れていく。

早朝の名古屋駅構内の待合室に入り、冷めた茶を飲み、少し硬めのおにぎりを食べた。待合室は予想以上に人の姿がある。少しひんやりとした空気と梅干しの酸っぱさが先走る私の熱い頭の中をクールダウンしてくれた。

義彦とは東海道線の改札口で八時半の待ち合わせだ。

彼は予定よりも早く現れた。私を見つけるや否や百八センチの頭の上に手を挙げ改札口の方へ走って来た。

「よく来たね、お疲れさま。まず、どこかで朝食を摂ろう」話しながら私のバッグをすうーっと取って持った。

「そうね。私とうとう来ちゃった……、フッフ」空腹ではなかったが、義彦の提案通りに駅の外のコーヒーショップでモーニングセットを食べた。

「今日は名古屋を観て、明日は伊勢に行く？」

「うん、どこもわからないからおまかせだわ」と返したが、へえっ、もしかして泊りもあり？」と、一瞬稲妻が私の脳裏を走ったが敢えて何も言わずにいた。

タクシーで名古屋城へ行き、きちんと整備された城内の公園を歩いてから濠の見える所のベンチに座った。

「これお土産、良かったら使って」リボンのついた小箱をバッグから出した。開けて中味を観た彼は、

「うわっ、ありがとう、無職の人から貰うなんて悪いな。早速使おうよ」、嬉しそうな表情だった。

長い時間ベンチに座って、これまでに過ぎた互いの時間の空間を埋めた。義彦は後輩社員のこと、責任ある仕事が増え、

来年は別の企画部門へ移る予定であると嬉しそうに話した。私は単位の履修状況や教育実習、来年の採用試験のことなどについて力を込めて喋った。

教員採用試験の受験地のことを私から聴いた義彦は、少し間をおいてから口を開いた。

「採用の条件は何か違うの？ 待遇は？」と訊いてきたが、「愛知を受けて」とも「こっちにきてほしい」とも言わなかった。もちろん「結婚」という単語も出なかった。私の胸は失望の波が押し寄せてきて、そのあと自分から確認する勇氣も消えた。昨日まで感じていた好意は「結婚」とは別物だったのか。私はあなたの何？ 妹？ 正午過ぎに再び街なかに戻って昼食を食べたが、美味しいはずの味噌カツも食後のブレンドコーヒーの香りもコクも私の舌には沁み込んで来なかった。

彼はいつの間にか私からは遠い所に行っていた。これ以上話すことがない。迷いが吹っ切れた心は早く帰ろうと叫んでいる。心身が軽くなったが逆に疲れがどっと襲ってきた。昨日からの興奮気味のエネルギーが消えつつあった。

義彦が買ってくれた「青柳ういろう」と「味噌饅頭」を持って私は帰路に就いた。帰宅後口にしたが複雑な後味だった。

一年後私は群馬県の小学校の教員採用試験に合格した。三十六年間小学校に勤め、校長職を最後に定年退職した。

二〇一九年九月、東海道新幹線開通直後の時刻表の復刻版がJTBから出た。私はすぐに購入し、はるか遠くの情景を浮かべながら、あの時と同じ個所に黄色のマーカーを付けた。

あれから数年後、彼が結婚したことを聞いたがその後の消息を私は知らない。

# 敦煌の砂

安西 悠子

ある秋の日、電話のベルが鳴った。

「いくちゃん」からである。

彼女は、

「敦煌へ行きましょう。」

と、突然、話し出した。

私は、

「はい。行きましょう。」

と、答えた。敦煌は、私の憧れの場所であったからである。  
「いくちゃん」とは、広沢幾子さんという。私の女学校の一級上の生徒さんで、学年は異つても、私達、下級生を、よく世話をしてくれた。「いくちゃん」の卒業式の折は、私が送辞を読んで、「いくちゃん」が、答辞を述べたのであった。卒業後、「いくちゃん」は、東京に、私は、今市に嫁いだ。

平成十四年（二〇〇二年）十月十四日、敦煌へのフライトは、早朝であったため、私は、その前日の夕方、成田のホテルに泊ることになった。

夕方、「いくちゃん」は、ロースハムを挟んだサンドイッチを沢山、手づくりして持って来てくれた。今市から一人、ホテルに泊るので、夕飯が淋しかろうとのことだった。

「いくちゃん」は、帰宅してから又、家族と二度目の夕食をとる、と笑った。

翌朝早く成田を飛び立った機は、静かな海面を見せている。東支那海上を飛ぶ。かつて、阿倍仲麻呂や、円仁たちが、命を賭して渡った海である。鑑真も盲目になつても、日本に渡来した。私達は、談笑している間に、中国の上空を飛んでいるのだ。

「いくちゃん」は、笑つて、私の肩を叩いた。

「ほら!!。あなたを待っているわ。」

と、笑つた。私は何のことかわからず、キョロキョロした。着陸する西安空港の標示は、大きな文字で「西安」の二文字であった。しかも、横書きであるから、反対側から読めば、「安西」となる。二人は、「クスクス」と笑つた。

西安空港に降り立った私達は、バスで城外に出た。

狭い石段を登ると、屋上は、可成りの広さであった。萬里の長城である。その広い屋上に三層の瓦葺きの屋根を持つ建物があった。かつては、ここに、多勢の武人達が、甲冑を身に纏い、手に手に武器を持って、決死の形相で、中国人たちを胡人たちから死守したのであるが、今日は、二人の老人が、静かに座しているのみであった。

暫らく見物をして、狭い石段を降りる。

西安郊外の砂漠の中をバスは走る。不意、外を見ると、数頭の駱駝が西方に向かって歩んでいる。背の鞍には、西域人の

形相をした人が乗り、今、正に、西に向って歩み出そうとしている。石造りの西域人と駱駝たちである。西方を望むその瞳は、故郷への懐しい想いと、東洋の異文化に触れた嬉びを秘めた心が湧きでていた。砂漠の中を石造りの隊商は進む。石造りの隊商たちは、今、動き出そうとするかの様だ。

いよいよ敦煌に向うのだ。朝、ホテルを出発して、小型の機体で目的地に向う。

敦煌への直行便と思いきや、蘭州空港に着陸、少し待て、という。狭い待合室に案内された。こんな待ち時間があるのなら、蘭州の街を見物したい、と申したら、この待合室からは出ないでくれ、と言うことで、退屈な時間を蘭州の待合室で過ごすことになった。

敦煌に着いた。

莫高窟は、その入口に、木製の足場が組んであり、それを登って洞窟の中に入る。足許に気を付けながら窟に入る。中は真暗らな空間だ。撮影も禁止であるから、フラッシュも使えない。係員の照らす小さな懐中電灯だけの光である。こんな事とわかっていたら、懐中電灯を購入して持つてくるのだった、と不平を並べた。

係員のかさず、僅かの光で、佛達を拝む。

ある洞窟へ辿り着いた私は呼吸が止まった。その佛たちは、すき透る裳裾を、軽ろやかに翻がえす。佛たちのお顔は、おおらかである。私のすべてを包み込んでくれるようだ。私は、飛天の佛に身も心も捧げる心地になった。

あまり長い時間、佛を凝視している私を、  
「いくちゃん」  
は案じて

「洞窟の外へ出ましょう。」

と、私をその場から立ち去らせようとした。

数多くの窟の中央に鎮座する敦煌の大佛は、大層、巨大で振仰ぎ折るのさえ大変なことであった。大佛に手を併せて祈った。

正門の前に、一軒の小さな土産物店があった。木造で、人の気配は無く、静かな佇まいであった。この店の脇、砂漠の中に、音もたてずに静かに流れている小川があった。

北宋の頃、隣国の西夏が勢力を振り、北宋に攻め込んで来た。西夏軍が優勢であった。敦煌に一人の僧が住んでいた。彼は、異民族の西夏が北宋に侵攻して来ることを恐れた。彼は、北宋の文化を護ろうとした。西夏の軍が進攻してくる前に、北宋の文化を護らねばならぬ、と、多数の駱駝を集め、その背に当時の経典を乗せ、莫高窟へと運び、洞窟の中に隠し、前面を土で覆った。間もなく西夏軍は引き上げて行った。二十世紀になってから、その壁面に異状を感じた人が、掘ったところ、北宋時代の佛典、数千万巻というものが発見された。貴重な文化遺産を身をもって後世に残そうとしたこの僧を賞讃してやまなかった。

敦煌の佛たちと別れを告げ、バスに乗る。一面の砂漠の中を走る。

ある地点まで来た時、大勢の人々が集まっている。そして数頭の駱駝が、脚を折って、砂に座していた。

人々は、それに乗った。私の様に、脚の悪い者や、老人達は、駱駝の引く車に乗った。砂漠の中を行く。砂山が、美しく広がる。

砂漠が続く。

少し歩むと、小さな湖があった。水面は、静かに砂山を映している。畔に、小さな寺があった。音の無い、夢の中の様な風景であった。

静寂の湖と、小さな寺の美しさを、心に刻みながら、砂漠の中を歩む。

夢の中から呼び戻されて、帰途に着く。

途中、市場に案内された。

その店で、私は、一枚の「タペストリー」を見つけた。縦、五十糎ほど、幅は、一米少々のものであった。織糸は、どの色も燻っていて、地味なものであった。デザインは、丸型を基調として、左右に連らなっている。いつか、正倉院の御物で拝観したタペストリーに、どこか似ていた。この、西域の香り高き織物が欲しくなった。私は、添乗員に、

「これが欲しいのですが、値段を交渉してくれますか。」

と、問うた。快よく引き受けてくれた。市場へ向うバスの中で、彼は、アドバイスしてくれていたのだ。買物をするこのについて、売り手の値段で買うことはない。必ず、値引きをしてもらうようにと。添乗員は、暫らく店の人と交渉していたが、

「この、タペストリーは、値引きが出来ないのです。他の商品ならば、値引きができるのですが。」

と言う。私は、他のデザインの商品では気に入らないので、売り手の言う値段で購入し、日本に持ち帰った。

翌日は、大雁塔を尋ねる。

砂漠の中に聳える高層の伽藍は、私を圧倒する。

僧、玄奘法師が苦難の末、インドから持ち帰った佛教の経

典を、翻訳したそれが納められている。階上まで登れるようであったが、足の悪い私は、中二階までで、登るのを止めた。中二階には、売店があった。拓本が沢山、陳列されている。私は、「長恨歌」の中の一部分を求めた。そこには、「未央の柳」という文字があるからだ。長女の名は「未央子」という。やがて、西方に傾いた太陽は、静かに落ちてゆく。その美しさに、息をのんだ。もう、再び、西安の砂漠の果てに沈む燃えるような太陽を観ることができないと思うと、瞬時も惜しく、砂漠の中空を瞬くのも躊躇われて見つめ続けた。

玄奘も、この、夕陽の中に身を置き、日々、精進に励んだことであろう。

初冬の寒い朝、私は、敦煌旅行の後始末をしようとした。ブレザーコートを、ハンガーに懸け、風にあてた。ハンカチを入れたままになってはいないか、と案じ、左のポケットに、手を入れた。

「シャリ」とした幽かな音がした。恐る恐る右の手の指先きでまさぐると、黒い粒子が僅かに付いた。敦煌の砂の粒子である。敦煌の砂は、日光の風の中に、ひっそりと、息をひそめている。

「いくちゃん」は、もう居ない。西方浄土に旅立ってしまった。数多くの想い出を残したまゝ、旅立ってしまった。

# 篝火

寺崎 暁生

壬生義雄が皆川広照から茶を点てると陣に招かれたのは四月六日のことであつた。

皆川陣の周りには篝火が焚かれて明るかつた。楯代りの竹束が並ぶなか案内され、家臣を外で待機させ陣幕に入ると、白装束の広照が独り端坐していた。

「これは如何な御趣向かな？」

義雄はやや気色ばんで聞いたが、それには答えずに広照は持ち込んだ釜から茶を点てると義雄の前に置いた。

「粗茶でござる」と広照は凜とした声で言つた。義雄の問いに茶で答えたような恰好であつた。義雄は広照の本心を推し量りながら茶を飲んだ。それは義雄がこれまでに飲んだことのないほど美味であつた。広照は徐に口を開いた。

「某は北条に従つて義兄上と竹鼻口の防備に当たつてまいりました。しかし、此度の戦は日本中の武將たちが北条を袋叩きにするために集まつたいわば豊臣の天下統一の戦であり、万に一つも北条に勝目はありません。このような戦で死ぬのは馬鹿げております。一緒にここから出ませぬか？」

広照の目の中に必死なものがあつたが、

「広照殿からの誘いであつてもそれはできぬ。わしは決めたのじゃ。北条に従いこの小田原の地で滅ぶとも悔いはない」と義雄は静かに言い放つた。それは広照も次の言葉を飲み

込むほど覚悟に満ちたものであつた。

天正十七年（一五八九）十一月下旬、関白豊臣秀吉は各大名に北条攻めの陣立書を交付した。一方、北条家第五代氏直は従う関東各地の武將たちに、十二月中旬以降相次いで、小田原に参陣するように命じた。

鹿沼及び壬生の城主であつた壬生家五代義雄は既に氏直から箱根の山中城の修復を命じられていた。

山中城は足柄城、伊豆の葦山城とともに豊臣軍の攻撃を防ぐために北条氏が最重要視していた城であつた。

下野における北条軍の出城のようであつた壬生氏はいやも応もなくそれに従い、縄張りを改め、郭を増し、ほぼ全域を取り囲む障子堀を普請した。

山中城の修復が終わり小田原城に馳せ参じた義雄は、皆川城主の広照とともに北条家四代当主であつた氏政の弟氏照の下、竹鼻口の防備を命ぜられた。

広照には義雄の妹鶴子が嫁いでいた。一方義雄の正室は天正の初めに亡くなつており、広照の妹であるこうを迎えて後室としていた。二人は義兄弟として助け合いながら宇都宮氏や佐竹氏などと戦つてきた。特に壬生家を分裂させて鹿沼城主として君臨していた徳雪齋周長と一緒に滅ぼしたのは、二

人の結びつきを決定的なものにした。

二月十日には徳川家康が三万を率いて駿府城を出発し小田原攻めの先陣を切った。

三月一日、都を出立した秀吉は箱根山を越えると、二十九日に山中城を落し、韮山城を包囲し、四月二日には足柄城を開城させた。

四月五日、秀吉は北条氏の菩提寺である早雲寺に本陣を敷き、氏直や氏政たちが籠城する小田原城を包囲していた。

山中城が落ちたことで小田原には衝撃が走った。特に修復を行った義雄の落ち込みは尋常ではなかった。

「山中城が落ちたのはわしも責めを負わねばならぬ」と義雄が茶碗の前に置いて苦渋の声を出した。

「いや、北条氏が豊臣軍を甘く見ていたからだ。壬生殿の責任ではござらぬ」と広照は静かにだが力強く言った。

「御盟主もそう仰った」と義雄は俯いた。

広照は茶を飲み干すと義雄の顔をまじまじと見た。

「義兄上は何故北条のためにそこまで……」

「かつて鹿沼城を佐竹義重、宇都宮国綱の連合軍に攻められて孤立していたわしは生涯忘れることはできない。更に我が陣において下され『壬生家に男子の後継がないのなら北条の血筋の男子を遣わそう。壬生家は北条家とは切っても切れない絆がある。更に絆を強めることが肝要じゃ』と仰ったのだ」

「待ってください。そのようなことを氏直殿が……。義兄上はそれを信じて今まで……。それに今更それがどうなるという

うのですか？」

「確かに広照殿の言うとおりにじゃ。北条は滅ぶに違いない。だが、壬生家もこのままいけば後継がないために滅ぶのは目に見えていた。御盟主の『北条の血筋の男子を遣わそう』とのお言葉はわしに一場の夢を見せてくれた。壬生家は北条家と一緒に戦ってきた。滅ぶなら一緒に滅ぶまでじゃ。北条家と同じく五代で滅ぶのが定めだったのかも知れん」

「義兄上、滅びて何になる。生きて新たな道に歩み出そうではありませんか」

義雄はしばし沈黙した。広照が徐に口を開いた。

「某は間もなくここを脱出して豊臣方に投降します。それを許さないというなら某を直ちに切つて下さい」と後ろを向いて正座し手を合わせた。その姿は義雄には眩しく映った。

「広照殿をわしが切れる訳がなからうが」と義雄は叫んだ。広照は突如義雄に縋りつくくと、

「御一緒に、御一緒に」と諍言のように繰り返した。だが、義雄は広照の手を静かに離すとはっきりと言った。

「わしの定めは小田原城とともにある」

広照は一瞬呆気にとられたような顔をしたが、次に悲しそうに言った。

「義兄上、さらばです」

四月八日深更、皆川広照は百余名の将兵と共に陣を脱出して豊臣方に投降した。

小田原城内には衝撃が走った。籠城戦の最中に敵方に投降した武将がいたのは北条方の士気に係わる。

義雄も口には出さなかったが広照がとうとうやったかとい

う思いであった。大変なのはそれからであった。義雄が広照と義兄弟であることを知っていた北条家から厳しい追及を受けたのである。小田原城に呼び出された義雄は、

「皆川広照が壬生殿に此度のことを打ち明けなかった訳はあ  
るまい」と氏政から詰問を受けた。

「いや、某は何も聞かされてはおりませんでした」

「嘘を申されるな。義理の兄で、しかも同じ竹鼻口の防備に  
就いていた壬生殿に黙って敵に投降するとは考えられぬ」

「知らないものは知りませぬ」

「よもや壬生殿も裏切るなどということはあるまいな」

「滅相もございませぬ。某は御盟主に臣従すると誓っており  
ます。そのようなことは決してありません」

このようなやり取りが深更まで続いた。義雄は疲労困憊な  
がら絶対に口を割ることはなかった。

それまでの出来事から義雄の心身はかなり消耗していた。

更にそれに輪をかける出来事が起こった。壬生家の本城の鹿  
沼城が十六日、豊臣方の宇都宮・佐竹連合軍の攻撃で、城の  
一郭である坂田山に火を放たれ、城下の内宿や田宿が焼かれ  
た。この時は家臣たちが応戦したので落城はしなかったが、  
二十九日、壬生城とともに開城したのである。

義雄は帰る場所を失った。そして、傍で見ていられないほ  
どやつれてしまった。

小田原城は秀吉の謀略などにより、内部から離反者が出て  
次第に追いつめられていった。そして、七月五日、北条氏直  
は自らが切腹する代わりに家臣の命を助けて欲しいと降伏。

十一日、氏政と氏照が責任を取る形で切腹。十二日、氏直は  
謹慎処分のために高野山へ。

その間、義雄は帰りたい一心で病の体を無理して鹿沼に向  
かったが、酒匂川に辿り着いたところで倒れた。義雄の臉に  
見えていたのは鹿沼城で後室おこうの方、一人娘伊勢亀それ  
に皆川広照とその正室鶴子と一緒に催した桜の宴であった。

「こう、伊勢亀の病癒えて安堵した」と義雄。

「大神楽を神宮に奉納した靈験かと思われませぬ」とおこう。

「こう、壬生殿にいつまでも慈しんで頂けるようにな」と広  
照。

「兄上、伊勢亀を大切になさいませ」と鶴子。

「私はいつも大切にされております」と伊勢亀。

酒匂川に霧がたちこめた朝、壬生義雄は家臣たちが見守る  
なか四十六歳の生涯を閉じた。七月八日のことであった。

秀吉方に投降した皆川広照は、秀吉から助命を認められ徳  
川家康に預けられた。その後、関ヶ原で徳川秀忠の配下とし  
て活躍した。だが、幼少期から養育していた家康の六男松平  
忠輝の不行跡を家康に訴えたことで家康の怒りを買って、信濃  
飯山城主を改易された。しかし、大阪夏の陣では徳川方に参  
戦して漸く家康から赦免されて常陸国新治郡府中一万石を  
与えられた。それから嫡男の隆庸に家督を譲り、寛永四年  
(一六二八)、八十歳で没した。

#### 参考文献

- ・鹿沼市史編さん委員会編『鹿沼市史普及版 かぬまの歴  
史』二〇〇七
- ・黒田基樹『敗者の日本史十 小田原合戦と北条氏』吉川  
弘文館 二〇一三

# こんぐ 金鼓

徳永 楽遥

讃岐国の国守には嵯峨源氏が名を連ねている。

ここ多度郡は血の繋がる二人、すなわち空海、円珍が生まれた靈妙な地である。

多度郡の豪族に山野で狩りをし、海河で魚を捕る殺生を業とした男がおり、その猛々しい振る舞いに民は怖れていた。

妻は美しく信心深い。赤子が産まれるという今朝も長いこと神仏に祈願している。昨夜来の誦誦が聞こえる中、邸の外を揺るがす産声があがった。赤子の体から芳香が漂った。男の子である。

父はこの子は遅く育ち、後継ぎとして一族郎党を率い、この地を治めると直感した。母はこの世に元気に産まれ出たことを神仏に感謝した。

日が経つに従い赤子の顔は父母のどこかを取り入れ整いゆくものだと美しい母は知っていた。そうではなかった。似ても似つかないどころか造作が崩れていく。長い耳、額を分断する縦皺、吊り上がった眉や目、鼻は裾広がり上向きの穴、膨らんだ頬、厚い唇へと変わりつつあった。

乳を含ませる乳母が顔を背けた。翌日乳が出なくなつた。

二人目の乳母は乳の出が少ない。美しい母は里から自分の乳母と若い乳母を呼び寄せた。事の成り行きを二人には前もって伝えた。若い乳母は顔を背けず、余るほどの乳を出し

た。

四人は顔を寄せた。父は自分の先祖に見当たらないと肩を怒らせて言い放ち、年老いた乳母は里のどなた様にも心当たりはございませんとかしこまった。赤子の行先を案じた。

虐げられ蔑まれた人の口には戸を立てられない。

知つとんなさつな、仁王様の、足の下ん  
踏んづけられよつて、ひっしゃげた

鬼だ

うん、邪鬼だ

お産みなさつたのは、鬼の子

てて親が鬼なら、子も鬼よ

おーこわ

美しい耳に入った。すでに涙は枯れた。命を、自らの命を絶たなかつた。子と母は一つになり、一日一日、手を携えて生きていくしかない。子を抱いた美しい顔が美しい声で子守唄を歌いながら神仏を呪い、一抹の不安が残る己れの血を憎んだ。

いつかはと恐れていた日が来た。子は他の者と異なりすぎる顔に気づいた。鏡は庭に投げ捨て、澄んだ水は蹴散らかした。部屋の中で毀れない物はなかつた。邸の外には出られなかつた。鬱屈が積もりに積もる。喚きうめく声が美しい耳に

突き刺さる。血の涙を流す大きな目が美しい目を射る。ただ胸に抱きすくめるしかなかった。

仔馬を父は与えた。茶が輝く馬が子の顔を舐める。びっくりにして後退る。頭を振りふり仔馬が追い長い舌でなおも舐める。不思議な感覚が襲う。いままでなかったことである。仔馬の顔を小さな手で撫で回す。どこか自分の顔に似ている。笑いたくなった。地面に転がって笑った。長い尾を振って仔馬が長い鼻で子を押し。

毘をかけて鳥や兔を捕え、泳ぐ魚を手掴みし、そして弓を射ることを覚えた。狩りではまず獲物の顔をとことん見た。鳥獣魚、どれ一つとっても同じ顔をしているのはなかった。人でさえそうである。自分もまた異なっているのはいいのだ。それなのに自分を見る民の目は薄笑い嘲笑に満ちていた。彼らの目が口元が心を苛んでいった。心に穴が空いた。自分で塞ぎようがなかった。

子は父の後を継いだ。五位の源大夫という。狩衣に弓胡篋太刀を佩き、馬を駆り家来を従え犬が追う、山野で鳥獣を狩り皮を剥ぎ肉を喰らい、海河で魚を無用に捕る。その数量の度は増した。何かが追い立てる。ある時馬上の五位に向かつて薄汚れた男が木の上から嘲笑を浴びせた。やおら弓矢を取りその男を射殺した。鳥獣魚だけでなく人をも殺生する浅ましき悪人よと民はいよいよもって恐れ怯えた。恐れればさらに悪しきを行い、怯えればさらに悪道をする。時として馬の頭が向いた方角に突っ走らせる。軒先をかすめ庭を横切り畑や市を踏み散らす。蹄の音がすれば年寄り子どもは鶏を抱いて家に逃げる。ものに憑かれたようにひたすら真っ直ぐに駆ける。心の穴は拡がっていく。

美しい母は眉根を寄せる日々が続いた。見かねた老乳母は五位様に結婚の儀はいかがなものでございませうかと耳打ちした。母は夫に相談した。もしご承知いただければ京よりふさわしい姫君を迎えられると老乳母が申しておりますが。どのような方であろう。貴族の家柄ですが、二親ともすでに失せられたうえ頼りにする者としてなく東の対に乳母侍女と心細くお住まいとのこと。姫君は若く清らかで心も美しいお方と申します。他には。一つだけ望みがあり、それは小さな飼犬もともにしたいそうです。最後にこう付け足した。新しい血を取り入れるのです。

初めての対面の折、姫君は俯いていた。しずかな空気の中におおと正面から小さな声が聞こえた。周りがざわめいた。顔を上げた姫君の目には五位殿の膝の上に乗った仔犬が手を舐め、さらには胸に脚をかけ顔をも舐め始めた。五位殿の、それが笑っている表情だと確信できるまで間があった。鬼瓦も笑う。姫君は心を決めた。仔犬が慕い懐くのであれば自分も五位殿を頼りにするしかない。姫君の瞳の色が何故ひたすらに己れを離そうとしないのかわからないまま五位は姫君を愚直に愛そうとした。しかし心の穴は塞がらなかった。

女男男と授かった。あおいという名の娘は父親に抱かれると機嫌がよかった。父の後を追ひ、父のすることを真似、馬に乗り、弓矢も上達した。

十五歳のあおいが同行した鹿狩りの帰途、堂の前で僧が多くの民に仏の道を講じている所に差しかかった。物に憑かれたように馬を降りた五位が僧の傍に立ち、我れがわかるように申せと詰問した。西の方に阿弥陀仏がおられ、これまで罪

多く重ねた人も頭を剃り御弟子となり阿弥陀仏と唱えれば極楽浄土にお連れなされます。ならば剃れと迫る。剃るのをやめさせようとする蒼ざめたあおいに刀を振りかぶる。入道となり袈裟を着、金鼓を首に懸け歩み出すと、袖を掴んだあおいが叫んだ。父はあおいをお棄てになるのか。振り払いざま入道は、我れは西に向い阿弥陀仏よや、おいおいと呼び立て金鼓を叩き、答えられる所に行く、娘とて邪魔だて無用と声を荒立てた。あの白い犬の子だけが跡を追った。

阿弥陀仏よや、おいおいと呼びつつ、西に向かう一筋の道を歩む。沼地では太い蛇が襲いかかり、その口を裂こうとすると蛇の目から涙が出た。放った。暗い木々から降ってきた蛭が身体中に張りつく。金鼓を叩く。血が欲しくば吸えばいい。阿弥陀仏よや、おいおい。心の穴が揺らぐ。

海に面した高い崖の上に来た。入道はその木の股に登り西に向かい阿弥陀仏よや、おいおい、金鼓を叩き、阿弥陀仏よや、おいおい、と呼び続ける。ある日の夕暮れ阿弥陀仏よや、おいおいと呼ぶと金色に染まった沖から澄んだ声が聞こえた。「ここにあり」と。

白い犬が痩せて邸に戻った。休ませた犬を先頭にあおい、家来と続いた。途中蛇にも蛭にも出遭わなかった。

高い崖の木の股に西に向かい手を合わせた五位の源大夫の姿があつた。すでに事切れていた。駆け寄ったあおいは足に手をそえた。すると西の果ての海に紫雲が立ち金色の光が入道を抱んだ。芳香がした。父の口から蓮の白い花が現れた。

# はつ恋

鈴木あぐり

玄関先の百日紅が薄紅色の花を咲かせている。

遠い日、睦美がどうしても植えたいと夫滋にせがんで植えた花木である。他の木々に比べ芽吹きが遅くいつまでも咲いていない百日紅。植えた家には「ものぐさ者」が育つという言い伝えがあり、住まいに植えるのを嫌う地域もある。文豪芥川龍之介も、随筆のなかで、「横着なる木」と記していた。

睦美はうだるような夏日、青空と積乱雲を背に咲く薄紅色が特に気に入っている。ある日睦美が滋に、

「猛暑でほかの植物は朝夕に水遣りをしてもぐったりしているのに、百日紅だけは暑さをもろともしなないで咲く姿は、わたしに力をくれるわ」と言った。

滋は大袈裟だな、權だつて元気に咲いているし、草花と花木は違うよ、と思ったが、同調した。

すると睦美は満面の笑みをたたえた。滋は子どもの頃から睦美のこの笑顔が好きだった。

二人の出会いをはるか昔日、小学生の頃だった。小五のクラス替えて、睦美の隣の席に座ったのが滋だった。男子の小学三、四は「ギャングエイジ」と呼ばれるやんちゃ盛りだが、五年生になったからと急に落ち着くはずもない。

そんななかにあつて滋は落ち着いていた。教師は授業のな

かで難しい箇所での質問は、必ずといっていいほど滋を当てた。滋の解答はいつも完璧だった。そんな時、睦美は、溜息をついた。一体全体滋はどんな脳をしているのだろうか。

滋の家は書店を営んでいた。店内の奥に古書コーナーがあつて根強いファンがいるらしい。店に併設するように滋の母がクリーニングの取り継ぎもやっていた。

両店とも午前中は主婦を中心に女性客、午後は学生や男性客が多かった。滋の母は、クリーニングを出しに来た客にコーヒーを、連れてきた子どもには季節を問わず小さなアイスクャンデーをサービスしてくれた。そのうえ昭和のアイドルの麻丘めぐみに似ていたせいとか、書店に入る前に、クリーニング店をのぞく男性客もいたほどだ。滋は物静かな父似なのだろう、母とは似ても似つかない。

始業式からしばらくすると、係の仕事を決める時間がやってきた。学習係と図書係が人気で、睦美は図書係を希望した。希望者の多い係は、くじ引きを行い睦美は外れてしまい、第二希望の園芸係になった。園芸係の仕事は花壇の世話だった。もう一人の園芸係は滋だった。滋こそ図書係に適しているが、毎日家に帰ると本に囲まれているので、他の係がいい。特に植物が好きなので園芸係を希望したと後で知った。そういえば滋の家の店や住まいの入り口にはいつもたくさんの花

が植えられていた。

昼休みになると、睦美はさつそく前年のクラスの園芸係が手入れた花壇を見に行った。秋に植えたのだろう、パンジーやビオラ、ムスカリが咲いていた。だが春休み中誰も手入れしなかった花壇には雑草がはびこっていて、先きた滋が抜いていた。係活動は翌週からだだが、雑草を目にするとらざるをえなかった。睦美はクラスの皆が園芸係を希望しない訳が分かったような気がした。

それから二日、草を抜くと滋にならない花壇の隅に寄せた。抜いた雑草を見ると、睦美は今まで味わったことのない達成感を得られた。

翌週二人は体育主任の先生から石灰をもらった。担任の原先生が先に話をしてくれたせいで、直に触ると手がかぶれるからと、花壇に撒いてくれた。

石灰が十分作用する一週間、花壇には出ないですんだ。だが頭の隅には常に花壇があった。

ある日滋が花壇のレイアウトを書いてもってきた。見せてもらうと三パターンあった。従来型のもの、「季節の彩ささやく草花たち」とタイトルまでつけたもの、そしてイングリッシユガーデン風の三つでどれも色鉛筆で塗られ、こまかな草花も記してあった。睦美は感嘆し労力をねぎらった。滋はこどもなげになんのこれしきと言った。これしきって何？睦美は初めて聞くことばだった。

睦美は日ごとに滋に触発されて植物に興味を持った。晩秋、校庭の木の葉が散ると、二人は腐葉土をつくるため集めた。級友たちもうちのクラスの花壇が一番素敵だとほめてくれる。なかには家から肥料や、ユリやアネモネの球根を持っ

てきてくれる者もいた。しかも男子児童が意外にも多く持つてきてくれた。これには滋と二人感激した。

秋風が立ち隣のクラスの花壇には萩が弧を描き咲いていた。春に滋と植えたダリアが背丈を伸ばし、自宅から株分けしてきたホトトギスも可憐な花を咲かせている。教卓の一輪差しには花壇から摘んできた折々の花をかざった。たったこれだけのことが、皆の心を和ませた。

秋から冬は翌年の花の準備期間だ。小さな草まで逃さず抜いて、週に一度は土を耕しやわらかくした。

四月、六年生になった睦美はまた園芸係になりたいと思つた。もちろん滋も同じ。クラスの皆も二人を推薦してくれた。こうして翌年も花壇に立つた。滋とも園芸以外の話も増え毎日が楽しく新鮮だった。

二期になると、前年に学んだ作業を繰り返した。暑さ寒さにあった花が咲き、一際目立つ花壇となった。他のクラスの先生たちにも褒められた。そんな時は、草花を手折りプレゼントした。

三学期になると花壇の作業はあまりなく、ときどき土を耕した。睦美は雨の降る前は土の匂いが少し強くなるのを感じた。この頃から滋の顔が暗くしずむようになった。滋の母の具合が悪いらしい。クリーニングコーナーも締め切りになっていた。

中学校の入学式の日、滋の姿がなかった。祈るような気持ちで新入生名簿を見たが、滋の名は載っていないかった。別の中学に進んだのだろうか。

書店が倒産した、夜逃げしたなどの噂がまことしやかにさ

さやかれた。しばらくすると滋が初めからいなかったかのよう  
に話題にも上らなくなった。

滋の家の閉められていた店舗から書籍が、見知らぬ人たち  
によって運び出された。

睦美の心に大きな穴があいた。

それから十年の時が流れた。睦美は時々滋との思い出が  
蘇った。どこかの地でもいい、生きてさえいてくれたら。いつ  
もそれだけを願った。最後の別れこそなかったが滋からは植  
物を育てながら心も育ててもらった。

あの頃の睦美は、共働き家庭の三人姉妹の末っ子で、姉た  
ちから厳しく接しられた。特に長姉は母の信頼が絶大だった。  
母の期待に応えようとしていたのだろう、そのしわ寄せは妹  
たちに来た。

家事を割り振っては、少しでも手抜きするともものすごい剣  
幕で叱った。残業のない日の父だけが救いで睦美の味方をし  
てくれた。

家では父、学校では滋が睦美の理解者だった。滋は睦美と  
同じ歳とは思えぬほどの寛容さで見守ってくれた。睦美がミ  
スをしても。大したことじゃないとさりと流してくれた。  
何より睦美を常に尊重してくれた。

折に触れ思い出す滋だが、睦美は意外な再会を果たした。

睦美が勤務する図書館に滋が本を返しに来たのだ。滋の顔  
を目にするのとすぐにわかった。小刻みに手が震えて、

「返却ですな」の声も上ずっていたはずだ。

図書館に隣接する公園のベンチの横に佇む滋。睦美はあれ  
もこれも聞きたいと思ったが、堪えると涙が出てきた。

「ごめんね」滋の声も震えていた。

二人はどちらかともなくまるで引力に引き寄せられるよう  
に抱きあった。ここが勤務先の近くで誰かに見られたら、と、  
頭を過つたがもうどうでもよかった。これから十年分の長い  
話を聞かなければ。いやいざれ聞けばいいと逡巡した。

滋は小学校を卒業してまもなく母の容態が急変した。つく  
ば市の病院に運ばれ三週間後に帰らぬ人となった。残された  
父子は抜け殻状態に。

その後は噂通りのところもあれば違いもあった。

滋は母が残してくれた学資保険で高校を卒業すると、学費  
がかからないうえ給与や賞与ももらえる防衛大学校へ進ん  
だ。入学後驚いたのは、同じような境遇の同期が何人かいた  
のだ。このメンバーはすぐに仲良くなり、何でも話し合えた。

滋は海上自衛隊に所属した。いろいろな勤務地に赴き、風  
光明媚なところを探し父と一緒に母の遺骨を撒きたいと思っ  
ている。

その時にはもう一人、睦美も加わってもらうつもりだ。

二人とも大学の頃はそれぞれ付き合った人がいたが、長く  
は続かずすぐに別れてしまった。心底忘れられない人がいた  
からだ。

再会後、二人は十年の空白を埋めるべく頻繁に会い、もう  
離れないと誓った。父も睦美を気に入ってくれたが、こんな  
不甲斐ない父を先様どう思うだろうと不安を口にした。

滋は睦美との結婚には家族に反対されかもしれないが、そ  
うなったら時間をかけてわかってもらうつもりだ。睦美と会  
えなかつた十年を思うとなんでもできる気がした。

# 日没

相馬 龍久

今は秋。空気は澄んで冴え渡っている。遠くに見える山塊は昼は青みがかって見え手前の山に至っては木々の様子が見えるほどであった。丘に立っている大学付属病院の十二階ビルからの眺めは絶景であった。

太陽が西に傾いてくると高層にたなびく雲を朱色に染め、山並みを切り絵を張り付けたかのように限りなく黒に近い青紫に塗り潰していく。

さながら大画面の絵画を覗いているようであった。この一週間ほどで秋は急速に深まり晩秋となっていた。夕日は病室を淡い柿色に染めていた。山影の向こうに落ちると舞台のライトが静かに消えた時のようにこの部屋に白んだ気配がやってくる。

看護師がカーテンを閉めると壮大なドラマから目が覚めた。自然光とはかけ離れた目を刺すような蛍光灯の無駄な明るさに、今まで見ていた夕焼けの荘厳なドラマが壊された気分だ。

この病室の患者はそれほど動けない。少々ベッドの上で体をずらしたところで景色は変わらない。この季節にこの部屋にきた患者はそれだけでも幸運だった。おそらくこの部屋の窓から四季を通して山の景色を見た患者はいないだろう。空気が澄んでいる今が一番美しい景色だろう。来年も同じこの

季節の風景を見られる患者はこの部屋にはいない。

この病室は無理な延命治療をせず末期癌の患者など痛みを和らげ自然死を受け入れる部屋なのだ。

一昔前まで終末医療とも言われて医療関係者からの理解も少なかった。医者は患者が生物学的に生きている限り最善を尽くさなければならぬという常識に囚われていた。確かにそうなのだが必ず訪れる間近な「死」に対して患者に無駄に苦痛をあたえる治療を与え続けて良いものかと、一部の医師たちが疑問を持った。

たとえば、死が近づいた老人に気管切開を通し人工呼吸器をつけたら、胃に穴を開け栄養補給などしたり無駄な苦痛を長引かせてしまう。そして患者の家族にも精神的、経済的負担をかけてしまう。そういった現場を見て疑問を持った医師たちが緩和ケア活動を続け、このような病室が出来上がった。

そんな話を担当医の井沢医師から聞いた。

この部屋に入る時は誰しも感慨に更けるものがあるだろう。またそういった思考や感情を放棄してる者もいるのではないか。

あとはその時を待つだけなのだ。

私は井沢先生に出会えて幸運だった。先生は内科医で泌尿

器が専門であった。大学では教授として五年生を教えている。そろそろ定年を迎える老医師であった。

私は腎臓癌の治療で井沢先生と出会った。自覚症状のないまま私の腎臓癌は進み、血尿が出て腹痛を感じた時はステージ四の段階にあった。

井沢先生は癌の転移が認められる私に無理な手術を避けて薬物療法を奨めてくれた。先生の考えは患者本人と家族と担当医師とで話し合うということで、決して医者が上から視線で治療方針を決めてしまうというものではなかった。

私は一年間の薬物治療の後、余命半年を告げられ緩和ケアを選択した。

部屋は四人部屋であった。

入り口の左は豆腐屋のご主人松野さん、そのとなりは窓側の私。入り口右のベッドは昨日空いた。そのとなりの窓側は五十歳前後の会社員だった。松野さんと私は話ができるが、他の人は隣のベッドの人との会話も儘ならない。見舞い客の様子や漏れ聞こえる会話でいたい患者の仕事や環境が分かる。

「先生よ、とうとう社長がしょっぴかれちまったよな」

豆腐屋は私に辛辣な言葉で話しかけた。私は苦笑しながら冷静に松野さんの言葉を受け止めた。

この男はこの男なりに直接的な言葉を避けていた。この病室から出ていく先は集中治療室だ。そして二度と戻っては来ない。

彼はこの部屋に来て元気になった男だ。医者と話し合い緩和ケア治療を理解した患者には時々こいう人がいて明るくなり癌の進行が遅れることもある。

松野さんは夕日を見ては豆腐を売り歩いてた頃を思い出していた。

「夕日のように物悲しくラッパを吹くのよ。そうするとね思いついたように奥さんたちがお勝手口から出てくるんだよ」

「あのラッパは楽器じゃないから、どうやって音階つけるんですか？」

「音階？バカいってんじやないよ、気持ちだよ、気持ち。吹き加減だよ先生」

私は元高校教師だった。それで松野さんは私を先生と呼ぶのであった。二人とも七十歳半ばの団塊世代だった。二人とも体は弱ってはいるものの意識はまだハッキリしていた。

松野は独り言のように天井を見つめ話を続けた。

「先生よ、豆腐にはうっすら味がついていてるけど料理をすれば他の材料の味を吸いとって互いに引き立つてるものよ」

「どんな料理に合いますかね」

「そーねえ、こんな肌寒さを感じる夕方はおでんは美味しいよ、タラちり湯豆腐は美味しいよって心を込めてラッパ吹くのよ」

もうそんな時代は過ぎたが、松野さんは夕暮れの景色を見る度に同じような話を繰り返した。彼にとって長年続いた日常の風景だった。

この部屋から出て行った社長は部屋の患者と談笑できる状態ではなかった。中小企業の社長らしく会社の行く末を案じていた。会社の幹部が見舞いに来ると、力なく手を握り微かな声で、頼む頼むと繰り返していた。

そんな微かな声も静まりかえった病室の患者には耳を通さずとも胸に直接響いた。

その日は夕食まで会話もなく過ごした。

会社員の家族が見舞いに来た。子供はまだ中学生と小学生だった。プライベートカーテンを閉めて家族水入らずで話していた。彼はこのところ急速に弱り話しをするものも苦しうだった。

その夜は満月だった。

窓のカーテンを通して薄明かりが病室を靄のように満たしていた。男の泣くような息づかいが静かに淀んだ部屋の空気を微かに振るわせていた。

井沢先生は時々様子を覗に来てくれた。お腹に手を当てたり脈を診たり胸に手を当てて右手の指先二本でトントンと叩いて反応をみたりしてくれた。昔の医者みたいで私も今さらとも思うのだが、触診されると何だか落ち着いた。先生はベッドに寝ている患者に対して、決して立って話さなかった。椅子に座り視線を近付けた。若い先生はデータばかり見て触診などしない。患者を生物データとしか見ていないのだろう。ましてや担当を外れた患者を見舞う医師は少なかった。かつて井沢先生は患者の私にある告白をした。

「実は私も癌を抱えているんですよ」

担当医師が患者に癌の告白をするなんて私は驚き戸惑った。患者が医師をどうして慰めようか、言葉に詰まった。

「私のは前立腺癌でね、進行も遅いので無理な手術をしないで薬物療法で癌と付き合って行こうと思っっているんですよ」

井沢先生の話を聞いて、私は自分も癌と付き合って行こうと思っただ。

この部屋で「死」という言葉を口にする者はいない。しかし心の中でも「死」を思わなくても直ぐ目の前に漠然と黒い

得体の知れない物が渦巻いているのは確かだ。目を背けても纏わりついてくる厄介なものだ。かと言って何か解き明かそうとしても無理な話だ。人類が何千年と向き合ってきたも答えが何も出ていないのだから。そうだ忘れよう思考を停止しようと思っても、またもや得体の知れない物が纏わりついてくる。そんな話題を松野さんに話しかけた。

「ふーん、そんな話ね。簡単だよ。死んでみれば分かること。今あれこれ考えても仕方ないでしょ」

あっさりと言われた。

それから数日も経たないうちに、松野さんの容態が急変した。慌ただしくストレッチャーで集中治療室に運ばれていった。看護師たちのあまりの手際よさに圧倒され、松野さんに声も掛けられなかった。

何事も無かったように、また病室に静かな時間が流れていた。

その日の日没は山影に夕日が差し掛かると山の向こうから何かに引き寄せられるように急に落ちて行った。眺めていた者たちには呆気ない光景であった。だが最後に一瞬見える輝きは芯まで燃えている備長炭の透明感ある赤色だった。高層にたなびく雲は淡い柿色に染まっていた。

一日の壮大なドラマが終わる。私は自分に重ねて見ていた。この光景に圧倒されていた。

宵の明星が見える。

晩秋も過ぎ幾度目かの霜が降りようとしていた。

## ふわふわ運動会

吉田 稔

今日は、待ちに待った運動会。みんな整理して開会式が始まるのを待っている。ぼくはパパとママに手を振った。ぼくの心臓はドキドキ、足はソワソワしてきた。

「あつくんに負けたらイヤだなあ」

パパに相談すると

「大丈夫、本番は勝てるよ」

あっさり言っていた。本当かなあ。

園長先生が、マシユマロみたいな人と一緒に台に立った。

「みなさん、おはようございます。今日は、宇宙人さんが運動会を見るために来てくれました。天気も良いです。楽しい運動会にしましょう」

園長先生が元気よく言うと、みんながどよめいた。泣いちゃった子もいる。う、う、宇宙人？昨日、特別なお客さんがくるって、先生が言ってたけど。まさか、宇宙人なんて！宇宙人は、園長先生が隠れるくらいの大きさで、体は真っ白。手も足も白い。そこに、ぼくたちと同じ赤白帽子をかぶっている。なんだかとっても柔らかそうで、おいしそうだ。

「まずは、準備体操」

副園長先生がアナウンスした。宇宙人も園長先生の隣で体操している。ふわふわな体がグワングワンと揺れている。手を上に伸ばすところは、空まで伸びて、横に伸びるところ

で、園長先生にぐるぐる巻き付いた。みんながゲラゲラ笑った。ぼくも笑った。泣いていた子もちよつと笑顔になっている。

「最初の競技は、かけっこです」

最初はかけっこだ。練習では、いつもあつくんに負けて二番だった。今日は、ぜったいに一番になる。ぼくは、ピストルを持った園長先生を見て、気合を入れた。

「位置について、よいドン」

勢いよく走り出した。あれ？

「わあああ」

地面がふわふわだ。走っているのに、高くジャンプしちゃう。トランポリンみたいだ。みっちゃんがお尻だけでポワポワと進んで行く。あつくんが空までジャンプした。ぼくも、あつくんに負けないように思いきり地面を蹴る。ふわりふわり、体が宙に舞う。

「時間切れです。またお席に戻りましょう」

園長先生がマイクで言った。その途端、ゆっくり着地して地面が固くなった。あれ？なんだったんだ？

「次は、玉入れです。」

カゴの周りに座って、合図があるまで座って待っている。いっぱい入れるぞ！

「ピー！」

笛の合図で玉を取りに行く。あれ？持った玉がふわふわしている。柔らかくて、軽い。まるで風船みたいだ。投げても、ふわふわして、全然カゴに届かない。みんなで投げても一つも入らない。先生が投げても全然届かない。パパやママが投げても、やっぱりダメだ。赤と白の玉がふわふわ浮かんでいる。

「時間切れです。またお席に戻りましょう」

園長先生がマイクで言った。その途端、玉がドサドサ落ちてきた。パパの頭に赤い玉が当たった。パパが「痛っ」と言っていて、頭をかいた。これって、もしかして、宇宙人のせい？

綱引きになっても、綱がふわふわに浮かんでしまうので、それをつかまえておくだけでも大変だった。

「時間切れです」

園長先生がマイクで言った。

これって、ゼツタイ、宇宙人のせいだ。ぼくは、宇宙人を持ちらっと見た。宇宙人はまったく顔がないけれど、身体を揺らして笑っているように見える。

「次は、大玉転がしです。」

大玉の後ろに立って準備する。前が全然見えない。

そのうち、やっぱり大玉がふわふわになった。手の中に吸い込まれていく。全然押せない。気がついたら、体全部が大玉の中に入った。やった。

「わーなにこれー」

こっちゃんも、入ってきた。なっちゃんも入ってきた。次から次と、赤組のみんなが入ってきた。大玉の中は、ぎゅうぎゅうだ。

「時間切れです。またお席に戻ってください」

園長先生の声が聞こえた。その途端、みんなが大玉から押し出された。ぼくはもう一度、宇宙人を見た。宇宙人は身体を揺らしている。宇宙人が運動会をふわふわにしているんだ。でも、なんで？

「プログラム、最後はリレーです」

ここまで全部の競技が時間切れで終わっているの、もう勝負はどうでもよくなっていた。

「よいいどん」

走り始めたら、体が軽くなっていく。手に持っているバトンが飛んでいった。風に流される。リレーのメンバーがみんなバトンを追いかけているうちに笛が鳴った。

「時間切れです。またお席に戻ってください」

園長先生がマイクで言った。ぼくは、また宇宙人を見た。宇宙人は、大袈裟なほど、大きく拍手をしていた。

閉会式のために、みんな整列をしている。結局、ふわふわだった運動会は、練習とは全然違うことを頑張っているうちに終わってしまった。

なんで、宇宙人は、運動会をふわふわにしたんだろう？

「わたし、今日は遊園地より楽しかった」

隣にいたよっちゃんが笑った。

「明日も運動会がいいな」  
まあくんが笑った。そういえば、よっちゃんは、いつもかけっこでビリだった。まあくんも、練習で負けて泣いていた。玉入力で玉が届かないって怒っていたひろくんも笑っている。

「運動会、楽しかったあ」

ライバルだと思っていたあつくくんも笑っている。今日は、みんな笑っている。もしかして、宇宙人は、みんなの笑顔が見たくて、ふわふわな運動会にしたのかな？

閉会式が始まった。

園長先生が台の上に立った。

「良い子のみなさん、今日は楽しかったですか？」

みんなが両手を上げて

「はい」

そう答えたところで、宇宙人も台に上がって、園長先生の隣に並んだ。宇宙人は顔が無いけれど、ふわふわだからなのか、全然怖くない。校長先生が続ける。

「少し前に、宇宙人さんに質問されました。『運動会で競争して、みんなは楽しいのですか？』そう聞かれて、園長先生は困っちゃいました。みんなは、毎日、楽しそうに、ここで遊んでいるのに、なんで運動会で競争をするんだろう？ってね。だから：今日は、からだを思いっきりね、動かして、とにかく遊ぼうと思いました。みんなが、みんなが、ふわふわな運動会を楽しんでくれて、園長先生は：とってもうれしかったです」

園長先生は、はあはあ：って息が切れている。

「宇宙人さんに、みんなの楽しそうな顔を見せられて、とっても、良かったです。また遊びに：来てくれるみたいですよ」

帰り道、パパに聞いてみた。

「ねえ、園長先生ってなんで宇宙人とお話できるの？」

# 逸見の北海道への旅

森羅一

逸見は昭和三年、神楽坂に開いた高級バーユレカ（註）を弟大野五郎に託し春と秋に北海道の旅に出た。

この旅の過程で「ウルトラマリン第一報告」が構想化され、翌年に第二兇牙利的、第三死ト現象を一括して詩誌『学校』及び『アンソロジー』に発表し吉田一穂の激賞により日本詩壇に登場することになる。

この詩人誕生の契機となった北海道の旅にはどのような背景があったのかを追跡した。

## 旅の概要

二度実行したこの旅はどのようなものであったのだろうか。結果だけを拾うと、北海道に行った。そして、詩篇「ウルトラマリン」が生まれた。この結果を考えると北海道にウルトラマリンのテーマがあったことになる。作品を読むと全編カタカナと漢字、トゲトゲしく、寒烈にみち、自らへの独自と叫び、詩語は自らに向けられ自らへの報告に読める。

旅の内容について、北海道の旅を追ってみる。

逸見の北海道の旅について逸見本人、菊地康雄、尾崎寿一郎の記述から整理してみた。

・逸見く（『修羅の人』から）三月のはじめ津軽海峡を渡った。秋またも同地に飛んだ。旅先・函館、根室、（宮沢賢治追悼文から）旭川。宮沢賢治『春と修羅』が鞆に蔵

はれていた気がする。

・菊地く（『逸見猶吉ノオト』から）昭和三年。旅の経路・

函館、旭川、根室。

旅の理由、「志賀重昂の学んだ札幌農学校（後の北大）をなつかしむ気持ちもあつたらう。同校卒の児玉花外の影響もあつたらう。高村光太郎の渡道に共鳴するところもあつたのかもしれない。彼の磁針は北を指して動かなかつたのである。逸見猶吉が（精神の危機）を感じていたのは事実である。「オホーツク海の色の深さに触発されて、「詩とは極限にさまよう精神である」（これは逸見「ボードレール論」からの引用と考える）とはじめて自分に言いきかせることができたのである。」と書かれている。

・尾崎く（『逸見猶吉ウルトラマリンの世界』から）期間昭和三年冬、期間は三か月、一か月は根室滞在。

森川大憲（根室、清隆寺・副住職）森紫郎（根室、写真家）中沢茂（根室、作家）小山栄華（東京三田の寺の住職・作家、逸見論もある）の資料、談話から同市の二美喜中村旅館に逸見が滞在したことが判明したと書かれている。更に「獣名にして虚用の「猶」から）谷中村民の未知の地への流離・移民の辛苦を『田中正造之生涯』を読んで打ちのめされたのだと思う。猶吉はその本を荷に詰めて北海道秋の旅に飛び出

したのだと思う。」と述べている。

菊池の北海道での逸見詩の確認、尾崎の根室滞在調査。両者とも重要な内容である。特に二美喜中村旅館宿泊は興味深い。

私は逸見の北海道への旅は詩法の体現であつたのではないかと思つている。それは以下の通り。

ウルトラマリンを発表後『詩と詩論』に「ペエリング」を發表する。この作品が詩集の巻頭に構成されている。

このほか「檻」に北ノ北カラ北ニの詩行がある。北の北にはペーリング海峡がある。根室湾から逸見はペーリング海を逍遙したのかもしれないと私はひそかに思つている。これらは旅の後に書かれているが北への意識は潜在していたのではないと思える。北への憧憬は「悩める海の上」（大正十四年）にすでに表れ始まつている。

「ウルトラマリ」と「ペエリング」の語彙を推敲するとこの喩は同類の意味をもつてゐることが分かつた。「詩篇ペエリングを読む」を参照。

「ウルトラマリ」と「ペエリング」はランボー（大正十二年）とボードレール（大正十三年）と対をなしていることが推測できる。

逸見は「ウルトラマリ」の語彙をランボー「酔いどれ船」とボードレールの海からイメージしたのではないかと推測した。作品と詩人の対関係は以上の理由からである。

何故、「ウルトラマリ」の前に「ペエリング」を置いたか。私はこの理由を詩篇タイトル左に献辞した「親愛なる人―C. Bに―」にあると推測した。つまり、逸見はランボーよりもボ

ードレールを尊崇した表れと私は読んだ。そして、なによりも海に精神の象徴として極限の海ペーリングと対峙したかつてではないかと推察する。

旅の目的の中の菊池説の補足。

菊池は「思想、情痴からの脱却でなく、詩法の確認と究明ではなかつたか。」と書いている。

単純に私は旅の中心にあつたのはボードレールではないかと思つた。ボードレールの「人と海」は精神の詩である。海は精神の象徴であることに大きく影響されたのではないか。菊池の引用した「詩とは極限の精神」（これは逸見のボードレール論だつたのではないか）がそれらを裏付けているように思う。

そのために絶対的な場所として北海道が浮上した。「極限の海」とはペーリング海峡を意味してゐたのではないか。正に極北、極限の海である。函館、釧路を経て根室に行きつく。逸見は見えないペーリング海峡を自らの内なる網膜に見たのではあるまいか。「ウルトラマリ」が先に熟成され、後に「ペエリング」が形成されたのではないか。

私の幼稚な視点で二つの作品を改めて読むと、「ウルトラマリ」は自己との対話で、「ペエリング」はボードレールとの対話に読める。

根室に行きながら近くにある谷中村々民の強制移転先である佐呂間への訪問の記録はない。これは旅の目的が谷中ではなく自らの精神の探求であつたと考えるべきであらう。



▲根室半島の風衝林

森紫朗撮影(1990)

写真は「逸見猶吉特集」(『時代』23号・平成二年)に小山東華が友人の根室の写真家森紫朗の防風林の写真を原稿と一緒に送ってくれたものである。海風に拮抗するように圧倒的な迫力を呈している。

《雀ラレタ防風林ノサカシマノ防風林 鴉共ノ風ヲ孕ンデ水ニ鎖シタ風物ノノ互エタ一線ノ攪キミダス非望ノ指示ヲノウルトラマリノ・デイブノ驕リ》(冬ノ吃水)の原風景に見える。空はよどみ、風を孕んでなにかと対峙している防風林の沈黙の群はずさまじい。

北海道の旅の後に書いたこの詩行は、逸見の心象風景と符合するように見える。

逸見はランボー、ボードレールから導いた、詩における「超絶なる精神」の体現のために北海道に向かったのではないかと私は内心思っている。

(註) ユレカは神楽坂に建てられた高級バーとのこと。二〇〇四年に大野五郎がユレカ跡に立つ写真が『新美術新聞』(二〇〇四号)に載っている。現在は新宿区神楽坂、牛井松屋で、坂を上り中程左である。この坂を上りきって右奥に後年、小暮実千代(逸見の兄嫁)が経営した若可菜(通称「ホン書き旅館」)がある。神楽坂は何かと縁があった場所なのかもしれない。



photo: 石川隆

※『逸見猶吉』の誤記。

六十六頁(誤)タダ(正)ダダ、一〇二頁(誤)ポー(正)ポー、一三六頁(誤)前期(正)前記、一五八頁(誤)その悪は宿縁である(正)それは体制側である、一六〇頁註(2)足尾鉍毒事件と鉍山労働者運動とは別の指摘あり、訂正してお詫びいたします。

# スピノザの「エチカ」を読んで

名村 忠

神は人の内省から感じ取られる。自然の観察から来る内省。自然は一刻も待たず推移していく。裏切る賢しらを微塵も感じさせない。年々同じ歩みを続けている。紅こぶしと椿はわが家の庭で違った本性を忠実に生きている。

スピノザという十七世紀中葉オランダに生きた哲学者は、大まかに言うと、自然論から本性論そして神の汎神論の説で著名な人であるが、その思想は1662年に出版された「エチカ(倫理)」で特に有名である。その著作中途、教え(72)(証明)、(注)から翻訳して印象も混じえながら綴り、主張の解析を試みたい。

## 1、理性的なもの

(教え72)自由人(理性のみによって導かれる人)は、作的には行動せず、常に正しく行動する。(証明)自由人が自由である限り、自分の存在を保持するために、たとえ奸智的、作爲的に振舞うことがあっても理性の命に従う場合は徳である。しかし言葉では徳に一致することでも実際の行動では自分の良心に対峙する場合もある。(注)人は死の危険から逃れるために忠義を忘れることがある。自己保持のために忠義、徳なしに陥るのである。直近の悪を見逃し将来の善を取るのである。至る所にある矛盾の状況であるが人間の理性はすべて人間共通の権利を認め勧めている。(教え73)理性によつ

て導かれる人は共通の決意の下にある国家を所有し、自分だけに従う孤独の人よりもっと自由である。(証明)人は従属への恐怖によつて誘導されるのでなく、理性の命に従つてその存在を保持しようとする限り、つまり共同体の生活、有用性に配慮し、共通の決意によつて生きる限り、より自由である。自由人は国家の共通の権利を維持しようとする。人の真の自由は精神力に關係している。メンタルな強さ、高貴な氣質品格に關係している。法に則り、疑問があつても従うのが徳である。そのために精神力が必要であるとスピノザは言う。精神力のある人は誰も憎まず誰もうらやまず自分身のどんなことにも憤怒せず誰も軽蔑せず、少しも高慢でない。これは一見不可能なことであるように見えるが、実際人々は生活のレベルで信仰の力も借りて、コントロールするのである。例えば憎しみは愛によつて克服される。精神力のある人は、すべてが神の本性の必然性から来ているとする。人が重荷、悪だと考えるすべては無信仰、恐怖、不正と同様、細切れの紛糾のうちに事態が理解されているからなのだ、原点に戻されるべきなのだとする。諸物があるがままにつまり自然の必然の姿で理解しようとする限り、真の認識への障害を遠ざけようと努める限り、また、憎しみ、怒り、嫉妬、嘲笑、高慢を排除しようとする限り、人は良く行動し、楽し

く過ごし、徳のある行動を取るのである。(補充)・正しい生き方とはそんな風につきり理性に従って生きることだとスピノザは説く。しかしそれらは整序され広く開陳されているものでなく、リアルな雑多の中に散らばっている。ベストの形にして引き出されるため、纏めて(主文)として示している。

## 2、自然・本性

(主文1)・私たちは自然の一部であり、他の個個物なしには単独では適切に把握理解されず、努力、欲求は私たちの本性の必然性から発生している。(主文4)・人生にとつて最も有用なことは何よりも理性を出来るだけ完成させることである。その中に人間の至高の幸福、幸運がある。この幸福は直感的に神を認識する満足に他ならない。人間精神を完成させることは神、神の属性、精神、人間の本性の必然性から生ずる行動を認識することである。

理性によって導かれる人間の最終目的は、残りの中途の不適切な理解の下にある子供のような力の増殖、拡大を導こう、教育しようとする最高の欲求にある。(主文5)・認識能力がなければ理性的な生活はない。理性的生活には認識能力・資格があり、諸物は認識能力・資格によって定義されて初めて人間は精神の生活を享受する。理性を完成する、そして理性的生活を享受する人間を妨げる諸物を私たちは悪という。人間を助ける諸物は善である。(主文6)・理性的人間が原因となつて働きかけるすべては善だが理性的でない原因から悪が生じる。しかし人間は自然全体の一部に過ぎない。自然全体の法則に人間の本性も含まれる。自然には善も悪もない。善悪両方を含むが故に人間に善ばかりでなく悪もまた起こり得る。人間の本性は無限ともいえる多様な方法で対応し適合す

るように出来ている。そこには理性の力が関与・参加して適合力を貸すのである。(主文7)・人間が自分の本性と一致している個体として生きる時、自然の普遍的秩序に完全に従うことは不可能であるが、その秩序によつて人間の活動能力・資格は促進され振興され養われるのである。それに反して、ある人間が自分の本性に全く合致しない個体に落とされ、てしまう時、その人間が大きな変化を自分で作り上げない限り、不似合いの個体に甘んじ、本来の個体に合致し本領を發揮することは出来ない。(主文8)・私たちが存在する、理性的生活を享受することを妨げると判断する自然にある諸物を最も有効、確実と思われる手段で遮断することは許される。逆に私たちの存在を保持するのに役立つと判断するすべてを私たちの有用性のために好きな方法で利用することが出来る。至高の自然法は人間に有利、好きなように諸物に働きかけることを許している。(主文9)・同じ種類の自然中の個個物の本性が完全に一致することはないように、人間は一人として他と同じ人を見つけることは出来ない。自己の存在を保持する、理性的生活を享受するためには、共通の理性に導かれた他の人間が役立つのである。人間が自分の理性の案内に従つて他の人間を造形、誘導、つまり教育すること以上に人間は自分の巧智、才能つまり知恵を示すことは出来ない。スピノザの場合、人を理性的に生きるよう誘導、喧伝、薫陶、教育する、これが最終目的なのである。(主文10)・人間が悪意、妬み、憎しみの感情によつて相互に唾み合う限り人間は当然対立、反発、恐れあうこととなる。(主文11)・心は武器でなく愛と高貴なる品格で勝ち得られる。(主文12)・結びつきを持つ(関係を結ぶ)それによつて最も早く一つになるそんな絆を互い

に築く、友情を固めることが何より大切である。(主文13)・・・しかしそのためには知恵と心の覚醒が必要である。人間の心は揺れている。理性という原則で生きる人は一握りで、大抵、妬み、共感より復讐心に動かされている。自分を注意深く保持し、他人の感情に惑わされない、模倣もせず独自性を守るためには気分・気持ちの力が必要である。人間を蔑む、徳を教えるより欠点を叱る、挫くことを得手とする人は自己にも他人にも害がある。また不寛容や偽信仰の熱意は人を動物の世界に戻してしまう。両親の注意、小言に耐えられない子供、若者が兵隊に入り戦争の苦しさを味わうことがある。暴力的軍隊の体勢を家の快適さや両親の警告に優先させてしまう。やがて両親を怨み復讐するために、重荷を背負うことになる。親の言葉の重みを知るはずと後のこととなる。(主文14)・・・人間は全てにおいて大抵快適さに従って自己調整しているけれども、共同体内部では欠点より長所が顕在化する。だから共同体では中傷を平静さで耐え、調和や友情を醸し出すことに寄り熱心に進めよう。(主文15)・・・融和・統一は正義、承認、尊敬にあり、共同体に含まれることから育つ。(主文16)・・・融和・統一は恐怖からも育つがこの融和には信頼が欠けている。恐怖は理性利用の欠けた一種の精神的無能力から生じてくる。(主文17)・・・人は寛大、寛容(情け)で心を掴まれる。特に人生の楽しみに必要なものを醸し出せない人はそうである。楽しみは個人の力、有用性を高揚させてくれ、欠点を補うことが出来る。個人の富、財産は各人の能力を時として制限し、友情を壊すことがある。

### 3、感覚的なもの(感情・愛情)

(主文18)・・・善を受容する、認識するには全く違った受け手

の態度が必要となる。感覚的愛・愛情が必要となる。(主文19)・・・愛情とは、つまり体の美しさが醸し出す出産願望・欲望である。精神の自由、理性の働きたは違った原因と認識しなければならぬ。しかし不思議に簡単に憎しみに転換する。感覚的愛は一種の迷妄であり、理性の働く余地は極めて少ない。しかしこれが欠けると完璧な幸福はない。理性と同様に、体の一体化、出産への欲求は体の美しさによってばかりでなく、子供を賢く育てたい、知恵を伝承したいという人生の最終目標とも繋がっている。更に相互愛は各人の気分・気持ちの完全な自由を前提している。美しい自由な二人の出会いには実は奇跡でもある。自然の動物の結合よりはるかに難しい。紅こぶしには紅こぶしの椿には椿の本性があるように、各個人にはその人の定めのような個性特徴、本性がある。人間において、人種において、ほぼ似通っていてもよく見ると、一人として他と同じものはない。各個人がその本性を發揮することが出来る姿が神の意志である。どの個人の定めも見逃されることはない。こうした平等の地盤に立って二人はピンポイントの出会いをする。誰でも出会い結婚出来ると思っても実は誰とも結ばれない可能性を持つのである。唯一無二だ。

本来若い男女は放っておいても自由であれば互いに惹かれ合って子を設ける。憲法で両性の合意で結婚は成立する、と規定するなら、出産も二人だけのものである。内密であり、子が大事なら、宇宙の自然現象を守り保護することに何等の不当権益も関与してはならない。捨て子のグレートヒエン悲劇をゲーテは見事に描いたが、今は金銭的余裕、居住空間、教育の環境の確保があつて、若者は結婚・出産へと歩み出す。

# 漱石、もう一つの原風景・隅田川

## ―『草枕』をめぐって―

柴田 裕巳

### 一 はじめに

すべては、ジョン・エヴァレット・ミレイ（一八二九—一八九六）の最高傑作『オフィーリア』の原画に対面したと  
きに始まりました。二〇〇八年九月二日、東京・渋谷にあ  
るBunkamuraザ・ミュージアムでのことです。

画題はよく知られているように、シェイクスピアの戯曲『ハ  
ムレット』のなかで、王妃の台詞だけで語られる「オフィ  
リア水死」の場。恋人の愛を失い、その恋人に父を殺されて  
気がふれたオフィーリアが、花冠をヤナギの枝にかけようと  
して誤って小川に落ち、やがて水底へとひきずりこまれてい  
く。絵はその直前の、仰向けのまま水に漂う姿を、追真の写  
実で描いているのです。

誰をも魅了せずにはおかない名画、その魔力にとらえられ  
ながら、会場で配布された作品目録中の、「『オフィーリア』  
をめぐって」と題された解説文に、私はとまどいを感じてし  
まっていたのです。

原画にあわない説明があるのに、気づいたからです。その  
違和感が問題意識となって一五年、やっと解明の緒についた  
ばかりです。

### 二 原画にあわない言葉―いずれも出典は『草枕』 ―『草枕』の引用文中の「土左衛門」

説明文は、「『オフィーリア』の印象的な姿は、ロンドン留  
学中にこの作品に出会った夏目漱石にも深い感銘を与えた。  
それは小説『草枕』（一九〇六年）の中で、温泉宿に逗留中  
の主人公の画家の言葉をかりて語られる。」として、次の文  
章を掲示するのです。

「余が平生から苦にしていた、ミレイのオフェリヤも、こう  
観察すると大分美しくなる。何であんな不愉快な所を掴んだ  
ものかと今まで不審に思っていたが、あれは矢張り画になる  
のだ。水に浮かんだまま、或いは水に沈んだまま、或いは沈  
んだり浮かんだりしたまま、只そのままの姿で苦なしに流れ  
る有様は美的に相違ない。それで両岸に色々な草花をあし  
らって、水の色と流れて行く人の顔と、衣服の色に、落ちつ  
いた調和をとったなら、屹度画になるに相違ない。（中略）  
ミレイはミレイ、余は余であるから、余は余の興味を以て、  
一つ風流な土左衛門をかいて見たい・・・」（傍線筆者、引  
用文は新潮文庫版で統一）

説明文は「土左衛門」と、原文をそのまま引用しています  
が、「土左衛門」とは、溺死人の醜く膨れあがった死体のこと。  
画中のオフィーリアは豪華なドレスに包まれて、まだ生の輝

きのなかにいます。目はうつろながら歌さえくちずさんでいるのです。

〔不愉快な所〕とは、背後に描かれた暗いヤナギと思われ、日本独特のシダレヤナギのイメージが関わっていることを、後述します)

## 2 『草枕』のほかの「こころ」では「合掌」も・・・

『土左衛門』は「七章」で三回、「合掌」は「二章」で一回、「オフェリアの合掌して水の上を流れて行く姿」という文脈で、でてきます。

画中のオフェリアは、水の上につきだした両手を開いていて合掌などしていないし、前田愛（註参照）のいうように、『ハムレット』のテクスト自体が祈りの手の介入を許していないのです。

## 三 ヤナギは日欧で種類も意味も違う

展覧会場『ハムレット』の引用は福田恒存訳。たんに「柳の木」とあり、続けて「しだれた枝にかけようとして」と表現しています。訳文はシダレヤナギを思わせるのに、描かれたヤナギは枝垂れていないのです。他の翻訳者たちも似たり寄ったりの表現です。

画中のヤナギ（セイヨウシロヤナギ）はとても大きく、原文通りに小川の方へ斜めに突き出ています。私はこのあと、裏磐梯ビクターセンターの前で、太い枝をくねらせて風格ある大樹となった、教えられなければとてもヤナギと思えない樹形や、五色沼では、水面に傾きながら群れ立つ姿を発見しました。いずれも同種のシロヤナギで、裏磐梯を流れる長瀬川沿いのヤナギもみな同じでした。分岐点で折れやすく、そ

れゆえにオフェリアを流れに落とした「つれない枝」なのです。

シダレヤナギは中国原産で日本に入ったのは古く、万葉集にもヤナギの詠歌があり、平城京や平安京の都大路に並木がありました。

しかし、ヨーロッパに入るのは一七世紀末か一八世紀はじめ。シェイクスピアの時代にはまだなかったのです。Weeping Willow という

英名が文献上現れるのも一七三一年以降といわれます。

ヤナギはまた、イメージの上でも違いがありました。洋の東西を問わず、その生命力や霊力によって予祝と忌みの両義をもっていたところまでは同じですが、ヨーロッパにおいては、まず「失恋の象徴」だったのです。

イングランド民謡の『The Willow Song (柳の歌)』は、「やなぎよ、やなぎ」と繰り返される、悲しくも素朴なメロディー。歌詞をたどれば恋人を失った嘆きの歌でした。日本では近世以降、幽霊とシダレヤナギが結びついてしまい、前出の「あんな不愉快な所」に関係してきます。そして東京以西ではヤナギといえばシダレヤナギになってしまいます。

一方、江戸から明治の東京で、遊興の地・隅田川には墨堤ぼくづみの桜ばかりではなく、花柳界「柳橋」の辺りをはじめ、植えられたヤナギは少なくなかったのです。江戸東京博物館の企画展『隅田川』(二〇一〇年)の浮世絵には、シダレヤナギは納涼の絵などでセットのように登場しています。

## 四 隅田川近くで幼少期を過ごしていた漱石

漱石は知られているように、二歳から九歳頃まで、養家塩

原家で過ごしています。場所は三間町・諏訪町・寿町で、いずれも浅草から少し南へ行った隅田川西岸に近いところで、「夏目漱石文学地図」（『夏目漱石研究資料集成』別巻）の地図でわかります。（七―九歳の間は一旦実家に帰った時期もあります）が詳細は不明）

## 1 隅田川の身投げは、よくあったこと

この辺にかかる橋では、江戸時代から身投げが多く、ことに吾妻橋はその名所だったという。落語の「文七元結」「唐茄子屋政談」「身投げ屋」など、古典落語にも新作落語にも出てきます。江戸では笑い話も・・・

姓名不詳（『江戸の笑い話』高野澄編訳、人文書院）

川に納涼にいくと、人間らしいものが流れてくる。

「泳いでいるにしては様子がおかしい。見てまいれ」

下男が帰ってくる。

「土左衛門であろう、どうじゃ？」

「申しわけありません。名前を聞くのを忘れました・・・」

落語も笑い話もひとつじゃない。いくつもあるのです。

明治二五年生まれの芥川龍之介は一八歳まで東岸の本所で暮らしました。エッセイ『本所両国』には、「百本杭」（両国橋の少し北、隅田川の浪の荒いところに護岸のために打込んだ太い乱杭）での話があります。

「或夏の夜明けにこの河岸へ出かけて見ると、いつも多い釣師の連中は一人もそこに来ていなかった。その代りに杭の間には坊主頭の土左衛門が一人うつむけに浪にゆずらされていた・・・」

『吾輩は猫である』には、寒月と富子の心中未遂事件があつ

て、川から聞こえる富子の声に、寒月があわてて隅田川に飛び込んだつもりがそこは橋の真中だった、というまるでパロディのような話があります。これを、漱石と柳橋芸者との、若き日の心中未遂事件と推する研究（『夏目漱石の恋』『漱石文学の全貌』ともに宮井一郎著）もありますが、私には判断できる材料がありません。

## 2 時代が下っても、土左衛門はいた

文化人類学者の川田順造は昭和九年の深川生まれ。行徳の塩を江戸へ運ぶために家康が開鑿させた小名木川、それが隅田川に合流しようとする手前にかかる「高橋」の辺りです。『母の声、川の匂い』で、子どもの頃のことをこう書いています。

「川はいろいろなものを運んできた。土左衛門―上向きなら男で、下向きは女だといった。夕方などワアワア声が出るので出てみると、流れている。ずいぶんおなががふくらんでるな、もう二日目だろう、などと言いついてる。」

筑摩書房を定年退職したあとも川田先生の本書に關わった学友・平賀孝男さんは、生まれも育ちも日本橋浜町。そこは隅田川を挟んで深川と向かい合う所で、昔からの手堅い商人の町です。幼少時の昭和二〇年代に、川の方で騒いでいると、それが土左衛門だったと語ってくださいました。

## 五 おわりに

漱石が『草枕』でオフィーリアを見まわったわけをずっと考えてきました。漱石の養家での幼少時代は、唯一の自伝的小説『道草』で、自ら「不幸な過去」（二章）と明かして、全作品を見ても、当時の街や風景を語る言葉はとも少ないのです。けれど、明治二年から九年という時代の隅田川近く

で、幼い金之助が土左衛門を見も聞きもしなかった、とする方が不自然でしょう。

ロンドンのテート・ギャラリーで、漱石が初めてミレイの『オフィーリア』を目にしたとき、思わずよぎったのが隅田川の土左衛門だった、としても不思議はないと思います。幼少期の死人を見た記憶というものは、私もそうですが、だれにとっても衝撃的なものではないでしょうか。

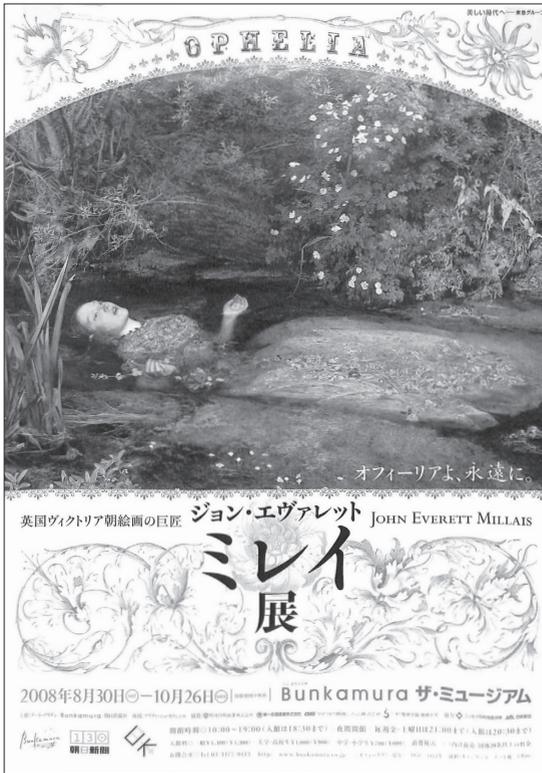
オフィーリアの開いた手を「合掌」と見、生きている姿を三回も「土左衛門」と書いてしまう秘密が、その辺にあるような気がするのです。国文学や美術の分野から、「原画と土

左衛門との差異やギャップ」に言及したものは管見の限り、いまだ拝読致しておりません。

(註) 画中のオフィーリアは合掌していない、と明言したの  
は次の二例のみ

1 前田愛「世紀末と桃源郷―『草枕』をめぐる―」(『理想』  
No.622号、一九八五年三月)。尚本稿は「桃源郷への旅」(『国  
文学』一九八三年一月)を大幅に改稿したもの。

2 越智治雄「漱石の幻想(ただし、最後の注一行のみ)」「漱  
石私論」角川書店一九七一年)



## さらば、グランド湯

松林 厚子

コロナ禍になって以来、首都圏に出かけることがなくなつた。中でも人が多い東京へは、足が遠のいた。

新型コロナウイルスが五類に変更され、ちらほらマスクなしの人を見かけるようになって、気持ちが変わってきた。そんな時、東京に住む親友から、「日本橋着物フェア」へのお誘いがあった。一週間以上悩んだが、決めた。

「東京に行くこう」

三年ぶりの東京へは、車で行った。夜、九時過ぎに宇都宮を出て東京に入ったのは、深夜の十二時を過ぎていた。東北道から首都高速に入ると、荒川の流れとビルの夜景が目の前に広がる。黒い川の流れに、マンシヨンの灯りが映ってキラキラしていた。

「久しぶりだね。やっと来ることができたよ」

と、つぶやいた。私は墨田区で生まれ育った。荒川にほど近い実家に着いて車から降りると、暗闇の中でも違和感があった。翌朝、陽が昇り辺りが明るくなるとその正体が分かった。銭湯の煙突がなくなっていたのだ。

子どもの頃から自宅前の広場の奥には銭湯があった。昔ながらの瓦屋根の重厚な造りで、名前は「宝湯」といった。

入り口には、昔ながらの番台があった。脱衣所は板張りで、脱衣所の隅には籐の網籠が重ねられていた。籠タワーの隣に

は、お・か・ま・を・破・る・タ・イ・プの椅子式ドライヤーがあった。鮮やかなオレンジ色のおかまは遠目に見ても存在感があった。温風を出すにはお金がかかることから高級感も漂っていた。ベビーベッドが四、五台並び奥の棚には名前を書いたシッカロールがボトルキープのように保管されていた。家には内風呂があったので、めったに銭湯に行くことはなかったが、たまに、

「今日は風呂屋に行くこうか」

となると、気分が上がった。湯上りにコーヒー牛乳を飲むのも楽しみだった。小学生の頃、紙製の牛乳瓶の蓋を使う「ぼん」という遊びが流行っていた。掌で相手の紙蓋をひっくり返すと自分のものになった。私はゴミ箱から嬉々として捨てられた蓋を拾った。

子供会では毎年夏休みに「ドジョウつかみ」が行われた。小学校に消防車が何台もやってきて、放水した。校庭も私たちも水浸しになったところで、大量の「どじょう」を放す。ぬるぬるしてなかなかつかめない。キヤーキヤー騒ぎながら、必死になって追いかけた。

帰りには、「宝湯」のチケットがもらえた。興奮冷めやらぬまま友達と一緒に浴槽に入ると、水しぶきが上がった。知らないおばさんから、

「みんないるのだから、静かに入りなさい」  
と一喝され、シユンとした。

中学生になった時千葉に越したが、仕事で使うことがあるからと父は家を手放さなかった。

結婚してからは、練馬区のアパートに住んだ。長男を出産して、育児ノイローゼになった。見かねた夫が、当時、空き家だった墨田の家に引っ越そう、と言ってくれた時は、救いの糸が見えた気がした。嬉々として荷造りに精を出したが、越してからも鬱々とする日が続いた。

銭湯は近代的な建物に建て替えられていて、名前も「グラ  
ンド湯」と変わっていた。

ある日、「風呂屋で映画のロケをやるらしいよ」と噂を耳にした。アメリカ映画で、監督も出演者たちもアメリカ人だ  
というのだ。こんな場末で映画を撮るというのか？ 半信半  
疑だったが、撮影の日がやってきた。

その日は朝早く銭湯の窓から、叫び声がひっきりなしに響  
いてきた。ロケだと知らなければ、警察に通報するレベルだ。  
夕方には、建物から飛び出したモンスターが道を練り歩く  
シーンの撮影が行われた。商店街の米屋や電気屋の前にロー  
プが張られ、その後ろには野次馬が隙間なく並んでいた。も  
ちろん私も子どもの手を引いて野次馬の一人になった。

電気屋のおかみさんは店の前で近所の友だち二人と一緒に  
並んでおしゃべりをしていた。その姿が監督の目に留まり、  
おばさん三人組は映画に出演することになった。三人組は演  
技指導を受けて、両手を挙げてバンザイをすると、背をそら  
して、口をあぐり開けた。

いつも噂話の中心にいる電気屋のおかみさんが、町内の人

たちの注目を浴びてぎこちない演技をしているのが可笑しく  
てたまらず、私は吹き出した。

育児ノイローゼになって、ふさぎこんでいたが気持ち晴  
れた。家の近くでこんな面白いことがあるのだから、これ  
からも大笑いすることが起きるかもしれない。これがきつ  
かけとなってノイローゼも徐々に快方に向かった。

三十年たつてグラント湯はなくなつた。近隣の銭湯も軒並  
み店を閉めたそうだ。長年銭湯に通っていた電気屋の家族は、  
今、遠方の銭湯に通っているらしい。冬は湯冷め、夏は家に  
着くまでに汗びっしょりになってしまふと聞いた。

グラント湯のあつた敷地には、五階建てのマンションが建  
築中だ。かつてこの場所に風呂屋があつたことも忘れ去られ  
てしまふだろう。

# 葱と窓

小林 博

「葱」と「窓」の足の部位に「心」が付くが、二つの文字とも情緒や感情などの、心の動きを意味するものではないのに不思議に思っていた。

懇親会の「懇」や開墾地の「墾」は、両者とも「コン」と発音するが、足の部位には、それぞれに「心」と「土」が付いて意味が違うのは察しがつく。でも窓と葱は天と地、足の部位に「心」が付くとは信じ難い。

もしや国字ではないかと、千五百余字に目を通したが見当たらなかった。

「あわたましい」は「葱」からクサカンムリを取ったものだが、「忽」は俗字で正字は「愨」と「愨」で、平静を失う状態を表しているから、足に心が付くことに不思議はない。

手紙の「忿忿」は、あわただしくしたためたという謙遜さを秘めているので、便りの末尾にさり気ない礼儀が隠されていることに納得させられた。

日本に固有の文字が無かった時代には、遣隋使や遣唐使が持ち帰った呉字や漢字の、該当する音や訓を当てたと言われている。いわゆる万葉仮名で、

石激いわけ垂見たるみ之上のうえ乃左和良妣のさわらひ乃毛要のもしい出春尔いしるはる成来鴨なりとけり

などがその例だ。「尔」は爾の俗字と漢和辞書に記されている程度で、普段あまり目にしない。詠嘆の「かも」に鴨の字を当てているのが可笑しい。

聖書のヨハネの福音書は「初めに、ことばがあった」で始まる。「葱」も「窓」も「ソウ」と発音する。ここにヨハネのヒントが隠されているようで文字の由来にこだわった。

漢字を発明したのは、四千年ほど昔の「蒼頡」という人らしいが定かではない。地面に残った獣の足跡から象形文字を思いついたといわれている。

ネギは地面に育つがマドは地面とは関係がない。「窓」の本字は「囪」と「窗」で、「囪」は屋根にあげた明かり取り、「窗」は穴+囪でマドの象形文字、ウカンムリとは別に穴カンムリというカンムリがあることを学ばされた。常用漢字の窓は「窓」の省略体だと辞書にある。

「葱」も俗字で正字は「愨」、内部に「囪」をはさんでいる。運動会や遠足の朝に、天井の囪である明かり取りから、空模様を眺めたら蒼空だったので、ウキウキして同じ草色のネギを連想し、足に心をつけたような気もしなくもない。

「蒼空」の蒼もソウと読み、「草のような青い色」と辞書に解説されている。瑞々しい黒髪を、緑の黒髪と言ったように、昔は青も緑も色の表現としては無かったので、物の色をスト

レートに使っていた。

青色系なら空色、水色と表現し、緑系なら草色、鶯色とも言い、澄んだ水をエメラルドグリーンとも呼んでいる。幼いころ絵具を正式名称ではなく物の色で呼んだのは、その名残かもしれない。

納豆に刻みネギを入れてかき混ぜると「朝だ」と実感する。俳句の季語の根深汁も朝餉、今日も一日頑張ろう、と言う気合いがにじんでいる。

ソウと発音する文字は意外に多い。「総」も俗字で、正字は「總」で、糸ヘン＋「恩」で束に通じ、たばねるの意味になる。「恩」は「囟」＋「心」で、ネギも束ねて持ち運ぶ。私は小躍りした。共通するのは「囟」を含む点だ。家屋の窓は四角形、ネギは丸の中空、飛躍し過ぎだろうか。

「ヨシの髓から天井のぞく」ということわざがあるが、「葦や蘆」の足の部位には心は付かない。天井をのぞくのだから心が動かされても不思議ではない。

ヨシの髓から天井を覗いても穴が瞳より小さく、空の青さを大海原と誤解してしまう。雲も煙に間違えてしまう。

「視野を広く持ち、まずは全体を、それから細部に当たれ！」と、私は先人に戒められているような気がする。小さい穴から覗くような、見識が狭いものには心は付かない。

葦や蘆には「草カンムリ」だけが付いている。

## 青梅の季節に

古谷 耀子

五月末の夕方になって近くのスーパーへ買い物に行くと、青果コーナーの平台に一キログラム入りの青梅が一袋だけ置いてあった。

私は梅ジュースが好きで、手作りをして愛飲している。しかし青梅が店頭に出回る期間は短く、ちよつと油断をするとじきに姿を消してしまう。

去年は時期を逸して青梅を買いそこない、梅ジュースを作ることができなかつた。専用のガラス瓶にはもういくらも残っていない。

今年こそ買わなければと意気込んだものの、一袋だけではとうてい足りない。私は店員をさがしてもつと欲しいと頼んだ。するとその日の分はもう終わりだと言う。

（うわー、大変だ。今年もまた買いそこなつてしまう）  
その足で、あわてて別の店へ向かつた。

二番目に行った店は、規模は小さいけれど野菜や果物の青果類が充実している。高級なもの置いてない代わりに、値段は安いし接客も親近感があつて評判がいい。

店に入ると、袋詰めの子青梅が段ボール箱に山積みされているのが目に入った。

（ああ良かった）

ほつと胸をなでおろしながらレジかごを抱えて直行し、急

いで青梅を入れた。

品種は「白加賀」。袋の後ろに貼つてあつたシールには、宇都宮近在の農家で採取したことが記載されている。

粒は大きくも小さくもなく、私の理想としているサイズだ。何よりも気に入つたのは、その匂うがごとき新鮮な緑色で、つやつやした丸い塊はまるで宝石のよう。

三キログラムもあれば十分間に合うのに、気が付けば五キロも買つていた。

帰宅してさつそく手順通りに作業を進めた。ガラス瓶に青梅と透き通つた氷砂糖が交互に重なつていくその様子は、あたかも翡翠と水晶の競演を思わせた。

瓶のなかの涼しげな美しさは、初夏の爽やかな光景のように、ひとときの安らぎをあたえてくれた。

七十年以上も前になるが、私は東京都下の小学校へ入学した。クラス担任は中年の女性で、彼女は衣服も和服にモンペ姿で落ち着いた物静かな女性だつた。算数や国語の授業のあいまに、言葉使いや生活上の注意をしてくれた。

そのときに聞いた話で、今でもはっきりと記憶をしているのは青梅への注意だつた。

「青梅には毒があるので食べたらずんでしまいます。学校に

来るときも帰るときも、畑や道路に落ちている青梅を決して拾ってはけません」

注意をされてから十日ほど経って、それまで人一倍元気だったクラスの子が急に学校へ来なくなつた。噂では「青梅を食べて死んだ」ということになっていた。私はすっかり信じた。

それから間もなく、私は父の仕事の都合でその土地から離れ転校したので、噂の真偽のほどはわからない。けれども、青梅の毒に対する恐怖だけはずっと持ち続けていた。

最近になって、青梅の毒の致死量について夫と話す機会があった。そのとき私は、

「青梅を一粒でも食べたら、絶対に死ぬ」と言い張った。

夫は、「そんなことはないさ。そりゃあ大量に食べれば命を落とすことはあるかも知れないが、現実的には不可能だよ」と真つ向から否定した。

幼いころからずつと抱いていた私の思いだったのに、なんだか生い立ちまでも否定されたようで悔しかった。

私の思いが正しいことを証明しなければと、夫の留守中にパソコンで「青梅の致死量」と検索した。

そこには、百個から三百個と……。

何ということか！ 七十年以上も信じ切っていた私の確固たる信念は、その瞬間にガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

ガラス瓶のなかで寶石のように美しい緑色を見せていた青梅も、十日ほど過ぎた今では少しずつ枯葉色に変色を始めている。

## ちゆくしようめ

柴崎 幸子

近所の銀行が統廃合のため、駅近くの規模の大きな店舗に吸収された。長年通い続けたメインバンクの支店が無くなり、「困った、困った」「不便だ、不便だ」を連発している父に、「時代の流れだからしかたない。どうしても用があるときには私が車で乗せてゆくから」と言っただけでなぐさめた。

父は自転車に乗ってどこへでもゆく。散髪にも、整形外科にも、精神力でペダルをこぐ。

ある日、いつもの時間に実家に行くところ父の姿がない。外へ出てみると、自転車を押して歩いてくる父が見えた。家に入って話を聞くと、「駅の近くに移転した銀行まで行ってきた。疲れた。遠くて不便だ。支店がなくなったのは淋しい」と訴える。話を聞いている私は「あんな遠くまで一人で行って、事故にあったらどうするの」と内心ハラハラしていた。

九十一歳になる父は七年前に突然母を亡くしてから、ものすごく頑張っている。

毎週、土曜と決めた洗濯も天気を気にしながら、どうにか自分でこなす。遠くなった物干し竿をめぐけて両手を伸ばし、一週間分の下着を引つ掛ける。ハタハタと揺らめく洗濯物を眺めながら、外の椅子に腰かける姿に、厳しかった若いころの父の面影は薄い。

ゴミの分別も正しく細かくまとめて準備をする。生ゴミは

庭に埋め、新聞紙は角を合わせてきっちり縛る。ゴミ出しを忘れることはあっても、分別が乱れることはない。

本当に凄いいことだと思ひ、感謝している。

もし、洗濯もゴミ出しもできなくなってしまうたら、すべて私がこなさなければならぬ。

こんなに頑張っただけ暮らしを続けている父も、昨今の極端な暑さや寒さが続くと、とたんに弱音虫がうずうずと動き出す。

穏やかな日を選び、蒸しタオルで父の背中を拭いていると、

「もう、いいんじゃないかとお父さんは思うんだ」

「何がもういいの」

「もうそろそろ、あつちの世界に行ってもいいと思うんだ」

「えっ？ そっかあ、でもお父さんがそう思っているだけでも神様が呼んでくれないと、あつちの世界にも行けないよね。きつと順番があるんだよ。もうちょっと頑張ろうよ」

最後に「私も頑張るからさ」と手に力を入れる。すると、背中を向けた父は黙ってしまふ。同じような会話を三ヶ月に一度ぐらい続けている。

私が仏壇に手を合わせて、母の遺影に二言三言話かけたりしているとき、すぐ横に座っている父は愚痴をこぼす。

「先に行つたもん勝ちだよな。まったくお母さんに先に上が

られて、俺は負けた」

とか何とか。つまり人生すごろくにおいて、先に逝った母は上がりで、残った父はまだ上がれず負けたということらしい。思い出したように、恨み言をブツブツ口にする。

頑張っている姿に安心していた私は、父の本当の気持ちから目をそらしていたのかも知れない。

思うようにならない身体や心に、どんなに不安を募らせているだろう。

ペットボトルのキャップを開けられなくて「ちゅくしよめ」とつぶやく。別の日には、同じことを何回も聞いてしまったことに自分で気付いて「ちゅくしよめ」と声もれる。

そんなあれやこれやの父を、私はつぶさに見ておこうと思う。たぶん、これは親から受ける最後の大切な授業だろう。

人間の一生という、蠟燭の炎が揺れている。

炎は消えそうだが消えない。ゆらゆらと揺れながら、小さくなったり、大きくなったり絶え間なく変化する。まるで生き物のように。しかし、土台の蠟はもうそれほど多くは残っていない。

懸命に、生をまつとうしようとする姿は、何の偽りもない。ただ、ただ最後まで生きるといふ真実だけだ。

先日、父はかかりつけ医院で、定期健診のアンケートを記入するようにと、用紙と鉛筆を渡された。字を書くのは達者で、住所もスラスラと書き進んだ。

私は慌てて質問を読み上げる。そのそばから、父は「はい」にも「いいえ」にもいい加減にマルを付けはじめていた。

『最近一年間で転んだことがありますか』

の質問に「はい」と答えているので、

「あれ、お父さんいつ転んだのよ」と声を大きくして私は追及した。すると、父は怒ったように一言。

「明日」

「えっ？ 明日」

さほど大きくない私の目は、さらに小さな点になる。

なるほど、まだ見ぬ明日に転んだら「マル」になるわ。

私は、あんぐりとマスクの中で口を開けた。アンケートの記入を続けている父をその場に残して、外へ出た。

こんな面白いことがある。声を出して笑う。父にはまだまだ笑わせてもらいたい。

明日は転ばないように一日中、見守りをしよう。

# 竹の命を預かりて

## ―勝城蒼鳳先生を偲ぶ―

藤田 香月

竹工芸家で重要無形文化財保持者である勝城蒼鳳先生のお住まいは、私の家から車で十分程の所であり、時々お訪ねさせて頂いていただいていた。

先生にお会いするきっかけとなったのは、やはり竹工芸家の八木澤啓造先生やそのご子息の正先生たちとの親交のおかげからだった。

勝城先生は、ご在宅の折にはいつも温かく迎えてくださり、奥様のハルエ夫人も一緒に歓談してくださった。先生は人間国宝と知られてからも、以前と少しも変わらず、まるで近所のおじさんのように親しく接して下さり、私もほとんど意識することなく心から至福のひとときを過ごしたのであった。

先生の作品は、日照りが続いた後の恵みの雨を表現された『慈雨』を始め、葦の葉を川風がそよそよと撫でて行くその風情に心が惹かれたと、解説されている『音・葦に川風』や『初夏の風』、『蟬時雨』など、自然をモチーフにされた作品が多い。それらの作品に接した時、私たちの身近な所にこそ思わぬ感動があることを気づかせてくれる。そしてそこから優れた技に加えて大らかで何か尊いものが込められ、観る人に発せられているかのように思えるのであった。

先生は『楽園 Autumn 2008』の誌面に於いて次のようにコメントされている。「農業半分、竹半分。農業に自然を見つめる目を養ってもらい、その自然の素晴らしさに感動する心は、竹工芸に育ててもらった。だから私には、どちらが欠けても駄目なんです」と。

日常の生活では、先生は畑で野菜を育てられたり、お孫さんの下校時には迎えに行かれたり、お出かけの時には奥様と一緒のことが多く、よき好々爺ぶりであられた。私との会話の中で、「夫婦喧嘩した時は、私の方から謝っちゃうよ」と、はにかまれた。

また、昭和九年高林村（現那須塩原市）生まれの先生は、飾らない言葉で私の心の中にいつまでも深く残る話を聴かせてくださった。

「高林小学校の庭から観る那須の裾野は素晴らしいなあ」。「家の近くにススキがあつてね、朝陽や夕陽を浴びたススキはいいねー、穂がキラキラと輝いていてね」。

「書は学校ではあまり習わなかった。四年生の時だけだった。父が古物商をしていてその中に三体千字文の本があるのを見つけてね、それを手本に一生懸命ずーっと続けて習ったな」。

などと、なにげない言葉で話されるのだった。

先生はご自身が作られた竹筆で、色紙や短冊によく揮毫され、時には家まで届けてくださった。私が頂戴した中には『晴耕雨読』、『絆』、『日新』、『寿山』などととも先生の詠まれた

『無心ならず 心込め

無我にもならず我が道拓く』

『この竹の命預かる蓮座切り』

があり、深い心境が窺える。

ほかにも勝城先生から、サイン入りの図録も何冊か頂戴していた。二〇一七年（平成二十九年）には大田原市と友好親善都市である岡山県井原市の、井原市立田中美術館に於いて『竹工芸の人間国宝勝城蒼鳳展』が開催され、図録も届けてくださった。井原は遠距離の旅となったが、奥様もお嬢さんに付き添われて行った。オーブニングセラモニーに参加することができたことと喜ばれたことは、私にとつてもたいへん嬉しいことだった。

その後、先生は転んで大腿骨骨折のため、入院された。だが塩原の病院に転院後、あまり日をおかず退院されたのだ。た。「帰ってきちゃったんだ。入院なんかしてられなくてね」と、作品作りのこともお有りだろうが、認知症きみだった奥様を心配されてのことと感じられた。

生涯、先生を支えてこられた奥様は、一昨年の八月に逝去

された。昨年、新盆のお参りに伺うと、白雲の浮かぶ青空の中、勝城先生が亡き奥様のために作られた高灯笼（高竿灯笼とも表わす）が、やさしく、すつくとそびえ立っていた。

半年後の令和五年一月二十八日、竹工芸家として竹に新たな命を与え、多くの偉大な作品と功績を残された勝城蒼鳳先生は奥様のもとへと旅立たれた。

ご子息に「展覧会が続いて無理をされたのでは」と申し上げると、「いいえ、展覧会がある度に父は楽しんで作っていました」と、おっしゃられた。

七月、那須与一伝承館での『勝城蒼鳳氏を偲ぶ特別展示会』には先生の主な作品をはじめ、道具、愛用品、揮毫の色紙等が展示され、先生の技のDVDも映し出されていた。自身の意を通して竹に無理を加えるよりは、竹の意を尊重し、竹の方に合わせてその性質を活かそうとしておられることが伝わってくる。勝城先生は、素朴で誠実で、広く深い探究心と努力を惜しまない優しく強いみ心のお方であられた。

映像には、奥様と二人、近所を散歩される仲睦まじいお姿があった。

# 上等な笑顔のままに

館野ひろ子

仏壇と柱との隙間に卓鈴を見つけた。

四十年以上放置してあったので、もともとは茶褐色の鉄製のものだが、地の色が見えないほど綿埃を被っている。

手の平にすっぽり入るほどの大きさで、ずっしりと重い。父が東北に旅した時、音色に惹かれ、誰にともなく土産に買って来たものだ。父と母のあれこれを思い出させる代物だ。

あの頃、母は胃の手術をし、床に臥せていた。

「用があつたら、これを振ればいいさ」

と、母の枕元に父はこの卓鈴を置いた。

この時、父は知らなかったのだ。母の病気は命が限られていることを。もちろん母にも知らされていなかった。長くて半年の命だと知らされたのは兄と私だけであった。

共働きだった私たちを支えてくれた母の介護のこともあって、経済的に不安はあったが、私は仕事を辞めた。

それで安心したのか、父は録音機をもって、埋もれている栃木の民謡を訪ねて歩いては、楽譜に起こしていた。

ところが、母の再入院から二週間もしないうちに、父は民謡酒場で、太鼓をたたきながら倒れてしまったのである。脳梗塞だった。母と同じ病院に入院し、私は二人の病室を行ったり来たりした。気丈な母であったが、不自由な体になつてしまった父を残して、その二か月後には逝ってしまった。

体の不自由な父に、母が他界したことを言わねばならない。誰がその役目をするかで、兄弟同士が突っかけもちをして尻込みした。結局、私と兄がその役を引き受けた。

「母さんが今朝息を引き取ったの。もう苦しまなくてすむようになったの」

口ごもり、父の顔を恐る恐る見ながら伝えた。

「えっ」、父は見開いた目を瞬きもせず、私を見つめたまま、手にしていた眼鏡をほとんと落とした。

「えっ」の形に口をあけたまま言葉がなかった。

そのときの父の顔が、私の頭から消えることはない。間もなく父は、不自由な体で家に戻り、生きる気力もなくし、医師のすすめるリハビリをも拒否するのだった。

母のいない部屋で、黙って天井を見つめて横になつていて父を、どう慰めていいのかわからなかった。

かつて闘病中の母に父が渡した卓鈴を、今度は私が父の枕元に置いた。母は一度も使うことがなかったのだが、父自身の意志を伝えるものとなった。この皮肉な成り行きを、父はどう思っていたのだろうか。

卓鈴を鳴らす父、父の顔を覗き込む私。昼も夜も、暑い日も寒い日も、澄んだ音が家中に響く日が、それから五年間続いたのである。

用を伝えるとき、自分を慰めるとき、寂しいとき、うれし  
いとき、父は無心に卓鈴を振り続けていた。

ところが、卓鈴を聴く側にしてみれば、日が経つにつれ、  
心中穏やかに、という訳にはいかなくなってきた。いらだち  
から、父をも疎んじる気持ちだが、私に住み着いてしまった。

凍りつくような夜、卓鈴が呼んでいた。やっと眠りについ  
たばかりだった私は、不機嫌そのものの醜い形相で、父を覗  
き込んでいたに違いない。

「さっき、おしっこしたばかりでしょ。今度は何よ」

わめくように怒鳴っている私の目に、父の物悲しげな顔が  
映った。見上げる父の戸惑いと悲しげな表情を、私は眠気の  
向こうに見た。危うく見逃すところであった。優しさのかけ  
らもない言葉を罵っている自分に気付き、私は声をのんだ。

父は邪気のない笑顔で卓鈴を振り続けていた。

「私、お母さんじゃないのよ」

父の顔がぼやけて見えなくなつた。

「お汁粉食べる、お父さん」

鏡開きの日である。父は六年生の孫と将棋を指していた。

「今、一手取られてしまった。完全にやられたよ」

父はうれしそうに、にっと歯を見せて笑つた。幼い子のよ  
うな笑顔の父であった。

「一杯奮発しちゃおうかな」

私は左手の親指と人差し指で、酒を飲む仕草をした。

「いいねえ」

父は、べそをかいたような顔をして、ぎこちなく私を真似  
て左手をひねつた。

父の upper body を座布団で固定して、お汁粉の椀とお猪口を乗せ  
たお盆を差し出した。

父は赤子のように虫歯だらけの口を大きく開けて震える手  
でぐい飲み猪口を持ち、懸命に口を近づけると猫のように  
音を立ててなめるのだつた。すすすることも、飲み込むことも  
難しいのか、口に入るよりこぼれるほうが多かった。

タオルで父の口を拭いながら、私は切なかつた。父は震え  
る人差し指を立てて、お酒の催促をした。

終の別れは、それからまもなくであった。私はお椀に盛つ  
たお汁粉を、匙ですくって口に近づけた。舐めるようにして  
好きなお汁粉と酒を口にして、何様かと思うような上等な笑  
顔を見せていた。その直後、異変は起きた。胸をかきむしる  
仕草から顔面が徐々に白く変わっていく様子に、息子が近く  
の医院のところを走って、医師を引っ張ってきた。

蒼白ながら穏やかな顔に戻っていたが、父の呼吸はなかつ  
た。さっきの上等な笑顔を思わせる顔で、終着の駅に赴いた  
のだ。

「そんなに早く来なくていいのに」

あの世とやらで、父はいつものように母に小言を言われて  
いるにちがいない。

それ以後、卓鈴は鳴らすことがないまま、仏壇の端に横た  
わっている。

# 父とルビーの指輪

関根喜久枝

五十年以上前になるが、その日の事はよく覚えている。

「成人の記念に何か買ってあげよう」

と父に声をかけられ二人で東京上野のデパートに行った。宝石売場で指輪を選んだ。赤いルビーの指輪がきれいだなと見とれていると店員さんが、

「こちらいかがですか。お肌の色に映えます」

とオレンジ色に近いルビーを勧めてくれた。私は色白とはほど遠く若い時から肌が浅黒かった。色々見比べその指輪にきめた。成人式に身に付けていくのが楽しみで心がはずんだ。父の顔を覗くと私より父の方がうれしそうに微笑んでいた。

父は幼い時に相次いで両親を病気で亡くした。気の毒に思った叔父さんが引き取って育ててくれた。叔父さんは国鉄の職員で四人も子供がいた。お米や野菜は畑で作っていたが生活は楽ではなかった。どんな事情か判らないが叔母さんは押入れに隠れて内職をしていたという。姑も含め八人の大家族だった。やがて義務教育の高等小学校の卒業の時期になった。父は担任に呼ばれた。

「進路はどうするんだ。中学に進むんだろう」

従兄弟二人が進学していたので当然、自分も進学するつもりだった。

そんな時叔父夫婦に呼ばれ、「喜一、ここまで育ててきた。これからは自分一人で生きていってくれ」

と告げられた。その時は本当にショックだったと後に何度も聞かされた。それから東京に出て玩具問屋に住み込みで働きた。苦労を重ね、やがて自分の玩具工場を持つまでになった。従業員も二十人いて忙しい日々を送っていた。その頃になると叔父夫婦に育ててもらった事に感謝し、東京に招待して浅草や銀座をめぐる芝居見物や国技館の相撲観戦へと連れて行った。叔母さんは、

「喜一にこんなに良くしてもらって、すまないねえ」と喜んでくれていた。

父は日頃は静かで声を荒げる事もなく黙々と仕事をしてきた。しかし夜お酒を飲み出すと人格が変わった。特に四十歳を過ぎた頃から母に大声で文句を言って騒ぐ様になった。

その頃取引先の間屋さんが父のお酒好きを知ってお歳暮によくお酒を届けてくれた。母は家にしまっておくと父が深酒をするので、いただいたお酒を懇意にしていた酒屋さんに味噌や醤油の調味料に替えてもらっていた。

我が家には常時五、六人の住み込みの従業員がいたので、

家族五人と共に十人分の食事を作っていた。食品の消費量も多かった。

父は商談で外出した帰りによく居酒屋に寄っていた。そのお店のおかみさんから自宅に電話があり、

「ご主人が酔いつぶれているので……」

と知らされた。すると母から私に、

「喜久枝、お父さん迎えに行つて」

と言われ、重い足どりで店まで歩いて行つた。父はお店のカウンターの席に座りうつ伏せになつて寝ている事が多かった。肩に手をおき、

「お父さん、帰りましょう」

と声を掛け手を引つぱつて店を出た。私に支えられ千鳥足で歩く姿を見ると情けなくて本当に嫌だった。

私達家族は父の体を心配し断酒を勧めた。父もそのつもりになり断酒会に入会したが、断酒する事は出来なかった。夏の暑い夜、晩酌をしながらふと想い出したように、

「明日、叔父さんの家に行つて両親のお墓参りをするつもりで、手土産の和菓子を頼んでおいたんだ。忘れていたので取つて来る」

と言ひ残して自転車に乗つて行つた。帰りが遅いので心配していると、警察からの知らせでお菓子屋さんの帰りに中川の土手で転倒して頭を打ち、救急車で病院に運ばれたとの事。急いで病院に駆け付けたが、すでに亡くなつていた。叔父さんに父の事故を知らせると、

「家に来るのに土産なんかいらなかったのに」

と涙ぐんでいた。振り返つて父を想うとやさしかった反面お酒に溺れていつた姿が走馬灯の様に心に浮かぶ。

ルビーの指輪は今の私には少し派手になり指のサイズも変つたのでネックレスに作り変えた。

ある時、福田屋の宝石売場のシヨウウインドウを覗いていると、店員さんが胸に着けているネックレスを見て、

「随分大きなルビーですね。最近そんな大きな石はめずらしいですよ。きれいですね」

と誉めてくれた。私は笑みを浮かべて売場を後にした。ルビーのネックレスは、父の想い出と共に宝石箱に大切にしまつてある。

## 新聞受け

国母 仁

玄関の前には白壁の破片が落ちていた。

チャイムを押しても鳴らない。電池が切れているのか壊れているのか反応がない。仕方がないので声を張り上げてみる。

「Kさん。Kさん。Kさん。」

三回張り上げたが無音の闇がかえってくるだけ。雑草が遊んでいる駐車場には朽ちた木材や竹材が散乱している。多分、薪ストーブの燃料では、と手に取る。薪ストーブはドラム缶を改造したものだ。Kさんの家に伺うと必ず薪ストーブを作った時の苦勞を口にする。

「ドラム缶を半分に切断して、煙突をつけるのが大変だったんだよ」

確かに煙突をつなぐところの溶接がガチガチに盛り上がり上っていた。どう見ても素人の手作り感が目についた。

野菜を収穫するときに使用するコンテナボックスが転がっている。いくつかのボックスはボロボロに朽ちていた。持ち上げるバラバラに散らばってしまいそうな気がする。

蓋の取れた洗濯機が斜めに置かれ、中はアオカビに占拠されていた。

Kさんの家には一年ぶりに来た。一年前は月に二、三回来ていた。もっと早く来ようと思っていたが、脊柱管狭窄症の術後、思うように身体が動かなかったので実現することができなかった。

駐車場には愛用の軽トラがない。農作業や買い物にも何処

へでも走り回っていたトラ。留守にするときには必ず貼り紙をして出かけていたはずだが見当たらない。家全体がグレイ一色に染まっていた。

Kさんとの付き合いは半世紀になる。友人のOが彼のすし店に入りびたるようになり私もいつしか顔なじみになる。

私とんかつ店を開いた頃には、彼はすし店を軌道に乗せ三店舗のオーナーに上り詰め、国産のシーマを乗り回していた。当時、流行っていたボーリングにはまりプロを目指すように毎日通い詰めていた。

一度シーマに乗せてもらったことがあった。

「オレ、絶対にプロになつて見せるからな」

彼は乾いたスポンジのように何もかも吸収するような勢いで時を吸い込んでいった。

私は開業したばかりで、家賃の支払いに苦慮していた。あまりの格差に付き合いも疎遠になってしまった。この時点で芽が出ず、転職もチラつき始めていた。転職と言ってもサラリーマンは性格上向かないと思ひ込んでいたから調理の仕事は諦めなかった。

とんかつ店だけでは支払いが苦しいので夜はすし店でバイトに励んでいた。帰りはいつも深夜一時を過ぎてしまった。振り返ってみるとあの頃が一番きつかったのでは。その証拠にバイトのすし店で包丁を研ぐ練習をしていて深傷をおって医者運ばれたことが甦ってきた。思い返せば私も二刀流を

実践していたのかも。

Kさんの運も長く続かず、すし店を止めざるをえなくなつてしまつた。原因は放漫経営と周りにすし店が乱立してきたこともあつたのでは。再び彼と付き合うようになったのは、私のとんかつ店に出入りするようになってから。彼は借金返済のために二つの職を掛け持ちしていた。

早朝から給食センターに勤めて、その後は乳飲料の配達と一日フル回転していた。乳飲料の配達は工場内の自動販売機の詰め替え作業とか。

私の店には週に三回は来ていた。仲間と連れ立ってきたこともあり次第に付き合いが深まっていた。

深まっていた理由は他にもあつた。お互いに酒が飲めないこと。彼は飲食業を経営していたにもかかわらず一滴も飲まなかつた。その点は私の方が少しましのような気がする。コップ一杯のビールぐらいなら何と飲めるから。それ以上飲むと気持ち悪くなり吐いてしまう。更に、すぐに眠気に襲われるから昼間は絶対に飲まないようにしている。二人とも飲まないのではなく飲めないのが本音なのだ。

二十代の頃は先輩に無理やり付き合わされ、夜中にゲーターと吐き続けたのを憶えている。あの苦しい体験をしているから酒から自然と遠ざかつてしまつた。

彼の好物は大福餅とショートケーキ。甘いものには目がない。さすがにいくら甘いものが好きでもカレーにたつぷりの砂糖をかけて食べるのには、驚愕したというより胃袋の中のをぞきたくなつた記憶がある。

彼も二刀流で借金返済をした後、東日本大震災が発生する。県内では、特に東部地区の屋根瓦が落ち、青いビニールシートが目立つた。

ある日、突然やつて来て、

「マスター、屋根瓦落ちなかつたっけ」と追つてきた。

軽トラの荷台には欠けた屋根瓦が山積みになっていた。

「今度、屋根瓦の修理を始めたから直してやるよ。安くしてやるから」

この時ばかりは鼻息が荒く禿頭には白いタオルがまかれ、すっかり屋根瓦の職人に変貌していた。

「いつから、屋根瓦屋になつたの」

「友達に屋根瓦の職人がいたから一緒にやることになつたんだよ」

それにしても身代わりの早さに驚愕する。

「稼ぐのは今のうちだろう。あと、三、四年でこの仕事もなくなるから」

その後、彼のいう通り次第に落ち着きを取り戻してきて、屋根瓦屋の仕事も減り始めてきた。身代わりも早いが先見を讀むのがひとより優れていた。

次に目を付けたのが、自宅前に広がる畑地。耕作する人が減り荒れ地が広がっていた。

「今度、農業始めたから見に来なよ」

また、大宣言を吐きに来る。

「土地はいくらでも余つているので、タダで借りられるからやる気さえあればいつでも始められるよ」

宣言通り、中古のトラクターを購入しジャガイモを作り始める。ジャガイモを山盛り軽トラに積んでやつてきた。これから道の駅に出荷するとか。バケツに山盛り置いていった。

農業が軌道に乗つたころ、胆管癌が見つかった。何度か見舞に行つたときには更に農業を拡大する夢を吐露する。一旦は退院したが入院を繰り返していた。

帰り際、新聞受けに目が留まつた。

「新聞配達さんへ、入れないでください。お願いします」



## 紫陽花の水揚げ

岩本久美子

水無月の庭先には

淡青色の雨の紫陽花

華奢な枝の先に

球状に集まる花と葉

独特の風情 風趣がある

艶やかなこの草花は

水揚げが殊のほか

難しい花材です

草花は土で育ち

玄関や床の間の生花は

水揚げが肝心

生花は子育ての如しと

教室では話しています

枝の線 花の姿 葉のありよう

そこにまつわる佇まい

切り口に十文字を入れ

素早く水切りして

塩を擦り込み深수에養う

すると道管が

シユーと目覚め

いのちが溢れ出す

やはり紫陽花には

地の塩が必要です

※最後の一行は小林守城先生からのアドバイス

詩の真髓「深 鋭」に触れた思いがした

## 夢

螺良 君枝

純白のキャンバスに

夢を描いた若い日

決意に満ちた白日夢

ブルーの太い線に囲まれた

中味はいつも万華鏡

ひたむきに文学を愛し

大都会のビルのオフィスで

雑誌を作る仕事に携わり

一人凜凜しく生きてみたいと

社会に出て初めての挫折

子<sup>ぼうち</sup>子<sup>ち</sup>のような生き方だと

知った日の苛立ち

清純な子供達と 触れ合った歳月が

汚れた体の鱗を剥がし

バラ色の胸に染めていった

再起を誓った第二の人生  
渦潮に翻弄される

見上げると豪華な客船

甲板に人人は群がり

勝ち誇った瞳が 深深と覗いていた

今は人生の最終地点 彩色の夢を見る

童女に還って 無心に歌っている

大勢の友と 談笑している

白根山頂で 叫んでいる

高原の花園に埋まり 揺れている

一日が 十日が 瞬く間に飛び去って行く

残り少ない 一刻一刻を

ひたすら生きて 穏やかな終末をと

# コロナ禍ウイルスの贖い<sup>あがな</sup>

貝塚津音魚

熱帯雨林が燃えさかる

シベリヤの凍土が音もなく溶け出す

全て人間の欲望の果てに

経済優先 豊かさを追い求める人間の性

見えないウイルスが地球を丸裸に晒し

野生動物たちイノシシ・鳥類・家畜・人間までも

ハゲタカが捕ってきた脆弱な獲物の残骸を

枯れ枝につるし 人間たちの醜態を見おろす

温暖化が生物多様性の緒を食い千切り

地球に居座る人間の命さえもう時間がない

地球破滅の時限爆弾が刻一刻と

人々はひたすら正常な日々を求めて命を明滅させているが  
明滅しているのは人間の命ではない<sup>ほたるび</sup>蛍灯となった

コロナウイルスの命が その虚霊を通し放っているのだ  
人々は贖いの果てにマスクをして緘黙かんもくしてしまった

顔には目だけでは分からない 物語る唇ものがたがない

一つ一つの顔・会話があんなにも懐かしい

離れていても心だけは寄り添っていきたい

強欲の罪滅ぼしの果てに

今やっとその顔全体を見ることの嬉しさに

ウイルスたちの人間に対する仕打ちは何だったのだろうか

目に見えないウイルスさえ

未来を語りかけていたのだ

性懲りもなく 反省もなく過去を置き去りにして

人間だけがその開放に浸っている

贖いの果てにウイルスたちを見習って

さア唇を花開き 老いも若きも

地球の時限爆弾の音を聞きながら

人間の未来を語ろう

# 万華鏡

こやま きお

夜明けのはやい

古い民家の立ち並ぶ街に

向かう夏木立の山門から

ひたひたと修行僧の列

雲がちぎれ陽が照りかえすなか

子安地藏に続く細い石畳の道

いくつもの墓碑に隠れて

何百という小さな赤い風車が

誦経のような乾いた音を響かせている

祈りの時が経てども

容赦なくカサカサと記憶がまわりめぐる

身重のきみをそつと抱きよせたとき

小さな命の鼓動までもが伝わってきた

世間の倫理に背いてでも

きみと暮らしたいと思った

過ぎた日々を振り返ったところで

時間が戻るわけではないのに

自問に翻弄されながら

山門を出る

通りはざわつき若い男女で溢れていた

人も車も目眩がするほど行き交い

街の喧騒が風車の響きとかさなる

めぐりめぐる因果なのか

くるりくるりと赤い風車の万華鏡になる

# 美しい形に結べない

松本ミチ子

画面の中では

争いが続き

「殺」

信じがたい

その一瞬の映像が

ありありと映し出される

それらは

一つの点となって

わたしに返ってくる

記憶なしに

生きることが出来ない

遠い昔

十代のわたしの青春が

美しいなんて嘘だ

砲弾が身近で炸裂し

いつか

行き着くのだろう

死という

笑えない世界に

突き落とされた

そしていま

あの時の記憶が

再び自分の内側に

形と

色と

そして音が

黒い大きな塊となって

蘇ってくる

# 撞着の創刊号

高田 太郎

出来がわるくとも

創刊号というヤツはハナ息が荒く

もったいぶったところがぼくは好きだ

ぼくの詩は真実でも経験でもなく

模倣犯的なところがあつて

自分でも不可解な捏ねくりまわしたものが多い

そしてイナカモノの大言壮語がつきもの

ぼくが始めた『詩流』創刊号（一九五五年）をみれば分かる

といつても

創刊号の素姓はみんな似たりよつたりの真顔と仮面

本誌前身の『時代』創刊号（一九七三年）も例外ではない

発行人岡崎清一郎 編集人落合雄三 執筆者に高内壮介 三田忠夫 平畑静塔 岡安恒武

大滝清雄 水上文雄 三日月朗 石川浩義 増山延映 相馬梅子 小林猛雄など

文芸大家を気取った人々の群

もったいぶったところは今のぼくと変わらない

ただひとつ違ったところがあるとすれば

かれらの行間には

オレたちは県内の多くの凡庸なる文芸人の守り神だとの

撞着が見えかくれする

『時代』の幽明過客となったかれらは

今どんな創刊号を企み

ぼくらを守ろうとしているのだろうか

# 稲田で

村上 周司

朝、光は稲田に刺激をあたえていた

草の匂いを風は運び

私は稲田がさわやかな音色ねいろを奏でているように感じた

遠く犬の鳴き声が

けたたましく鳴いた

私は開田の水口みづぐちをなおしていたら

鳥の鳴き声が合唱のように聞こえてくる

光は稲田の割れ目に吸い込まれていく

私は開田の一町歩ぐらいの稲田を

くまなく見渡しながら

心の中で明日の作業を考えていた

また、なにげなく見上げる

空は遠近おとこちにシャワーのように輝いているような

幻想を感じながら浮遊しているような

錯覚を感じていた

# 亀山荘

森 秀夫

太平洋へとつながる

鏡のような気仙沼湾

空の青を映して白い雲が浮ぶ

麗らかな陽ざしに潮の香が満ち

大型漁船に

飛び交うウミネコの群れ

亀山の頂に立てば

眼下に気仙沼湾 唐桑半島

南にはるか金華山

漁火

満点の星あかり

流れ星

純和風のしっとり落着いた館  
心温まるおもてなし

人膚のぬくもり

三陸ことばがやさしい

新鮮な海の幸魚づくしを食すれば  
身も心も甦える

忘れかけていた何かを思い出させる

ここには

明日が

夢が

希望がある

ここは桃源郷

愛してやまない私の宝

どんなに遠く離れても

君は私の心の友

気仙沼 亀山荘

注釈 『亀山荘』気仙沼にある漁師の宿

## 街道

神山 暁美

杉の並木の間に間に  
ゆるんだ陽ざしをあつめて  
真っ赤に色づいている樹がある

樹木が色彩をえらべない夏  
両脇に鬱鬱とした想いをかかえて  
その深みへときえていた道

空をとざす暗を突きぬけ  
こぼれ散る夥しいひかりの粒が  
見あげる頸に 頬に 額に  
痛いほど降っていた

みどりは嫉妬の色　と耳の記憶

信じられるのは季節のめぐり  
九十九折りの坂道を  
たしかに降りてきている

絡まったみどりを解ほどきながら  
街道はまっすぐに冬へと延びる  
やわらかな薄日を曳いて

# 運命

戸井みちお

八月も末

私の散歩道に咲くアジサイ

七変化もおえ枯れ御花

その中にめずらしや

遅咲きの花一輪

摘みとって持ち帰り

窓辺にかざらんと

先ずは洗面台に水ためて

水切りせんとひたす

ポロリとおちた虫一匹

流した水もろとも

下水へ

あ！お前

もう帰れない

## 風に残して

大島 孝子

木々のみどり草の緑の美しき季なり雨の五月六月

なつつばき垣根に咲けるからすうり地に十薬と六月の白

まだ緑あをき糸のころ草の二、三本風に残して草とり終る

色あせしあぢさゐの枝々切りつめて梅雨明けちかき庭に風呼ぶ

こんな明るい人だったのかヤマト便マスク外したいいつもの若者

炎天下帰りきて飲む冷水の 一・気・飲・みとはこういうことか

探しもの今日またひとつ深みゆく空の青さに秋を見てをり

調律師の鳴らすピアノの音聞こえ外はガラスのやうな秋の陽

再びを寝ねむとしたる真夜よの耳に秋へと急ぐ雨の音聞く

亡き人と話しあひたき雪の夜 在りたる日びを不在の日びを

## ちいさな砂

唐澤るみ子

山やまが畑が鳥が燃えてゐる 水でできてる人間よ 走れよ

あしたはもうゐませんわたしと鳴いてゐるあのカナカナも何を見たのか

ひまわりは何のしたたり首たれて昼を哭くなり金のなみだで

どうしたら赦しあへるか蟻たちはぶつかるたびに頭を下げて

真黒な怒濤をましろき泡と化すあの砂山のちいさな砂よ

何ももう言はずに去らむ言はぬゆゑ思ひよいつか透む日のあれよ

ひと房のぶだうとなりしむらさきの大地の蜜を眼つむりて飲む

しんとしたこのさみしさよ いつの間に我らはどこへ来てゐるのだらう

はるかより何かがまつすぐやつて来てある夜われらを樹と花にせよ

すこしだけ振り向いてゆく今朝の蝶心のこりのしぐさか いとし

## 離りゆくもの

神野 規子

蛇行して老いの日はゆく今日ひと日南風強く吹きすぎにけり

いずこまでゆきしかわが人世ひとよなり夕焼けを背に帰り道なり

あじさいの葉を這いているかたつむりここにもありやでむしのかなしみ

ボルガの舟歌うたひし日々も遠くしてウクライナに春は来たりや

ムスカリが紫の花咲かせをり古代遺跡の中にも咲きしと

人間の罪如何ばかりかと問ふてくる夏の日差しの衰えぬ日々

秋明菊庭面を染めて秋は来ぬ蝶もあきつも花に酔いいて

銀色の一筋つよき蜘蛛の糸庭にはりいて冬は近づく

病やまいから詩うたが生まれる看取医の言葉にわれも癒されてをり

外つ国に孫こは旅立てりわが身より離りゆくもの多くなりゆく

## 抱擁

佐藤 孝子

渡良瀬の葦原分けてゆくひとの背も旅鳥も青き遠景

「再び」に人は執せど呆気なく帰る渡りの鳥を見送る

帰れとも来よとも言はぬ男の心鳥を見送る幾春秋や

へのの一字「野心」に足せば「野の心」散り時を知る萩のほろほろ

もう過去のことではかない抱擁の名残にも似て葛の暗がり

抱擁を法要と示すパソコンにわが年齢は悟られてゐる

穂芒の靡く高原草傷の疼くほどなき別れなし来つ

狐雨のごとくきらめくひと処われに一生の大方は過ぐ

つまづくを胸に受け止め老い夫と世にも寂しき抱擁をせり

たまものの口紅すこし赤すぎて老女であること忘れてしまふ

# 昭和、平成、令和を生きる

高橋 淑乃

擬宝珠は一日咲いて終る花うす紫に慕情は尽きず

夏枯れに花の乏しき庭の隅藪蘭の穂が揺れて虫呼ぶ

さびしきは九月の庭のトレニアが乾いた種子を抱ける姿

寅の尾も藪蘭の穂も秋告げてさやかに揺れる風の道あり

魂は大きな空を飛びまわる トリチウム流す大きな海に

この秋のさんま高くてシビアだよそれでも一度は食べたい味覚

栃木県の梨は美味なり猛暑にも冷たき雫にのみどうるほす

〈たかむら〉と26年歩み来て昭和、平成、令和を生きる

生れしは昭和の初め 令和まで生きて授かる和の字を二つ

庭先に花を探せば群立ちて藪蘭の穂が木下にさやぐ

## アイノカタチ

田村世津子

迦陵頻伽の妙なるこゑにミーシャうたふアイノカタチのしらべ透きつつ

磨崖仏とただの石ころにも照る光のあふれ天よりの微笑みしやうみなぎる

きらきらと煌めくとほき恋模様染めぬし日々はみな美やさしかり

心根に咲くは志功の菩薩かと思ふときありLサイズの友

雨に打たれ風にまみれて走りきぬ 何に勝たふとしたのかわたし

下ばかり見てゐるひとよ見てごらんグラデーシヨンの境目なき空

この先も詠草の花咲かせよと師のこゑ泌みぬ秋の夜の韻

ストラディバリを聴き分ける耳は持たねども歩調おだしき夫帰りくる

自転する星のうごけるままに老ゆ生くるは楽し生くるは哀し

ハリポッターの呪文をさけぶ永永やうやうと平和よつづけ エクスペリーアームス

(武器よ去れ)

## 一日はじまる

福澤 悦子

ひむがしの空に棚引くうす雲の朱を帯びて新たなる一日はじまる

朱の雲黄にほぐれゆき水色の空に吸はれつ瞬の間にして

ときの間に空に消えゆくうす雲のはかなさに似む我の命も

ふりかへる八十余年の歳月に師あり友ありし縁ありがたし

師に友に遇ひしも縁と励みしが今の命に繋がるらしも

をりをりを命を燃やし励みたり短歌<sup>うた</sup>お茶語り謡曲仕舞

一つ道つきつめるなく次々と真新らしきに心燃やしき

歌の道いつしか逸れて締め切りの迫るを十首詠みなづみをり

今にして思へば空しき迷走の一生なりけり悔ゆるにもあらず

いましばし歩みてを見ん死に向かふ旅路の果てを見極むるまで

にはたづみ  
潦

増田 律子

気紛れな驟雨を避けて男の孫とアンパンマンの漫画見てゐる  
やうやうに雨の上がりし庭に出で孫と並びて深呼吸せむ

涼風に四肢を伸ばせる孫なれば空捉むがにグウパアグウパア

雨上がりの庭に闊葉輝きてゆるる雫は七色の彩

をちこちの庭の窪みの潦孫は目敏く近寄りにけり

潦に映る小さな青空をとびこす孫のこゑの弾みて

片足とび両足とびと遊びつつ掌に移る間の時のかからず

宝物みつけたる如喜喜とせむ孫は掴むか潦の空

忽ちに濁る小さな潦うまじ孫夢中のどろんこあそび

泥汚れに満面笑まふ孫の顔和毛の髪を丹念に拭く

# 植物は知性をもつてゐるのか

山崎緋紗江

クリスマス正月立春雛月ひひなつき 紅きシクラメン部屋に息づく

いつせいに山ぼうしの花白く咲き森は聖なる気配に満ちぬ

歌ふやう囁くやうに庭なかのシンボルツリーのオリーブ揺れる

藪草どくたみは白く十字に苞くさひらきかすかに照らすこの世の闇を

はらはらと木斛もくしやくの葉の散り止まずかたへの大き木斛伐れば

さよならを交はしただらうか三十年寄り添ひし樹の伐られゆく朝

『植物は知性をもっている』とあり庭の草木や苦瓜トマトも

眠りより目覚めるやうに青々とブロッコリーの自然解凍す

庭すみの萋や茗荷に花咲きて牧野博士のごと声をかく

水をかへ窓開け放ち明けがたの気を招き入る きのはきはきのふ

人参

石井  
光

タウン誌の運勢は吉初蝶来

つちふるや胸に冷たき聴診器

花冷や手で温める聴診器

縁台に投げ出す足や夕涼み

空蟬や絵日記綴じる日曜日

秋雲やサーブのトスのより高く

蝸や石段上がる縄電車

人参の泥や朝日の匂ひ濃し

松過ぎの客は自転車軋ませて

手袋をとりてフリマの古書漁る

# 曼珠沙華

人見 靖子

包丁を築地で買へり初燕

地震がきて思へり今朝の蛙の死

玫瑰や岩にぶつかる波の音

蜘蛛の囿の風を通して輝けり

駕籠にのり五臓の揺れて夏木立

母連れて行くには遠し曼珠沙華

星月夜母との別れ触るるだけ

くるくると紅い林檎を剥きにけり

心持ち新酒に酔うて美濃の国

黄落やへりコプターの着地点

# 青田風

渡邊 公之

玄関に居間に厨に初曆

福寿草日の出とともに今朝咲けり

春風や幼子一步もう一步

わが星は戦のにほひ朧月

朝練へ向かふ自転車青田風

佳き人の来て風鈴の良き音色

朝明の下野の国稻穂波

山ひとつ越えればみちのく照紅葉

立冬の雲の流れの早さかな

寄り来たる綿虫に目のありやなし

## 下り坂

善林 真琴

拗ねているようにも見えて黒電話

お喋りがしたくて葉書買いに行く

楽しいね人生少し下り坂

振り返るのは焦りですか余裕ですか

異常なし脳には当てぬ聴診器

墓の前DNAが姦しい

きつと淋しいんだ饒舌なあなた

町医者に託す山登りの歩幅

力まずに一歩一歩と丸木橋

二人して越えるこの坂水たまり

# 神の通り道

石寄 敬子

シロナガスクジラが跳ねる春の空

野良猫の抜け道となる犬走り

トンビの子飛行機雲と並走す

アメンボの波紋に揺れる胸の内

なめくじの宴のあとの絹の道

蟻地獄となって空を仰ぐ神

寝姿はタツノオトシゴ熱帯夜

神様が背を押すときの武者震い

抜け殻を証と家の守り神

嘘なのに母が頷く去年今年

## いつの間に

松本とまと

貧しくも夢見て咲いていた野ばら

右肩がぐんぐんバブル好景気

マイカーでドライブ夢のハイウェイ

いつの間にパソコン繰ってスマホ見て

豊かさを知ると放棄したい苦勞

ふる里は空き家空きビル空き店舗

青い海されどプラゴミ汚染水

いつの間に少子高齢また非婚

だとしても地球むかしに戻らない

さあ出番 恋のキューピッド・コウノトリ

# 明日へ

柳岡 睦子

AIの影がちらつく回答書

青空に言い訳ばかり吐いている

マイホーム帰りたい日と逃げたい日

まっ白い花と出逢った曲がり角

大陸と七つの海に問う平和

岬からミントのような海の彩

夕映えのカーブミラーに写る明日

ふるさとは百点そして二重丸

薔薇バラばらみんな愉快に生きなさい

新しいシューズ平和へ走りたい

# 老活

水上 義明

敬老の祝に集う共白髪

晩学の成果を競う文化祭

女性には花を持たせる平和主義

炎天下奉仕に流す玉の汗

午後の部も忘れてならぬ医者通い

男にも言い分あるさ家事負担

老活の終着駅はまだ遙か

沈む日に戻たたかれる庭仕事

老活にハーフスイング許されず

一日を締める一献明日の糧

# うまく生き延びても

三上 博史

核シエルターうまく生き延びても地獄

砂浜を走り無邪気になる素足

夏雲よ俺にもあつた反抗期

雨粒がタップを踊るトタン屋根

横歩き蟹はいつでも傍観者

猿なんか滑るものかとサルスベリ

全身を愛に燃えます旻殊沙華

酔い覚めの水蛇口から秋を知る

泡立ち草嫌がられても花は咲く

振り返る心を刻み込む氷雨



特集

再スタート

## 何とかなるさ

松林 厚子

自宅の駐車場から車を出すとき、ガリガリっと嫌な音がした。慌てて運転席から降りて、左側に周ると後部座席のドアにサッカーボール大のサイズの擦り傷ができていた。よく見ると、その下の箇所にもへこみがあった。

「あーあ。やっちゃった」

カーポートを設置したばかりで、まだ支払いも済んでない。その真新しい支柱に、こすってしまった。ドアの修理費用はいくらかかるのだろう。その日の夜、冷蔵庫の製氷室を開けた夫が首を傾げた。

「きちんと閉めてなかったのかな。水が溶けてる」  
「ちゃんと閉めてよね」

私が苦情を言った翌日、冷凍室のアイスクリームがドロドロになっていた。

（冷蔵庫よ、お前も壊れてしまったのか）

買って十年、すでに製造中止になっていて修理はできそうにない。新品を買うことにした。電気店で二日後に配送される最新型を選んだ。

真夏のこと、冷蔵庫を開けると異臭が漏れてきた。牛乳や、タッパーに入った残りのおかずなどを処分した。ごみ箱に入

れようと台所の外に置いてあるゴミ箱の蓋に手をかけると、取っ手がポロリと取れた。

（今壊れる？）

持ち手の取れたプラスチックの蓋をにぎりしめて、空を仰いだ。ゴミ箱はそれ程高価なものではないのだが、踏んだり蹴ったりのように感じた。

二年前の春には、同居している母が日々弱ってきて悩んでいたところに、難病の孫が手術をすることになった。息子から手伝いを請われて途方に暮れた。母を残して泊まり込みで家をあけられない。

周りの人に相談すると、介護認定を受けるよう勧められた。要介護Ⅰに認定された母は、デイサービスに通うようになった。孫の入院中は母をショートステイに預け、息子家族のサポートをすることができた。

母は、その後もデイサービスに通い続け、私の悩みは軽減した。

何事もなく生活できれば良いけれど、そうもいかない。時に心配事が重なって、ともすれば「私だけが何でもこんな目に合わなくちゃならないのよ」と落ち込むこともある。が、その時にできることをして乗り越えていくしかない。今までも何とかやってきたのだから、きつとこれからも何とかなるだろう。

# トランジット待機中

福富 陽子

テレビドラマの中で、「人は皆、泣きながら生まれてくる。笑いながら生まれてくる赤ん坊はいない。生きるって泣くことだ。それで生きていく中で笑うことを覚えて人にやさしくなる」という台詞があった。原作となる中島京子著の小説『やさしい猫』の一場面である。

ラジオからは、「還暦を機に子どもに還ります。むやみに人に合わせたり、うかつに共鳴もしません。いい人やめます」とリスナーのメール紹介が聞こえてきた。

はて。私はこれまでそのようなことを真摯に意識したことがあったか。過去には楽しいことや嬉しいことがたくさんあったはずだが、無防備に昔をまさぐると嫌な記憶が先行する。

人にやさしくできているかどうかの次元より、人に合わせ過ぎて自我を弱らせてしまった場面のほうがたやすく甦る。

「いい人対応ができる偽薬」を知らずのうちに私は飲み続けていた。オトナ心とコドモ心の狭間で、「仮面の使い方」の説明書も読まなかった。それでも自覚症状としては以前から他者への関り方が変わってきた。価値観、考え方の違いから口論ともなりかねなかった青き時代は何処へやら。厳しい言葉に対しても反応が鈍麻になった。つまり対人問題にこだわる気合が希薄になった。日常が多忙気味なせいか引きずれない。

口角泡を飛ばす体で論破の土俵に上がってもそもそも馬が

合わぬ人とは好む辻も、歩む速度も見ている風景も違う。

金子みすゞの「みんなちがって、それでいい」の言葉を今更ではあるが、こころという時に頓服薬として服用している。

泣きながら生まれたなら泣き方は遺伝子レベルで知っている。笑うのも三者三様の間でうまく共存するために備わった本能だとしたら、子どもはその両方を巧みに駆使する。特に物心つくまでの幼児期を「爽やかな自己表現者」と言い換えることもできる。心理学でいうアサーションの極技か。

私が長いこと己を憂うことになった「他者優先の大まचाがい」に改めて気づかせてくれたのは世の中の幼児である。知らないことは知らないと言い、嫌いな食べ物は口を閉ざす。場が退屈なら欠伸をし大泣きもする。ありのままNOを言う。

その逆をすんなりできるのがオトナである。まさに、私はオトナの何十年も、はんかくさい生き方をしてしまった。

部屋の見えるところにスーツケースがある。トランジットを待つ象徴だ。抗えない衝動に突き動かされるその時を睨んで用意だけはしてある。汗とも冷汗ともわからぬものを流しながらのつべらぼうの顔で笑っている現実を自覚するも、適当に職場にいてもいい。大相撲の力士調、「一日一番がんばります」の境地だが、「子どもに還れる」年頃、私自身が再び天道を飛ぶ秘技を授かる可能性だつてある。続ミステリーツアーの一員として乗込む機体もトランジット中と心得る。

あるいは、コドモ心をひどく欲しているオトナの自分、もうそれらのどちら側でもない領域にいるのかもしれない。

# 黄金の七十代へ

## 小林千枝子

六十五歳で定年退職を迎えて約三年半の年月が流れた。仕事はいわゆる研究職で、退職後も二年ほど非常勤講師の仕事が続いたが、オンラインにより自宅で対応した。

私には三年余り施設で暮らしていた母がいた、コロナ禍ゆえ面会ができないことや母が弱ってきていたことから、母の入院を機に私が自宅でお世話することにした。車いす、介護用ベッド、スロープ等をレンタルし、退院と同時にデイサービス等を利用しながらの在宅介護を再開した。

それと前後するように、横綱級の高齢出産でできたひとり息子が大学生になって、ひとり暮らしをすることになった。母、夫、私の三人の生活になった。ところが、それも長くは続かず、母が緊急入院。退院して再び在宅になったときには、訪問医師や訪問看護、訪問入浴の契約もして、私は母につきっきり生活となった。退職後一年余りしたころだった。

その生活も長くは続かず、母は五月下旬の早朝に逝った。夫と二人で看取った。穏やかな顔だった。葬儀や納骨を兼ねる四十九日法要に加えて、相続その他の事後処理を淡々と進めた。そうしながらも、私と同じ母の子どもであるきょうだいたちと協力し得ぬまままきていることが、どんよりと私の心の奥底に沈殿していくような息詰まる思いも感じていた。

私は論文やエッセイ等を書くことを日常としてきた。私に

とって書くことは自分の心を整理する手段であった。しかし、このたびは、ことの経緯をドキュメントとして綴る気にはなれなかった。そこで思いついたのが小説という表現方法だった。一定の架空の舞台を設定して、夢中で書いた。四百字詰め原稿用紙に換算すると二百枚近い分量となった。私のはじめて試みた小説。その一端を『栃木文芸』第十号に寄せた。

その一方で、人が死ぬとはどういうことなのかを知りたくて、歌で知られる詩「千の風になって」の制作経緯や世界の宗教、日本の民間信仰等についても勉強し、自分なりにまとめはじめた。もう職業研究者ではないことが、自由な文体で書くことを促した。母は九十五歳で亡くなった。人生百年とよく言われるが、それはどういう経緯によるのか、心身ともに健康であるために何が大切なのかも調べ、書いた。

思えば、母が亡くなったときは、私が仕事からも日常的な子育てからも解放されたときだった。予想外に介護からも解放されてしまった。その後、私は、結果的にものすごい勢いで書いた。現役の時よりも忙しいほどに机に向かって書いた。その成果のひとつが、七十代は輝かしき時代になる可能性が高いという確信とも言える思いである。あくまでも一般的にだが、仕事、子育て、介護から解放されて、自分中心に生きることが可能になる。実際、書道や文学などの芸術関係団体の役員には六十代や七十代の人が多い。

六十代は自分らしい生き方の準備期間とし、それを踏まえて自分自身を輝かせる「黄金の七十代」をつくっていきたい。

# 教え子たちの再スタート

## そして私の再スタート

こやま きお

「この春から小学校の教師になります」

四年生のときに受け持ったG君からの手紙に書いてあった。G君は三年生から四年生に進級したとき、いつも一人で、給食は保健室で食べていた。前担任との引継ぎでは、急に奇声をあげ、授業中も出歩いて、担任の注意には従わなかったとのことだった。私が担任となっても、しばらくは変わらなかった。

ある日、そんなG君を誘ってオタマジヤクシを取りに行つたとき、G君は秘密の場所があるというのだ。萌黄色の里山に囲まれた広い水田の隅に、オタマジヤクシは黒いかたまりになつてうようよいいた。バケツはたちまちオタマジヤクシでいっぱいになった。G君は泥で汚れた服など気にせず、車に乗るなり、オタマジヤクシの飼い方を目を輝かせながら話してくれた。この日をさかいに、給食は私の隣で食べるようになった。二学期は班の中で食べるようになり、友だちとのトランプもへり、会話もふえた。昼休みはドッチボールに無中になり汗をかきほどだった。

G君とザリガニ釣りに行つたときのことだった。「おれ、学校の先生になりたいな」と突然言いだした。

G君からの手紙を読みながら、オタマジヤクシやザリガニ

釣りに行つたころのG君を想い浮かべていた。

それからしばらくして、「三年生の担任になりました」という知らせを受け取った。その翌年、G君から連絡があり、柏で会うことになった。直接会うのは十五年ぶりで、私の記憶にあるG君は精悍な青年教師になっていた。住み込みで新聞配達をしながら大学を卒業したものの、なかなか本採用になれずにいたことや、多忙な職場の話などをしてくれた。今は子どもたちに、日記や作文を書かせていると言うのだ。私がかつて子どもたちに書かせたように取り組んでいると言うのだ。そして、同じ職場でお付き合いをしている同僚の女教師がいるので、会ってほしいと言うのだ。

顔を見てもすぐにわかつた。女教師Mさんは私の教え子だった。二人は職場が同じで「すうさん」と呼ばれ、「腰にはいつもタオルをひっかけていた」「作文をよく書かせられた」などの共通の話題がお付き合いをするきっかけになつたと言うのだ。

G君もMさんも受け持った時期や学区も違う。それでも人と人との出会い結ばれてゆく。こんな嬉しいことはない。いい授業をしたいとまっすぐ教師の道を歩んでいるG君が眩しく見えた。

翌年の春、二人の結婚式に招待された。

# すべてを水に流す?とは

高橋 淑乃

2023年(令和5年)の夏の7、8月は暑かった。命にかかわる暑さ、と言う言葉を連日聞いた。

しかし、九月八日(金)の朝起床して窓を開けると、空気が一変していた。台風13号の影響で小雨が降っており、肌寒いのである。ほっとすると同時に何か急に心細くなった。やっぱり暑い方が気が楽だ。

そう言えば、庭の梅や、夏椿や、もみじの葉が毎日少しずつ黄ばんだ葉を落す。地面を覆っていたキスゲも、あやめも、水仙の葉先も黄色くなって来た。こうして植物は冬を地中で休息し、立春の頃、再び根が目覚めて動き出す。この自然の輪廻の力強さにはいつも感服し畏敬の念でいっぱいになる。

私が毎年感動するのは庭の梅の木である。前年の秋の十月には、毎日はらはらと枯れ葉を落し、十一月立冬の頃には、一葉もまとわぬ丸裸となって厳冬の風雪に耐えていたのに、冬至を過ぎて、新年となり、陽光が少しずつ強くなって来ると、枯れたような細枝に、ほつほつと芽が吹き出して来る。その小さな梅の蕾はまだ色もなく堅いけれど、観察していると、日々、確実に少しずつ膨らんで来る。色も緑色となり、やがて先端が白梅なら白く、紅梅なら薄紅色に変る。開花は紅梅の方が早い。待ちに待った早春の到来である。ああ、又今年も花を咲かせるのだと、いとおしさに思わず梅の老木を

さするのである。樹齢百年以上の老木で木肌はさらさらであるが、季節に先駆けてスタートを切る。

梅ばかりではなく、地中では、チューリップや水仙も多く、草花が冬の眠りから目覚め始める。チューリップや水仙が庭先に元気な芽をぞつくりと出しているのを見つけると、私は急に元気をもらい、今年も再スタートを切る思いで、短歌誌「たかむら」の編集に精を出して来た。

東京電力福島第一原発処理水が8月24日海に放出された。「科学に基づく放出」と、岸田文雄首相ら政府や東電の人は口にするが、果してこの再スタートは大丈夫であろうか。(すべてを水に流す)と言う。海水にまざり、まざれたトリチウム汚染水は消滅するのだろうか。反対する漁業者らの心配が無に帰する事を祈っている。

又、俄には信じられないような、ビッグモーターズの不正経営事件や、ジャーニ喜多川氏の性加害の後始末に追われるジャーニズ事務所の再スタートに賭ける人々のエネルギーや心配は如何ばかりか。

加えて地球の温度上昇は、今や温暖化ならず沸騰化とさえ言われ、地球上のどこかで自然災害がある。犠牲者が立ち直り良い再スタートを切れる世の中であること祈って止まない。

# 鳥になる

## 珠井七海

キキーツ、鋭いブレーキ音をたててトラックは止まろうとした。しかし間に合わない。優花は、右足の上にトラックのタイヤの重さを感じた。その瞬間、車体に突き飛ばされ後ろへ体が跳ねた。地面に当たると、優花はとっさに体を丸めた。ころころとボールのように転がっていく。その様子を一部始終見ていた通行人の女性が悲鳴をあげた。

「大丈夫ですか」

男性が眉をひそめ、心配そうに駆け寄ってきた。

「大丈夫です」

優花は答えながら立ち上がろうとしたが、崩れ落ちるよう倒れた。右足と胸が痛い。

「救急車呼ぶからね。がんばるんだよ」

男性は携帯を取り出した。優花は歩道橋を渡らなかつたことを後悔した。バスが止まったので安心して渡ろうとしたら、トラックがバスを追い抜いて急に現れたのだった。

救急車で運ばれながら、優花は来週の弓道の試合のことを考えていた。ストレッチャーを握りしめると胸が痛んだ。足の骨折、胸部打撲、全治半年の大けがだった。しばらく弓を引けないな、優花はつぶやいた。手術の日、優花が窓の外を見ると、遠くの河川敷の菜の花が、黄色の絨毯のようだった。

梅雨の合間の晴れた日、車椅子の優花を無理に外へ連れ出

したのは幼馴染の健太だった。

「私はこんな姿で弓道場に行くのはいや」優花は抵抗したが「もう弓は引けるんだから。休日家にこもっているばかりじゃだめだよ」健太は無言を言わず車椅子を押してくる。弓道場に近づくにつれ、優花を出迎えるかのように紫陽花が、赤や青の大輪の花を咲かせていた。

入り口に來ると古い木とすえた汗の混ざった独特のいつもの匂いがした。よいしょと掛け声をかけて、何人かで車椅子を持ち上げて中に入れてくれた。車椅子のタイヤを固定し、健太に手渡された一番軽い弓を引き絞る。弦を離した時、胸が軽く痛んだが、矢は勢いよく的の中央に吸い込まれていく。小気味よい音をたてて矢は的に刺さった。

「きりきりと音たて放つ白き矢は的に向かいて鳥になるかな」

優花は高校時代につくった短歌を思い出した。

「しゃっ」

皆が掛け声をかけた。優花は二本目の矢を弓につがえながら、あふれる涙をこらえていた。健太はその様子を優しそうに見ていた。

「毎週、練習においでよ」

口々に皆は優花に声をかけた。

「これから足のリハビリも始まるんだから、時々、弓を弾いて上半身も鍛えるといいよ。そろそろ試合に出る準備もね。頼りにしているよ。部長」

健太はにっこり笑った

# 喜寿を過ぎて

## 初めて知ったこと

高杉 治憲

私は今年の二月に喜寿を迎えた。

その三方月ほど前にコロナに感染し、不本意ながら七日間を自宅の客間に隔離状態で過ごす羽目となった。これまでの人生で、病気や怪我で仕事を休むという経験がなかった私だが、初めて経験した自粛休養によって知り得たことがある。

これまでの人生で、三十一歳の時、社長として最悪の大倒産をした。しかし、これにより、目が覚めたように人生の奥の深さに触れ、会社のみならず人間として、家族を支える者としても再生再建に集中する機会を得た。以来、神仏を始め両親やご先祖、家族、友人、関わりのある全ての人々の支えに感謝し毎日を大切に生きることを学ばせて頂いたと思っている。また、その後の人生で、亡き義父から継承した会社の民事再生とその直後に勃発した東日本大震災罹災の危機を乗り越えたことで貴重な人間力や叡智の存在を知る基となったと感じている。しかし、二〇二〇年以來今でも続いているコロナ禍は、これまでの経験や体験をもっとしても計り知れない苦難の連続であり、政府が政策的に5類にして経済復興に舵を切ろうとも今後も底知れず続くことに違いないと考えている。私が経営する会社はコロナ前まで順調に再生していたが、この三年半の間に会社経営持続のために増え続けた借入

金がいっ返済できるか見通しもたたないまま時間が過ぎて行く。そんな中で、私がコロナ陽性になって初めて知った事の一つは、一日三回以上歯を磨くことだった。それまで、朝一回と寝る前の歯磨きは歯の汚れをきれいにする程度だった。だが、奥歯を失い部分入れ歯を使うことになり掛り付けの歯科医から「歯周病で傷んだ歯茎は適切な歯ブラシで正しい歯磨きを一日四回するだけで完治出来る」ことを教わり実行してみた。一カ月ほど励行すると、それまで嘔むたびに痛みを感じていた自前の奥歯から嘘のように痛みが消えて歯周病が回復に向かい始めたのである。二つ目は、肥満にならないように暫く昼食を抜いていたところ、体重が急に減り始め副作用なのか筋力が落ち睡眠が浅くなって頻尿のみならずその後に寝付けないまま朝を迎えることが増えてきた。そこで、主治医に相談しネットで情報を得て、良くなってきた歯でよく咀嚼して美味しく三食をとることを実践した。加えて、就寝前に筋力トレーニング(スクワット一〇〇回)と快眠ストレッチを始めることこれまでにないほど熟睡し体調がよくなってきた。半年が過ぎた今、この歳にして体力が戻り、快眠、快食、快便に加えて深呼吸による快息と、こうして元気に働ける喜びを持ち日常を楽しむ気持ちになつて快働を実感している。誰とでも、長い人生には避けられない苦難や大ピンチがやってくる。私の場合、この一年のコロナ感染や体調不良のピンチが自分の中に息づく治癒力に気づかせてくれたのかもしれない。生きていく限り、その歳になって初めて知ることに喜びと楽しみを見つけて新たなスタートとする事にした。

# 流れ

## 人見 靖子

その日の天気はまるで記憶がない。

又、その時が昼前だったか、昼過ぎでの事だったのか。

母はきびしい声で姉と私にいきなり言った。「あなたたち外へ行つていなさい」と。

玄関へと急かされ、私はおりこうにしているから、ここに居たい、と思つた。

行く所もなく庭の隅っこに佇み、家の中がしきりに気になりとても不安だった。庭の植込みの葉っぱをちぎり口へポンと入れた。「わっ」と叫び「ぺっぺっ」と吐く。苦い、苦い、まだ苦い。そうしているうちに母が来て「入つておいで」と呼びに来てくれた。家に入ると「おすわりなさい」……

父の臥る傍らに緊張をして正座した。母は今、父が死んだことを私達へ告げてくれた。目を閉じている父の顔をじつと見つめ「死んじゃつたの？」死ぬつて本当は分らないけど。

母も祖母も既に覚悟はできていたのか、泣いてはいなかった。だから私はほっとした。その日の兄は、東京の我が家に住む伯母の所へ行つていていなかった。兄はいつ帰つて来たのか葬儀にはいた。父の火葬のその日はみごとな快晴。

柩はいつの間にか大八車に乗せられていた。じつじつと、石ころだらけの村の道を山へとゆつくり進む。

父の柩の乗る大八車の後部の隅っこに、兄と私は並んで進

む方を背に足をぶらぶらと揺らしながら無言だった。道の右側には、幅一間ほどのきれいな流れがあり底の小石はきらきらと、さざ波の光にきらめいていた。その美しい流れは何処まで行くのだろうか。その流れは今も七十年前のままだ。

大八車はだんだん山へと近づいて行く、道筋に民家やお寺があり人がまばらに立っていた。やがて、裾野へと着くと、さほど遠くはなかったのに、お尻がすこく痛かった。兄と私は誰かに抱かれて大八車から草の上に降ろされた。山の斜面を大八車の通れる幅に切り開かれてあり、その斜面に柩を乗せた大八車を、村の小父さん達が、曳く人押す人とそれは大がかりだった。新緑のその山の切り開いた広場へとやつと柩は無事に着いた。見ると広場の中ほどに堆く丸太や角材やら細い木々等が井桁に積まれてあつた。父の柩は何人かの小父さん達にその積まれた木の傍らへと、そつと置かれた。そしていよいよ……父との永久の別れの時が。生まれたばかりの小さな小さな児を背に母は、はじめて嘔び泣いた。

夫の頬を両掌でしみじみと幾度も撫で、背の児にも別れをさせる様に、子の身体を父に触れる様に傾けながら、母はなお泣いた。私も泣いた。父は長い闘病から解かれて、いつものやさしい顔が、私はほっとした。誰かが私にささやいた。

「お父ちゃんの顔を忘れない様に良く見てお別れをしなさい」と。だから私は声にならない声で「お父ちゃん」と呼んでみた。柩に点火される時が来た。柩にはたつぷり油を注ぎ、火はためらいなく点火され炎は音と共に潔く真青な空へ美しく昇つていった。見上げる顔が熱かった。

# 小説家になりたい

石寄 敬子

小さい子供に「大きくなったら何になりたい」と聞いて、「プリンセス」なんて答えてくれると、大人は微笑ましく思い、たまに「公務員」と現実的な答えが返ってくると「もう少し大きい夢持とう」と言い添えなくなる。

中学生が「ユーチューバー」や「アイドル」と真面目に答えれば「もつとちゃんと考えなさい」「公務員なんかいいんじゃない」と、大人は勝手に夢の範囲を狭めてしまう。大学生ではどうだろう。就活中の子供達に「いつまでも夢みたくないこと言っているんじゃない」と世間は夢を見ることさえ許さない。ではいくつまで夢を追いかけていいのだろう。

不言実行と有言実行、私は間違いない後者である。人前で宣言して逃げ場を作らない。もし失敗したらそのときは笑ってもらえばいい。退屈している人にネタを提供してあげる。それでいいのだ。

八月の末、栃木県芸術祭の創作部門で文芸賞をいただいた。嬉しかったのはほんの数日だった。仕事の関係で最近知り合った方がいる。その方とのラインの中で、ある言葉に私は固まってしまった。このときの私の顔を相手に見られないで本当によかったと思う。

「私の妹が今年の春に小説家デビューしたんですよ」  
それと一緒に書店に平積みしてある写真が送られてきた。

ああこの本見たことがある。というか手に取った覚えもある。

「えーすごいですね。羨ましいです」とりあえず返信する。

「石寄さんも小説書いているんですか。なんていう本ですか」

「……短編で五十枚書く、その程度のアマチュアです」

私は心のどこかで小説家になったつもりでいたのだろうか。文芸家協会に所属できて満足してしまっただろうか。全然大したことないのに、えらくなつちやっただね私。

歩くのが心許ない老犬と散歩に出る。途中でスクーターとすれ違った。犬が止まったので、私も歩を休め周りを見る。すると先ほどのスクーターを停めてこちらを見ている者がいる。ヘルメットを脱いで「先生」と声をかけてきた。元塾生の青年だった。会うのは三年半ぶりだ。彼はスクーターを押しして私の側までやって来た。

「おお久しぶり、今どこ行ってるの」

「俺、受験失敗しちゃってさ、今下関の大学」

「いいじゃない、遠くに行くの賛成。入った学校が一番だよ。頑張れ」

「うん、先生も頑張ってる」

彼の頑張れが胸に染みる。犬が綱を引っ張りだしたので「じゃあね」と言って私は歩き出した。

「先生に会えてよかったです」

彼の声が私に届く。会えてよかったのは私の方だ。次に会うときは「先生は小説家になりました」と言えるよう、書き続けるしかない。

# やつと云えた

## 関根喜久枝

二年間交際した後、結婚し夫の勤務先の大阪の社宅に住んだ。大阪は馴染みのない土地で関西弁でやんわり話すのに比べ、東京生まれの私の話し方はきつく感じられてなかなか友人も出来なかった。昼間ボツンと一人で過ごしていたが、夫は夕方早く帰宅し夕食を共に楽しんだ。食事をしながら「早く子供が欲しいな」

とよく呟いていた。暫くして生理が遅れているので産婦人科を来院した。医師から、

「妊娠してます」

と告げられた。夫に話すと、

「やったあ」

と大喜びだった。二週間ほどしたある日初夏にしては暑く体調が悪いので横に伏せていた。そのうち眠ってしまったが猛烈な下腹部の痛みで目がさめた。産婦人科の医師からは「流産しそうです。薬を処方しますので安静にして下さい」

と説明され薬を服用したが結局流産した。それからふたたび半年後に妊娠した。一カ月程した時お天気がいいので蒲団を干した。ところが止め方が悪かったのか下に落ちてしまった。社宅の三階に住んでいて、ベランダから覗くと中庭に蒲団が広がったままになっていた。そのままにしてたら社宅の住人に何と言われるか気になり部屋まで抱えて持っていった

その翌日、出血し又流産した。三回目に妊娠した時、夫から「会社の人に大阪で有名な産婦人科の病院を紹介してもらったからそこへ通院してみたら」

と勧められ、四十分ほどかかる病院に行った。

看護師さんから

「今度こそ流産しないように気を付けて下さい。まず日常生活ですが、足を骨折してると思っつてゆっくり動き家事の合間に必ず休む様に」

と注意をうけた。母が心配して電話をくれた。

「具合はどうなの」

「胃がむかむかして気持ち悪いの。つわりかもしれない」

「あ、そう。つわりがある位なら今度は大いじょうぶよ」

と安心した様な声だった。出産予定日は十二月三十日と知らされた。夫が心配してくれて

「実家に帰って出産した方がいいよ」

と言ったので妊娠八カ月で実家に帰った。十二月になり町にはクリスマスツリーが飾られ、人々は年末年始の準備で慌しかった。その中を健診に通いながら、母にも夫にも心配かけてしまったので、今度こそ何としても無事出産しなければと切羽つまった気持だった。予定日より一週間過ぎて陣痛微弱で二日間苦しみながらやつと産声が聞けた。かわいい男子だった。スタートでつまずいたが何とかゴールまでたどり着けた。

# 物を書く

福澤 悦子

○「もうこれまで」を「さあこれから」に切り換ふると歳旦の足袋きりりと履けり

○職退きて甦りたる感覚の把へし風のごま川のごまやき

○日を一日青葉しいたげ吹く風を聞きつつ職なき無為をたのしむ

筆者にとつての「再スタート」は、何と言つても定年退職の時と言えよう。在職中の日々もそれなりに充実していたが仕事を持たない身の解放感ほまさに大空に翼を拡げてどこへでも飛んでいけるぞと思えるほどの自由で欲びに満ち溢れたものであった。「さあこれから」と決意を新たにし、随筆（雑文？）集、続いて歌集と立て続けに出版し、フランス語に熱中して仏語検定試験を受けたりした。国内海外の旅行にもよく出かけ、夫と二人J・R・東日本の企画した「駅からハイキング」にも一時は毎週くらいに参加したのであった。

卯年生まれの筆者も七回目の卯年を迎え、現在八四歳、米寿の夫との二人だけの日々を大切にしようと思つている。

夫は車の運転の腕は確かで自分の用は勿論のこと、買い物や筆者の足（アッシーくん）の役割も引き受けてくれる。

しかし、近ごろは足腰が弱り、行動範囲も狭くなり、居間の炬燵兼食卓でもあるテーブルで読書をするのが多くなつ

た。筆者も近くの図書館で肩の凝らない時代物の単行本を借りて来て二人で回し読みをしたりしている。

読書と言へば、筆者は若い頃シヨールペンハウアーというドイツの哲学者の読書に関する言葉をノートに書き写したことがあった。ノートは紛失してしまい、どんな本を読んだのかも覚えていないので、極めて不確かな記憶ではあるが、

「読書とは、自分では何も考えずに他人に考えてもらふことである。足の弱い者が頼る杖のようなものである。」

というものだったと思う。読書好きな人間にとつては、かなり手痛い指摘ではあるが当を得た発言だと、読んだ時も納得し、現在もその通りだと思ふ。何もする事がないので漫然と本を読む。しかし、それでも良いのではないかと思ふ。

確かに本を読むという行為は、貴方任せの受動的なものではあり、物を書くことと比べると、かなり楽なものである。

しかし、読んだ本に感銘を受け、その内容に触発され、読者も読者なりの理論を構築し、文章化するという所まで行けば、読書もまた主体的能動的な立派な創作活動と言えるのではないだろうか。

勿論、筆者と夫との読書は気楽な暇つぶしの域を出るものではないが、筆者は心ひそかに、読者転じて物書きとなるべく、読書を通して物を書く修練を積んで行きたいと思つている。今回の特集のテーマのように、いつの日か自由自在に「物を書く」ことのできる人間としてのスタートが切れるようにと心に念じている。

# 図書館からの

## 新たなスタート

藤田 香月

子供の頃から夏の暑さに弱い私は、この夏の猛暑から逃れるためと、同人誌への原稿三種を書く目的で午後二、三時間を黒羽図書館で過ごすことにした。

那珂川に架かる黒羽橋を東に向って渡り、上り坂を行くと小高い山の上に文化複合センターがある。なんともユニークな、カラメルソース色の巨大なブリンを思わせる、現大田原市ピアートホール（七二一席）の右側に併設して、先の方はどう見ても傾いた設計の黄土色の建物があり、手前に保健センター、その奥が図書館となっている。

図書館に入る前に、私はよく空を見上げる。この夏の空はことに印象に残る日が多かった。木々の緑の上にスノーマンやゴジラを思わせる入道雲が、もくもくと高く沸き上がり、一段と冴えた青空がバックにある。手前にはブリンの形の左側から、やはり黄土色の建物とその壁とが斜めにずっと伸び出している。青、白、緑、黄土、赤茶の色と形とは、自然と人工とがマッチして「これ程の作品はあるまい！」と思うような画面となって目に映るのだった。

二十年程前に、大田原図書館には無かった本の中で、プリ

ヤンバダ・デーヴィー&岡倉覚三の書簡、大岡信編訳による『寶石の声なる人に』と黒羽図書館で出会えたことは殊の外嬉しい思い出となっている。図書館の無い中央公民館時代に担任された識者の方々のお蔭と今もなお感謝している。

また、館内には俳人の黒田杏子氏（本年三月に八十四歳で逝去）の寄贈による「黒田杏子文庫」があり、俳句を始め様々なジャンルの貴重な本が多く有り心惹かれる。同様に最近改めて関心の向いた「郷土資料コーナー」には、黒羽町はもとより県内市町の関連本が並び知人たちの名も見られる。

図書館に親しみを覚えるのは、以前、娘が図書館に勤務していたことと共に、祖父が新潟県三条の図書館に務めていた所為なのかも知れない。祖父が亡くなった折には現地の新聞でその功績が紹介され、その中で「図書館から青年に光を」という祖父の心境を表わした言葉が今でも私の心に残っている。

この夏、図書館に通うようになり、私の疲れきった重い心身はいつしか軽やかになってきたように感じられる。

ここ黒羽で生まれ育った私は、春には後期高齢者となっていた。今は亡き、大きな愛を持って接してくださった方々の想い出と感謝とを心の軸としてこれからの人生のスタートとしたい。大好きな黒羽図書館に通い、近くの運動公園では草花を愛でながら足腰を保つべく、恵まれた自然の中を散策しよう。我がホームグラウンドは緑多く、清流那珂川の流れる歴史ある美しい城下町、黒羽。今でも「藤田さん」と声をかけてくれる人が多いことは何よりも嬉しい。

# 超人と言われているらしい

## 館野ひろ子

四十年前の私は、死と対峙した過酷な抗がん剤の副作用と闘っていた。当時は、その副作用で肺炎となり亡くなる人が多かった。病巣を叩く強い薬を体内に入れるのだから、悪くない箇所にも当然影響する。嘔吐との戦いでもあった。

体は容赦なく蝕まれ骸骨のようになった。常に面会謝絶だった。抗がん治療は六ヶ月が目安になっていたようだが、私は一年近くかかった。

その間、何度ももはやこれまで、と医師を慌てさせた時があった。夫や子供たちの心労はいかほどであったろうか。

退院を許された私は、歩行がままならないため、夫に背負われて帰宅した。玄関で夫は、

「お母さんのお帰りだよー」と、怒鳴った。  
「軽そうになっちゃたね。どれどれ」

当時、中学三年だった長男が、面白半分私の方に背を向けて、しゃがみ込んだ。夫とよく似た息子の背中に、気恥ずかしい戸惑いを感じながら、私はそっと息子の背にもたれかかった。背中から肩越しに私が顔を覗くと、長男は、ニヤツと笑った。そして勢い良く立ち上がるなり、

「軽い、軽い」を連発しながら部屋中を小走りに回った。  
学校の行き帰りに、欠かさず私の入院している病室を見上げていた小学生の末息子も、大騒ぎでついて回っていた。

台所で椅子にもたれて、私は子供達の夕飯作りの監督を決めこんだ。腕まくりをし、大きな体を屈めた長男が、「サーチャツチャ、サーチャツチャ」と小気味よいリズムで米をとぎはじめた。どこかで聞いた懐かしい米とぎのこのリズム。今は亡き母の米とぎのリズムに他ならない。

東京でアルバイトをしながら勉強中の娘も台所で、亡き母仕込みの肉じゃがを作って、待っていてくれた。

五年が大過なく過ぎ、体も順調に回復し始めたころだった。「産休補助教員に出てもらえないだろうか」そして更に、「保護司、引き受けてもらえないだろうか」「人権擁護委員をぜひ引き受けてください」という知らせが前後して入った。

天職と決めていた教職を、心残りを引きずって早期退職していた私だった。父母の介護のためであった。

再び教職の場に戻れるという喜びと共に、未経験の社会奉仕できる新境地へも踏み込んでみよう、このとき決めたのだった。人生再スタートの幕が上がった時であった。

充実した日々を経て、十五年前、脾臓に発生した悪性リンパ腫、それは脊髄にも胃の残部にも再発している。三度の抗がん治療と、その上脳出血で二度も治療。今も失語症なのか人前で話ができない。字を書くのにも難儀している。でも生かしてもらって、今では医学の進歩の波に乗って、再発、再三、再四のスタートができている幸せ者だ。  
人は私を超人か？と言っているらしい。

# 引つ越し先で根を張って

島田トミ子

私たち夫婦が事情を知った時には、その八重桜は一週間以内には切られる運命にあり、いわば「死に体」の状況だった。二月の半ばのことである。

私の知人の真由さんが、公共事業の区画整備で移転して、二度目のマイホームを建てた。それまでよりも陽あたりがよくなったと喜んでいた。

彼女は屋敷に桜の木を植え、花が咲くようになったら上質のお茶を飲みながら花見をするのが夢だと言っていた。早速幹の太さが三、四センチの若い苗木を買ってきて植えた。

ところが隣り近所の婦人たちが「桜を植えるなんて虫が付くのねえ、それに落ち葉もあるし近所迷惑よ、気が知れないわ」と言っているのを耳にした。そのあと、しばらく落ち込んでいたが、「そんなことを言われるなら」と、怒りの意地も大きくなり、潔くバツサリ切ることにしたと言う。

私は、桜の木のことよりも、「そんなバカな、近所つき合っても難しいのね」と婦人たちの井戸端会議の中味に関心がいった。八重桜の運命も二年足らずで終わりとは可哀そうと思つたが、彼女への慰め？励まし？どちらにもぴったりの言葉が見つからなかった。

夕食の際、夫にその事情を話すと、夫は黙って聴いていた。翌朝、起きるなり夫が言った。

「俺、その桜の木掘って持って来るかな」

「えっ、何で？ どうやって？ お父さんに出来るわけないよ」

なにしろ足の悪い私と、腰痛持ちの夫ではどうすることもできない。

「うん、もちろん俺ひとりじゃできないから誰かを頼んで掘り起こしてもらって、軽トラで運んでくるのさ」

「持って来てどうするの？」

「ほら、その山ざくらのある庚申塚の空いている所に植えるんだよ。あれは白っぽい花だしちょうどいいよ」

夫は決めたらしく「善は急げ」とばかりに近所の孝さんに頼んだ。私は真由さんに訳を話して山ざくらの引つ越しの日にちを決めた。伐採予定の一日前に山ざくらはわが家の近くに運ばれてきた。細い幹が風におおられて倒れないように三方向からの支柱にしっかりと支えられ、新しい土地に立った。

「ほら、今度はここで根を張れよ」

「早く大きくなって、八重の花を咲かせてちょうだい」

まるで里親になったかのような心情で移転してきた桜の木を三人は愛おしいまなざしで見つめた。

移転してきた次の春には、赤紫色の葉が出て、濃いピンクの花が八輪ほど開いた。再び植えられたこの地で安心して育ち、今では幹も二倍になった。八重の花も年々開く個数が増えている。

# 新しい世界へ

紙屋 里子

長く勤めて来た。色々な事が思い出される。楽しかった事や嬉しかったことも数多くあるがそうでないこともある。

つらかった事の1つが最後の勤務校だった。1つというより初めてで最後の出来事だった。

前の学校で一緒だった教頭が、1年後私が勤務している学校に来たことから始まった。私には特別にその教頭に対する反感はなかった。私より3歳年下だった。前の学校に来た時初めて教頭になった人だ。残念な事に彼は、パソコンが上手く使えず、事務能力は極端に低かった。いままで出会ってき教頭が十の仕事をする間に五の事は出来なかったが、みんな優しいので、初めてなったのだからと大目に見ていた。ところが二年目も同じことだった。

私が一年早く来ているので格好の当たりということだろう。何につけ嫌がらせをしてきた。校長に私の悪口を吹き込んだ。始め校長は信じられなかった。

スーパー見学に行く時などは必ず1人補助を付ける。どんな時でも校外学習はそうだが。1週間前に計画書を管理職に提出した。ところが当日。

「お前計画書出したんか」とお前呼ばわりで睨みつけた。

「今日はいっぱいいっぱいなんや、補助は付けられん」という。教務主任に頼んだが横から出てきて嫌がらせをした。

仕方なく2クラス担任2人で連れて行った。事故が無くて良かった。後で養護教諭が教えてくれたが教頭が校長に、「〇〇は学年でよう行かん先生ですわ」と言っていたと。補助は付けんでもいい」と校長が言ったと。校長は中学校から来た教師だ。よくわからないのだろう。

補助教材を人数足りないのを知っているながら、クラスの子供に持つていかせたりもした。また、1年に1人1回は研究会に行くことになっているので、前もって計画書を出しても私だけ行かせて貰えなかった。

クラスの子供のお母さんが、とても複雑な心の持ち主だった。「教頭先生に話を聞いてほしい」と言ってくるのと、

「〇〇先生、わしあの母親苦手なんや。頼むわ」と逃げる。数限りなく嫌がらせがあった。2年間付き合ってたが、もうこれでは身が持たない。まず子供に何か有ってからは遅い、辞めようと思った。校長が女だというのが気に入らなかったのだろう。前の学校の校長も女で私と親戚だったが、知らないようだった。隣の教育長も親戚だが言わなかった。私はそれまで、絵を描いていたが、色が出せず、絵筆が持てなくなっていた。それから、ぼちぼち文章と絵手紙を描き始めた。つらいが再スタートをしたと思っている。

2年後私の住んでいる校区に教頭で来た。念願の校長にはなれなかったようだ。スーパーで出会うと、

「組合が強かってん」と言っって何度もウインクした。

もう18年も前の事だ。あの時2年で14キロ痩せた。辞めて再スタートをして良かったと思っっている。

# 再スタートとは、

## あり得ないこと

安西 悠子

「再スタート」という文字は、私には、不要である。  
時間的に無理だからだ。

時の政府「軍部」の指導の下、疑問も抱かず、従順に、それに従って懸命に生きてきた。長い時間が経過した現在、もう物理的に「再スタート」は無理だ。

真剣にくらした戦争の最中、登校しても、教壇には、教授の姿は無く、カーキ色の軍服を着た将校が、チョークを握って、私達、女学生に講義する。内容は「航空機に搭載する万能真空管、ソラ、の組立」についてである。本来ならば、心理学の講義のノートに、真空管についての文語で埋まる。教授不在の教室で、軍人が講義する。

教室で組立てた真空管は、当番の者によって、本社へ運ばれる。

八月十五日の敗戦の日まで、少しの疑いもなく、兵器の一部を作ってきた。

その若き日は、過去のもので、時間は瞬時に過ぎ去り、老人となった身には、「再スタート」は出来ない。時間の経過は速くて、気付いた時は、老人となっていた。

若く、時間的に「再スタート」が可能であるとしても、体力は、後もどりできない。若き日、女学生時代には、毎年、

物部村の桜町陣屋まで徒歩で往復した。二宮神社に参拝し、翌日は、全員、授業に出席した。現在の状態では、この強行軍はできない。だから、私にとって、「再スタート」は、不可能である。現在の私には、時間の経過した今、「再スタート」は出来ない。

例えば、「再スタート」しても、それまでの生活の軌跡は、消えはしない。そして、「再スタート」以前の時間は、どうなるのか？。国家（軍人の）の指導によって戦争に従事した従順なあの時間はどうなるのか。悲劇である。

伯父は、ニューギニアに出兵させられた。役場からの召集令状と共に、「出征の日の見送りは、家族だけで密かにいたすこと、携帯の日本刀は、風呂敷に包み、目立たせないこと」との注意書きがあった。よって、小さな駅から、平服で密かに戦場に赴いた。

ビルマに派遣された叔父は、軍事郵便で、慰問袋の中の私の墨絵が気に入って、兵舎の壁に貼って日本を偲んでいる、と、したためている。

しかし、二人の白木の箱には、一片の骨すら入っていない無残さであった。

この人達の「再スタート」はどうなるのか。

「再スタート」という事実は存在しない。

「新しいスタート」と言うべきである。

# 働くことを止めて

名村 忠

働かないで、毎日家にいると、様々なことを考える。

74歳で教壇に立つことを止めてしまった。もっともっと働きたかった。うまく繋がって働けたのが、今思うと、奇跡的だったのかも知れない。毎日毎日、数え切れない程夢を見た。恐い夢、威張っている夢もあったように思う。どういうわけか作新の職場で、私は家を出るのだが、学校に行き着かないのだ。あるいは、教科書と辞書を持って講師室を出るのだが教室に到らないのだ。そのうち、山や河が現われて行く手を遮るのだ。困った、困ったと思っているうちに時限終了のチャイムが鳴ってしまうのだった。そのうち苦しくなると目覚めてしまいが、夢であつてよかつたと何度思ったことだろうか。どういう心理が働いていたのだろうか？

ただ、生徒の言い分を聞く立場ではないことだけは知っていた。黙って教壇に立っていければいい、生徒は勝手に自習することだけとは思っていなかった。ティーチングマシンのように教え続けることが身を守るだけと思っていた。あまり乱れば大声で叱ればいいと思っていた。これは国大の教員の正反対の行為であつたかもしれない。しかし思わせ振りのえらぶった大学の教官は教育者を投げっていたと確信していた。あれではいけない、とだけ、あれは給料泥棒とだけ思っていた。何が何んでも教える、これが義務だと感じていた。

最初の大学では学園紛争の最中、ほとんど教えてもらえなかったのが影響しているのだろうか？ 近づく、「おまえは何者だ、俺を誰だと思っている」こういう学生を見下した態度はどこから来ていたのだろうか。一高、東大卒の人格に触れ、私は黙った。時間は限られているのに……。人の心を覗くだけの精神分析の手法を使っているのだ。自己保身の精神分析は明白だ。

私は受けてばかりでなく、確信を持って前へ出ることを柔道から学んだ。制限時間内に勝負を同一条件の下、決するスタイルに魅了された。ヘッセは精神分析の下、自分をはっきり認識し、前へ出て行った作家ではあつた、が、自己を知り、真に生きる一方法としての精神分析の手法で実験に供されたのではないか、喰い物にされたのではないかと恨みはあつても、もう今更、悔いも恥もない。ネバーギブアップネバーデスピアの精神に恋慕渴仰も怨妬も先祖の因縁因果もない。ただ築き上げたものの上に立ち、しっかりと健康を維持し、妻と一年でも長く生き延びることだけを考えている。自己流でも。ただ誇りだけを感じ、しっかりと自分のものを保持し、一日一日大切に生きることだと思ふ。先祖様はよもや餓鬼道に落ちていとは思わないが、六十で他界した恩師には払い切れない蠅やごみが押し寄せていた。生きていれば素晴らしい世界にめぐり会えるのだから。一寸先は神のみぞ知る。アーメン。偏差値教育、出身高別学歴社会そんなものを追いかけて五十年勤めたのかもしれない。先の大戦で焦土と化した日本から真の意味で再スタートする機会が今来たのだ、と思ふ。

# 『Dolphin』が始まりだった

寺崎 暁生

私が同人雑誌の『Dolphin』同人になったのは、昭和五十二年十二月十日発行の第二号から、二十七歳の時だった。『Dolphin』は、八月十日に第一号が発行され、昭和五十九年十月一日の第九号まで七年間続いた。鹿沼市職員を中心に個性豊かな面々が執筆していた。

創刊メンバーは、枝良和、鈴木正一、小林守、渡辺耕史、杉山進、杉千夏、湯沢朗、神山義朗、竹てる子、乾義雄の十名。二号に私に加わり、三号に石川道也、金子正一が加わり、四号に紙友として大杉悦子、六号に鈴木正雄が、七号に青木佳都子、九号に開墅真成が加わった。

第二号には私の作品が初めて活字になった。『吉本隆明小論―エリアンの手記と詩―をめぐる』という評論で、今から思えば顔から火が出るような稚拙なものだったが、合評会では皆真剣に批評してくれた。合評会の後は飲み会で本音の議論を戦わせた。合評会で心に残っている言葉を思い出す。

「内的時間と物理的時間は違う」、「共感するのは主人公が魅力的なこと」、「限定されてしまうから具体的な地名は出さないほうが良い」、「書き出すまでが大切、何故それを書くか」、「最後の一行が難しい」、「テーマは伏せたほうが良い」、「どんな不思議なことが起きてても良い」、「普遍的低位性の人間に匹敵する重さを担っているか」

私は『Dolphin』での七年間、書くことの楽しさや喜び、その一方で苦しさを知ることになった。その後は一人で書くしかなくなり、仕事に追われて書くことから次第に遠ざかっていった。でも、仕事が一段落してみるとやはり書きたい思いが募り、県や鹿沼市の文芸賞に応募し、落選したり入選したりを繰り返した。

最近では、私は現代小説が書きたいのか、歴史小説が書きたいのか、自分でも迷っている。

ネコを題材に何作か書いたが、どうも行き詰まっている。それでは歴史小説が得意かといえそうとも言いきれない。第一歴史小説はいろいろな資料や文献を調べなければ書けない。あまり荒唐無稽にはいかない気がする。旧暦など色々な制約がある。歴史を変えてしまう訳にもいかない。

つまり取り組むには相当な準備をしなければならぬ。だが、私はその世界に足を踏み入れてしまった。もう後戻りはできない。これからは、何を書きたいのかじっくり考えて書き始めることが課題だ。

令和四年、県文芸家協会に入会し、同じ年に同人雑誌の「HORN」に第二号から参加させてもらっている。

改めて書くことの楽しさや喜び、その一方で苦しみを知ることになった。でも、同じ道を歩む先輩や仲間たちとの出会いが新たなスタートを後押ししてくれた。

『Dolphin』が始まりだった。その七年間がいかに大切だったか、改めて噛みしめている。

# 街道

## 神山 曉美

干支を一巡し生まれた年に戻る還曆。第二の人生を歩き始めて数年経つが、思い出がひとつある。この年、中学の同窓会を開こうという案がもちあがった「修学旅行をもう一度」というサブタイトルがついて、行く先は日光。案内を含めた幹事役を、車で三〇分という場所に住む私にと振ってきた。

昭和四〇年頃、当時の「いろは坂」は、上り下りおなじ斜面の対面交通。峠道の入り口に地元の専門ドライバーが待機し、他県からの観光バスは運転を交代したほどである。数ある曲がり角を知り尽くしたハンドルさばきであったろうが、ひどく怖い思いをしたのを憶えている。「華嚴の滝」を見ただけで、再び恐怖のいろは坂を下り、日光市内の旅館泊。翌日「東照宮」を参拝して、すぐ帰路についたのを思い出す。栃木県民になってからの私は、四季おりおりの日光へ幾度となく足を運んでいる。同窓生たちに観てほしいところはたくさんあったが、一泊二日の旅ではとても紹介しきれそうにない。悪戦苦闘、頭をひねりながら旅の行程を組んだのだ。集合はJR日光駅。そこから東照宮までは遺産巡りのバスが出ている。翌日はマイクロバスをチャーターしての奥日光観光。現在のいろは坂は上下線が別々に分かれた一方通行で、怖くはない。途中、ロープウェイでゆく明智平では、中禪寺湖からこぼれ落ちる華嚴の滝が眺められる。龍頭の滝を見て

戦場ヶ原を通り抜け、湯滝を経て湯の湖畔で昼食。白樺の林の中に源泉が湧き出る温泉寺辺りは、かすかにイオウの匂いが漂って、食後の散策にはおあつらえの空間である。旅の終わりには、やはり華嚴の滝。エレベーターで滝つぼまで降り、眼前の水飛沫をたっぷり浴びていただいて帰路に……。

いろは坂と華嚴の滝と東照宮が「日光」と思っていた情報の乏しい時代、はるか岐阜からやって来てそこしか観なかったのだから仕方がない。二度目の修学旅行で仲間たちは、氾濫する情報通りの日光を堪能してくれたようである。中でも、延々と続く鬱蒼とした杉の並木道には驚いた、と、届いたお礼状のどれにも記してあった。これには私の方がもっと驚いた。旅の予定に杉並木は入れてなかった。解散地JR宇都宮駅までの行程として通っただけにすぎない。日常生活で毎日のように利用しているうちに、私の中では観光スポットとしての「日光杉並木街道」が完全に除外されていたのだ。

この道を詩に書いたことがある。杉木立の隙間から、雨のように降ってくる陽光を受けながら歩いていると、妙に心が落ち着くのである。同窓生たちが、修学旅行という想い出の時間から、第二の人生への通過点として、深く心に刻んだ日光杉並木街道。私の中にも意味のある道として存在していることに改めて気づかされた。

日光へ向かう杉の並木道は他にもある。鹿沼市から入る例幣使街道、福島方面からの会津西街道、いずれも東照宮手前で日光街道と合流する。延べ三七km、世界一の並木道である。

## 再々スタート

佐藤 孝子

四十年余り所属した短歌結社を退会したのは十年前、古希を迎える直前のことであった。

四十年間師事した師の逝去がきっかけとなったことに間違いないが、入会して間もなく、ここには自分の居場所がないこと、のびのび呼吸が出来ないことに気づいた。だが、まだまだ師弟関係の濃密さが残っている当時の結社内、退会は赦されないことであつたし、この結社に誘つてくれた先輩歌人に対しても期待を裏切ることになると思えば、そのまま在籍せざるを得なかつた。

まだ二十代だつた私に対しての結社内での扱いはあくまでも懇切丁寧であり、大切に育てられたと今にして思うが、アララギ系の直結で、斎藤茂吉の流れをくむ著名な歌人でありアララギの写実を唯一の指標にする師に少なからぬ違和感があつたのは事実である。

定型の縛り、アララギという写実主義、師弟関係などに疲れたのは入会後十年ほどの頃であつた。

定型をはみ出すもの、定型に収まることを拒否する感情のうねりを抱えながら、それでも一度結んだ師弟の関係を崩すことに消極的であつた。

そこそこに結社のなかで生きること長け、歌友も増え信頼し、されもし、どっぷりと結社のぬるま湯に浸かつた年月

を突き崩すこともなく四十年が過ぎた。

師の逝去、その後の後継問題に巻き込まれるのを避け、私は結社を去る決意をした。そこには、年齢的にもぎりぎりという意識が働いた。

結社の縛りを離れ、あるいは短歌の定型も忘れて心の赴くままの歌を詠みたい。自由律短歌にあこがれ、口語短歌を試作し、私は有頂天であつた。こんなに思い切つたことが詠えることに歌心は沸点に至つた。満足だつた。

これこそが、長年憧れ続けた再スタートだと思つた。あこがれの無所属の（無）にこれからの私の短歌が拓かれると心が震えた。

ある日、偶然に訪ねた独居の高齢女性の家の煤けた柱に貼つてある古びた短冊を目にした。そこには稚拙な筆文字で短歌が記されていた。聞けば自作の短歌であるという。

この身体も不自由、言語も不自由な老女が短歌という表現手段を持つている、この自由世界に衝撃を受けた。不自由な暮らして自由な短歌のその豊かな共存に敗北感が湧きあがつた。

定型を無視したところの自由と、定型ぎりぎりの中で求める自由とを思うとき、定型外は、長い年月を何にも誰にも属さないことを願ひ続けた私の新天地であつたはずだつた。

再び、不自由を選んでみよう。定型の縛りの中で安住よりも挑戦を自らに課してみよう。私の再スタートならぬ再々スタートである。

# 雄叫び

国母 仁

何か寂しそうだ。覇気がない。

左肩の痛みが出てきているとか。今朝はM病院に行くことになっている。左肩断裂症の術後の傷口を保護するのに器具を付けるので購入の予約に行くという。手術は一週間後にせまってきている。入院は三、四日間とか。

昨年、私も脊柱管狭窄症の術後、腰を固定するベルトを作った。一か月ぐらいは装具していたが、その後は止めてしまった。装具していると自由に動けないから。今は引き出しの中で安静にしている。また必要な時がくるかもしれないから。

昨年は二人で入れ替わりに入院をする。私が脊柱管狭窄症で約半月間個室に閉じ込められる。六月の半ばに退院したが、毎日、三十四・五度の猛暑日が続き暑さとのせめぎ合いと戦わなければならなかった。一人でシャワーを浴びることができないのでタオルで汗を拭っていた。

妻は鼻の左側にある黒子がだんだん大きくなってきたので、皮膚科に行ったら即座にガンを宣告され、D大学病院を紹介され手術をすすめられる。

私が退院して二日後に妻は入院した。私はまだ杖を突いてヨチヨチ歩ける程度だった。妻が入院したので身の回りのことは自分でやらなければならなくなった。

左肩腱板断裂とかなり頑強な病名だ。どうして断裂したか

は不明だがひとつ考えられるのは、五十年間重い皿を持ち運びした結果ではと結論を出す。仕事とはいえ私にも責任があるのではないかと自分を責めたりした。休みもとらずに商売を続けてきたから。右肩も痛むという。右肩も断裂している可能性も十分考えられる。左肩が順調に回復すれば右肩も手術を視野に入れていくとか。商売の他に弓道を五十年間続けてきたことも一因ではないかと考えられる。ピンと張った弦を力いっぱい引いていたから。

「退院して二週間たったら山陰地方に旅行に行くからね」と突然雄叫びを揚げる。なかなか取れない切符を漸く取れたのだからと後に引かない。担当医に相談したらオッケイが出たという。

「今行かないと、もう行けなくなってしまふから」

「でも、旅行に行くということは重い鞆を持つたりするから肩に負担がかかると思うよ」

「大丈夫だよ、この年になると先がないんだから」

確かに古希を過ぎると身体が動けなくなり、旅行に行けなくなるのは目に見えている。私も古希になったら日本一周をする計画を立てていたが狭窄症になってしまった。術後、右足を引きずるようになり一周は頓挫したままだ。

「どうせ、お金なんて残したって税金で持っていかれちゃうんだから使うなら今のうちだよ」

# 俳句と書の二刀流

渡邊 公之

「第十七回角川全国俳句大賞」に昨年十二月に応募した私の句「ふるさとの蒔菘草の紅甘し」が、題詠「草」の部で西村和子先生選「特選」を受賞し、六月に賞状が届いた。

俳句を始めて十年ほど、四季のある日本、自然に囲まれた栃木県に生まれ育って齢を重ね、俳句会や俳句結社で出会えた先生や先輩、句友たちに恵まれて続けられている。

今後、さらに佳句が詠めるよう、感性を磨きたい。

書との出会いは小学校高学年、習字の授業で初めて筆を持った。義兄から県内の書道団体「卧龍会」への入会を勧められ、時々昇級して嬉しかったが、三級止まりだった。

義兄は、書家の豊道春海のふるさと、大田原市（旧佐久山町）に生まれ、小学校教員の傍ら書道に勤しんでいた。豊道春海等は、戦後GHQが学校の授業から書道を除外しようとしたのに抗して運動し、習字の授業が残った。

中学生になると、習字の授業が週に一回。テキストの課題を半紙で提出、最初は「希望」。私は手本どおり楷書で。ところが、Kさんはすごい字体での清書（中国の唐時代の書家・顔真卿の字体なのだ）と後になって分かった）。私は三年間、那須北地区展覧会等で時々賞を、三年生の時には蒲生君平顕彰書道展で入選。Kさんはいつも上位入賞だった。

高校入学以降、書から遠ざかって五十五歳になっていた。

時間に余裕が。書道の師範の方に出会い、四十年ぶりに筆を持ち、初めて大きな条幅紙へ、二年ほど励んだ。

退職してから五年後、県シルバード大学校に入学。授業を終えてから、クラブが三十余。書道クラブに入学、二年間。

卒業後、書道クラブOB会で継続。そこでの先生の指導が良かった。改めて、書の基本から始めよう、と筆の持ち方、「永」の字、等しかりと教えていただいた。

三年後、先生が学んで教授の免状を取得した全国の書道団体「日本習字教育財団」に毎月提出して励むことになった。

私にとって、まさに「書の再スタート」だった。

最初は毎月、楷書の課題四文字を半紙で提出。ほぼ毎月昇級。楽しかったが、三級になるとそうはいかなくなかった。半紙の課題の他に、七月に七夕競書、十二月に書初競書があり、少し大きめの条幅紙での提出を先生が勧めてくれた。

すると二年後、初段に。先生も喜んでくれ、私も嬉しかった。その時は、よくし三段を目指そう、と。それから三年後、準三段に。さらに三段に。やったあ、私は喜んだが、先生から「まだ道半ば、五段を目指そう」と叱咤激励された。

そして今年七月、七夕競書で大きな条幅紙での提出作品で「五段・教授免許状取得」の知らせが届き、先生からは「この間の努力の積み重ねの成果だよ、おめでとう」とのお言葉をいただいた。版画家の友人が「渡邊は俳句と書に励むといいよ」との言葉を、それらを励みに……、俳句と書の二刀流で。佳句を筆でしたためたい、精進！精進！

# 嫌な再スタート

三上 博史

今回の特集テーマを決める第1回編集会議は令和5年6月26日に開かれた。テーマの「再スタート」については、いつものようにすんなり決まったが、個人的にすぐ思いつくことがあり、私の場合はそのことを書かざるを得ないなあ、と心の中で深いため息をついた。

5年前、当時大阪に住んでいた娘夫婦のところに初孫が生まれた。私は61歳だった。孫娘の顔を眺めながら、この児が18歳を過ぎた頃には、ひよっとしたら東京の大学へ行っているのではないかと、勝手に想像していた。その頃の私は既に80歳近くになっているが、多分一人暮らしをしていて、孫娘もちよくちよく栃木のおじいちゃんのところへ遊びに来てくれているのではないかと、密かに期待したのである。

ところが現実はそのほど甘くない。還暦を過ぎた身体は否応なく老いていく。足腰が弱くなり、人間ドックで指摘されることも増えてきた。昨年66歳になり、いよいよ血圧の薬も服用するようになった。60歳の定年退職直後は、このままの体力と健康がずっと続いていくだろうと思いついて、その人生設計は儚い幻想に過ぎなかった。

2年前、娘夫婦がマンションを買って京都へ引っ越すことを検討していると言ってきた。婿さんの勤める会社の社宅に長く住んでいたが、いずれは退去せざるを得ない。孫娘も3歳になったので、いい区切りになるのだという。

私も人生のターミナルが近づけば、その時は娘夫婦の厄介になることがあるだろう。京都と栃木では余りにも遠距離で介護など到底できない。私が地元の施設にでも入居するような事になったら、娘の家庭も面倒なことになるはずだ。何とか早めに手を打ったほうがいいのかもしれない。

そんなこんなでいろいろと考え始め、自分の終活が具体的に頭を過ることもあった。結論として、70歳ぐらいいまでは京都へ引っ越そう。娘夫婦の近くに中古マンションを買うか借りるかして、隠居生活もどきを始めようと思いついた。

私は衣食住にほとんど興味がない。住む家などは雨漏りがしなければそれで充分であると思っている。

昨年老母が亡くなり、引っ越しに向けての具体的な検討を始めることとなる。持ち家や家財道具の処分など、頭の痛くなるのが山ほど出てくる。墓終いも考えなければいけない。これからの二、三年間で少しずつ進めていくこととなる。

引っ越したら関西の川柳仲間との付き合いが始まるのだろうが、高齢者の身で栃木から離れることがとにかく淋しい。希望などあまり無い。既に鬱々たる思いを抱えている。

昨年亡くなった老母は、死期が近づいても周りに世話をやかせたり、迷惑がかかったりすることをとにかく嫌がった。それを信条のようにして、94歳までを元気に生き抜いた。その生き方、死に方の影響が息子の私にもあるようだ。

唯物論者としての冷やかな視線で我が人生を全うしたい。



# 令和4年度栃木県文芸家協会事業報告

事務局長 三上 博史

## ○役員会

令和4年4月16日 令和4年度役員会を開催／おかりや(出席者：7名)  
令和4年度総会審議案件を審議

## ○総会

令和4年5月22日 令和4年度総会を開催／栃木県教育会館(出席者：18名)  
①令和3年度事業報告、②令和3年度収支決算報告、③令和4年度事業計画、④令和4年度収支予算、⑤令和4年度から令和5年度までの役員等、⑥その他(夏季講演会、会員の増加対策等)、⑦その他(夏季講演会、朝明第11号の編集方針、会員増加対策等)を審議承認

## ○夏季講演会

令和4年8月28日 夏季講演会を開催／栃木県教育会館(参加者：15名)  
講師：堀江一郎氏(文星芸術大学教授)  
演題：「アートとエンターテイメントの間  
—「分業」による作品制作について—

## ○朝明第11号発行に係る編集会議

令和4年6月20日 第1回編集会議を開催／おかりや(編集委員6名が出席)  
①朝明第11号の編集方針(特集のテーマ・表紙デザイン)、  
②原稿提出要領、③その他を審議

10月6日 第2回編集会議を開催／宇都宮市中央生涯学習センター  
(編集委員7名が出席)  
①朝明第11号の表紙デザインの選定、②提出原稿の確認・  
校正、③その他を審議

11月10日 第3回編集会議を開催／おかりや(編集委員6名が出席)  
①初校の校正、②その他を審議

## ○朝明第11号の発行及び合評会

令和5年1月1日 朝明第11号を発行(提出作品総数80編[内訳：創作11・評論  
2・随筆14・詩10・短歌11・俳句3・川柳6・特集「安らぎ  
—小さな集まり—」23]、発行部数340部、12月下旬に会員  
へ2部配付・図書館等へ前年度と同様に配布)

1月15日 朝明第11号合評会を開催／栃木県教育会館(参加者：14名)

## ○とちぶん会報

令和4年7月10日 とちぶん会報第68号を発行・会員へ配布  
10月10日 とちぶん会報第69号を発行・会員へ配布  
12月15日 とちぶん会報第70号を発行・会員へ配布  
令和5年3月15日 とちぶん会報第71号を発行(朝明第11号への意見・感想を添付)・会員へ配布

※ とちぶん会報は、毎号発行後速やかに協会公式ホームページへ掲載

## ○懇親会

コロナ禍により、昨年同様すべて中止した。

## ○秋の懇親旅行

コロナ禍により、事業を計画せず。

## ○寄付金

随筆部門の元会員石田トミ様のご遺族から、協会運営のために10万円の寄付をいただいた。40名の会員から、同様に132千円の寄付をいただいた。

## ○会員からの自著等の受贈

「川柳の神様Ⅱ－秀句の誕生と鑑賞－」三上博史著／発行所・新葉館出版／発行日・2022年2月11日

「詩集 朝の花」岩本久美子(美鳳)著／発行者・岩本久美子(美鳳)／発行日・2022年3月1日

「那須の緒 第15号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2022年1月24日

「那須の緒 第16号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2022年5月14日

「那須の緒 第17号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2022年9月17日

「那須の緒 第18号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2023年1月21日

「道、ふたり」石塚蓉子著／発行日・2022年6月

「同人誌 r e r a 創刊号」編集・生きがい創造舎／発行所・生きがい創造舎事務局／発行日・2022年6月6日

「同人誌 r e r a 第二号」編集・生きがい創造舎／発行所・生きがい創造舎事務局／発行日・2022年12月12日〔

「栃木県現代誌年鑑 2022年版」栃木県現代詩人会編／発行所・栃木県現代詩人会／発行日・2022年12月4日

## ○会員数の動向

令和4年4月1日 80名

令和5年3月31日 69名

／退会者 15名／入会者 4名

# 栃木県文芸家協会規約

## 第一条

本会は栃木県文芸家協会と称する。

## 第二条

本会は下記の事業を行う。

機関誌の発行、講演会、シンポジウムの開催、会員相互の親睦、その他本会の発展に資する事業。

## 第三条

会員は、栃木県在住者またはそれに準ずる者とする。

## 第四条

会員は、小説・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・

川柳の創作者または愛好者とする。

## 第五条

入会は、会員二名の推薦を受けて会長に提出し、正

副会長の承認を受けるものとする。

## 第六条

会員は、著作を刊行した場合、会に一部寄贈するものとする。

## 第七条

退会は、本人の意志によるもののほか、下記の事由によるものとする。

死亡したとき、三年以上会費を滞納したとき、本会の名誉を著しく損なう行為があったとき。

## 第八条

一、本会に次の役員を置く。

会長一名・副会長三名以内・理事若干名・監事二名・事務局長一名・会計一名・顧問。

二、会長・副会長・理事・監事は会員の中から総会において選出する。

三、事務局長(同次長を含む)・会計は会長が指名し、監事を除く職にある者が兼ねることもできる。

四、必要に応じ、顧問を置くことができる。顧問は総ての会議に出席し、意見を述べることができる。

## 第九条

一、会長は会を代表し、業務を総理する。

二、副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その業務を代行する。

三、理事は会務の執行を決定する。

四、監事は会計を監査する。

#### 第十条

一、役員任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠または増員による役員任期は、前任者または現任者の残任期間とする。

三、役員はその任期後においても後任者が就任するまではその職務を行う。

#### 第十一条

会議は、総会・役員会とする。会議は会長が招集し、議長は会長がこれにあたる。

会長に事故あるときは、副会長がその任にあたる。

一、総会は、年一回開催し、役員会が必要と認められたときは会員の五分の一以上から請求があったときは、臨時に開催することができる。

二、総会は次の事項を審議決定する。

- (1) 事業報告及び収支決算
- (2) 事業計画及び収支予算
- (3) 規約の改正
- (4) 役員選出

(5) その他必要な事項

(6) 総会の議事は出席者の過半数の同意により決定する。

#### 第十二条

会計年度はその年の四月一日より翌年三月三十一日までとする。

#### 第十三条

会員の年会費は八〇〇〇円とし、年度内に納入する。

#### 第十四条

会の事務を行うために事務局を置く。場所は会長が指定する。

#### 第十五条

機関誌の発行は編集委員会がこれにあたる。

#### 第十六条

編集委員会は、会長の指名する委員によって構成する。

(付則) この会則は、令和二年九月二十七日から施行する。

# 栃木県文芸家協会会員名簿

(令和5年12月1日現在)

## 〔小説部門〕 16人

|       |           |                            |
|-------|-----------|----------------------------|
| 安西悠子  | 〒321-1261 | 日光市今市467                   |
| 石塚蓉子  | 〒327-0844 | 佐野市富岡町191-13               |
| 紙屋里子  | 〒373-0842 | 群馬県太田市細谷町1427 金谷方          |
| 小林千枝子 | 〒329-0215 | 小山市網戸1853-1                |
| 嶋均三   | 〒329-2712 | 那須塩原市下永田7-1082-12          |
| 島田トミ子 | 〒321-3232 | 宇都宮市氷室町1143-12             |
| 鈴木あぐり | 〒323-0027 | 小山市花垣町1-6-33               |
| 鈴木淳恵  | 〒321-3531 | 芳賀郡茂木町茂木1794-1             |
| 相馬龍久  | 〒321-0964 | 宇都宮市駅前通り2-2-20 駅前通りハイツ507号 |
| 高杉治憲  | 〒320-0004 | 宇都宮市長岡町797-38 篠崎方          |
| 寺崎曉生  | 〒322-0048 | 鹿沼市村井町248-7                |
| 徳永楽遥  | 〒321-0117 | 宇都宮市城南1-7-11               |
| 福田三男  | 〒320-0012 | 宇都宮市山本2-12-2               |
| 福富陽子  | 〒320-0027 | 宇都宮市塙田4-3-15 丁子屋ビル1Fおかりや内  |
| 三浦安臣  | 〒320-0834 | 宇都宮市陽南3-5-2                |
| 吉田稔   | 〒329-1116 | 宇都宮市立伏町462-56              |

## 〔評論部門〕 4人

|       |           |                          |
|-------|-----------|--------------------------|
| 石川文之進 | 〒320-0834 | 宇都宮市陽南4-6-34             |
| 柴田裕巳  | 〒321-0953 | 宇都宮市東宿郷3-5-2 宇都宮東ハイツ 205 |
| 名村忠   | 〒320-0041 | 宇都宮市松原3-8-5              |
| 森羅一   | 〒321-3561 | 芳賀郡茂木町後郷937 久野方          |

## 〔隨筆部門〕 16人

|       |           |                |
|-------|-----------|----------------|
| 大出京子  | 〒320-0056 | 宇都宮市戸祭4-9-19   |
| 大野比呂志 | 〒322-0029 | 鹿沼市西茂呂1-7-1    |
| 国井和子  | 〒321-3423 | 芳賀郡市貝町市塙2108-1 |
| 国母仁   | 〒321-3233 | 宇都宮市上箆谷町3340-1 |
| 小島延介  | 〒320-0851 | 宇都宮市鶴田町1893-2  |
| 小林博   | 〒322-0045 | 鹿沼市上殿町869-17   |

|        |           |                         |
|--------|-----------|-------------------------|
| 三本木 昇  | 〒329-3132 | 那須塩原市北弥六415-136         |
| 柴崎 幸子  | 〒321-0942 | 宇都宮市峰3-1-29 田中方         |
| 関根 喜久枝 | 〒320-0017 | 宇都宮市戸祭台41-12            |
| 舘野 ひろ子 | 〒321-0143 | 宇都宮市南高砂町6-8             |
| 中村 昭夫  | 〒320-0057 | 宇都宮市中戸祭1-12-24          |
| 人見 智子  | 〒320-0017 | 宇都宮市戸祭台56-2             |
| 藤田 香月  | 〒324-0244 | 大田原市蜂巢580-6 郡司方         |
| 古谷 耀子  | 〒320-0043 | 宇都宮市桜5-1-28             |
| 松林 厚子  | 〒320-0851 | 宇都宮市鶴田町1195-32          |
| 水野 弥彦  | 〒329-1577 | 矢板市玉田415-48 コリーナ矢板E1214 |

〔詩部門〕 11人

|        |           |                   |
|--------|-----------|-------------------|
| 岩本 久美子 | 〒322-0068 | 鹿沼市今宮町1638        |
| 貝塚 津音魚 | 〒324-0035 | 大田原市薄葉2072-7      |
| 神長 昭治  | 〒329-1578 | 矢板市山苗代361-3       |
| 神山 暁美  | 〒321-2105 | 宇都宮市下小池町560-34    |
| こやま きお | 〒321-0933 | 宇都宮市築瀬町2536-4 助川方 |
| 高田 太郎  | 〒321-0942 | 宇都宮市峰2-16-19 増瀬方  |
| 蝶良 君枝  | 〒321-3321 | 芳賀郡芳賀町下高根沢2138-2  |
| 戸井 通夫  | 〒329-1576 | 矢板市石関1121-77      |
| 松本 ミチ子 | 〒320-0817 | 宇都宮市本丸町1-39       |
| 村上 周司  | 〒329-1572 | 矢板市安沢1077         |
| 森 秀夫   | 〒329-1105 | 宇都宮市中岡本町2771-47   |

〔短歌部門〕 11人

|        |           |                  |
|--------|-----------|------------------|
| 大島 孝子  | 〒329-2161 | 矢板市扇町2-5-1       |
| 唐澤 るみ子 | 〒320-0051 | 宇都宮市上戸祭町2936-67  |
| 神野 規子  | 〒320-0861 | 宇都宮市西2-3-18      |
| 佐藤 孝子  | 〒324-0501 | 那須郡那珂川町小川640     |
| 高橋 淑乃  | 〒321-0136 | 宇都宮市みどり野町13-20   |
| 田村 世津子 | 〒321-0225 | 下都賀郡壬生町本丸2-15-31 |
| 橋本 茂子  | 〒329-4217 | 足利市駒場町673        |
| 福澤 悦子  | 〒321-0624 | 那須烏山市旭1-2-4      |
| 増田 律子  | 〒326-0845 | 足利市大前町605        |
| 山崎 緋紗江 | 〒321-0967 | 宇都宮市錦3-9-16      |
| 横山 岩男  | 〒329-0205 | 小山市間々田1013       |

〔俳句部門〕 4人

|         |           |                       |
|---------|-----------|-----------------------|
| 石 井 光   | 〒329-0519 | 下野市大松山1-5-23          |
| 人 見 靖 子 | 〒320-0851 | 宇都宮市鶴田町3358-10        |
| 吉 田 良 二 | 〒320-0003 | 宇都宮市豊郷台2-84-7         |
| 渡 邊 公 之 | 〒320-0848 | 宇都宮市幸町7-21 サークパス幸町503 |

〔川柳部門〕 6人

|         |           |                 |
|---------|-----------|-----------------|
| 石 寄 敬 子 | 〒320-2105 | 宇都宮市下小池町560-41  |
| 善 林 真 琴 | 〒322-0531 | 鹿沼市南上野町206      |
| 松 本 とまと | 〒322-0072 | 鹿沼市玉田町382-29    |
| 三 上 博 史 | 〒321-0226 | 下都賀郡壬生町中央町16-18 |
| 水 上 義 明 | 〒321-3223 | 宇都宮市清原台4-13-13  |
| 柳 岡 睦 子 | 〒321-3536 | 芳賀郡茂木町神井609     |

〔計68人〕

## 役員名簿

(令和5年12月1日現在)

|      |       |      |      |      |
|------|-------|------|------|------|
| 顧問   | 高田太郎  | (詩)  |      |      |
| 会長   | 福田三男  | (小説) |      |      |
| 副会長  | 高杉治憲  | (小説) |      |      |
| 理事   | 国母仁   | (随筆) | 藤田香月 | (随筆) |
|      | こやまきお | (詩)  | 福澤悦子 | (短歌) |
| 事務局長 | 三上博史  | (川柳) |      |      |
|      | 三上博史  | (川柳) |      |      |
|      | 神長昭治  | (詩)  |      |      |
| 会計   | 相馬龍久  | (創作) | 国井和子 | (随筆) |
|      |       |      |      |      |

## 『朝明』編集委員

(令和5年12月1日現在)

|     |      |      |       |      |
|-----|------|------|-------|------|
| 委員長 | 三上博史 | (川柳) |       |      |
| 委員  | 国井和子 | (随筆) | 国母仁   | (随筆) |
|     | 松林厚子 | (随筆) | こやまきお | (詩)  |
|     | 福澤悦子 | (短歌) |       |      |

以上6名に、高田顧問、福田会長、高杉副会長の3名が加わり計9名の構成。

■平成三〇年に朝明編集委員長の任を引き受けて六年となる。今回の編集でいよいよ最後となる。今振り返ると、最初に取りかかった第七号の校正のことが思い出される。初校ゲラを各部門の編集委員がチェックしてから、編集委員長としてそれらのすべてに目を通した。ゲラを読みながら気になるところはすべて元原稿に当たった。

ある日の夜、少し気合を入れてこの作業に取りかかった。ある程度進んだら翌日に回そうと思い、とりあえず寝床に入ったが、その日は朝から集中豪雨の天気が続いて、夜が更けても一向に収まらない。雨音が気になってなかなか眠れないのである。我が家は古い家なので雨漏りを心配していた。どうせ眠れないのならば、寝床でまた初校ゲラの続きとにらめっこする。ようやく眠くなって止める。しかし布団に潜り込んでも雨漏りのことが気がかりで再び目が冴えてくる。それではと、またまたゲラとにらめっこ。そんなことを何度も繰り返していたら、いつの間にか夜が明けてきて、雨も上がっていた。今から思うと懐かしい思い出である。

とにかく一年目はいろいろな気が張っていた。校了してようやく出来上がると、割付を含めていろいろな粗が目につく。校正ミス指摘され、正誤表を作成する。毎号これらを繰り返して、編集委員長として精進が足りないなあ、という忸怩たる思いに襲われる。今号の刊行でやっと解放されることとなるが、私なりにいろいろあった六年間だったと、今更なが

らしみじみ感慨に耽っている。

今回の特集「再スタート」は、集まった原稿を読んでいろいろな再スタートがあるものだと興味深かった。テーマを提示されて自分の思いを巡らす。私の場合はすぐ心に浮かんだことを題材にしたが、じっくり考え込んでから書き始めた方もいるだろう。人生のスタートは生まれた時の一回だけだが、再スタートには、再再、再再再、さらにそれ以上の回数。「再」の意味合いも含まれている。要するに、人生のやり直しは覚悟を決めればいつでも可能なのだ。編集を終えた今、素直に思ったことである。(三上)

■ワープロが普及したせい、最近は日頃使うことが少ない難しい言葉や漢字がよく出てくるようになった。恥ずかしながら、読むことができなくて辞書のお世話になることもたびたびである。平明な文章の中に、日頃使わない言葉や漢字を一つだけボンと放り込んでやると、そのワンワードがアクセント(キーワード)になって文章全体が引き締まる効果があることも事実だが、分からない言葉や漢字がぞろぞろ出てきたのでは、読書意欲も半減する。ワープロは便利なものだし、最近ではほとんどの作家が使うようになったが、安易に変換キーをたたかないことも大切だ。「分かりやすく」が文章を書くときの基本であることは過去もこれからも変わることはないのだから。辞書を片手に「せめてルビぐらい振ってくれ」と思いつつ本を閉じた。(福田)

■庭のハクモクレンの枝が隣の家の敷地にだいぶ入り込んだ。半年ほど前に脚立に乗って自己流で切った枝が一メートル以上伸びている。重い腰を上げて枝切りばさみを持った。

足元の雑草はもつとしぶとい。令和五年の夏は暑かった。夏の早朝汗だくになって草むしりをして、ほっとしたのもつかの間、一週間もすると新しい草が次々に生えてきた。草花を愛した博士は、「雑草という名の草はない」と名言を残したが、私にとつて庭の雑草は目の敵だ。かといって除草剤を撒く気にもなれない。かくて我が家の庭には今日も様々な草がはびこっている。

(松林)

■今年の作品は八編でした。昨年よりかなり少ないのが気になりました。作品数が減ったことについてはいろいろ考えられますが、一つには会員の高齢化があるのではないかと考えられます。新しい会員をいかに増やすかがこれからの喫緊の課題となります。今回も手書きの作品がいくつもありました。手書きの作品に出合うとほっとするのは何故なのかと考えると、丸みを帯びた文字や角張った文字の温みにあるのではないかと思います。作者の性格や息づかいが直に伝わってきて癒されます。これからも手書きの作品が増えることを期待します。

(国母)

■今回は一〇編の詩が届きました。詩を書かれた多くの方は、なにかの同人に属しているようです。できれば同人の方にもとちぶんへのお誘いをしていただけると、詩の部門もにぎやかになると思います。とちぶんの催事として出来ればのお話ですが、詩の朗読やほかの分野の方とのコラボで、展示をするとかの発表の機会があれば、多くの方に詩がもつと身近な文芸として理解していただけたらと思います。そして、詩を書くということが特別なことではなく、誰もが書けるものだと思うでしょう。そのためにも詩の部門の参加人数を増や

す努力をしましょう。

(こやま)

■短歌部門の出詠者は九名。前回の一一名から二名減は寂しい限りです。さらに二名減の中の一名が横山岩男さんであることに胸が塞がる思いが致します。心からご冥福をお祈りします。寄せられた作品の背後に居られる作者お一人お一人の息遣い、心の温かさ、叫びなどが伝わって来て、感動しました。体が深呼吸するように、心の翼が押し広げられていくような豊かな気分になりました。短歌に心を寄せ合う同志という親近感を覚え、もつと多くの方々とも気持ちを分かち合えたらと思いました。短歌結社による月刊誌、隔月刊誌、季刊誌などが経営難で次々と廃刊に追い込まれている現在、「朝明」は貴重な発表の場を提供してくれています。さらに多くの方々がお仲間に加わって下さることを願っております。編集方針として作品には一切手を加えていないことを付記します。

(福澤)

■今回の特集に提出された二三作品は、そのテーマである「再スタート」がタイムリーだったお蔭か、作者の人生の過去、現在、未来に関わる深い感慨を覚えるものが多かった。生きていればこそ誰にも再スタート、出直しの時がある。しかし、そこには、戦争、失敗、絶望、発見、希望、決意、覚悟、開花などを織りなす人生が物語られている。その文脈や視点の中に、作者各位が所属している創作、随筆、詩、短歌、俳句、川柳、各々の自分の持ち味と空気が感じられ、心踊らされたり仄々とした気持ちにさせられたりした。次号の作品を楽しみにしたい。

(高杉)

## 表紙作品と作者

### 作品名 人形「旅する仲間」

童話「オズの魔法つかい」から、知恵と力を  
合わせて冒険の旅を続ける仲間たちです。



### 作 者 さきや みつえ

1954年 那須町生まれ

1975年 作新学院短期大学幼児教育科卒業

1978年 脊髄上衣腫発病により幼稚園を退職後、粘土人形や彩色レリーフの制作を始める。

1987年 国際人形フェスティバル参加

1988年より 学童保育、図書館、公民館、障害者施設などで「粘土であそぼう教室」の活動を続ける。

県内外で個展、グループ展等

現在 那須町在住

## 朝明 第12号（通刊57号）

2024年1月1日発行

定価1,500円

発行所 栃木県文芸家協会

発行人 福 田 三 男

編集長 三 上 博 史

事務局 〒321-0226 栃木県下都賀郡壬生町

中央町16-18 三上方

TEL 090-9318-2492

印 刷 鈴木印刷株式会社



